された時の狀態を想像するのは、容易なことである。いふまでもなく、その時地中海は、海面が縮少して、外界の海洋よりも低下した水面の水を、その中に湛へることになる。今日の裏海は、この狀態である。尙ほまた死海は、この狀態が更に甚しいものである。

この理論が正しいとするならば、今日紺碧の波を湛へてゐる地中海が、嘗ては廣大な陸地であり、その陸地は惠まれた氣候のものであつたはずである。多分またこれが、最後の氷河時代の狀態であつたであらう。それが、それからどの位の後の時代のことか、われわれにはわからないが、この地中海盆地に、大洋の水が再び押返へし て來るやうな大變動が起つた。アジール人や、新石器時代人は、今では水の底に沈んでゐるかうした地域の谷や森の中を歩き廻つたはずである。新石器時代の暗白色人、すなはち地中海人種は、この失はれた地中海谿谷で、定住と文化の開幕をさして、近づき來つたことであらう。

このことに關するダブルユー・ビー・ライト氏の說は、極めて興味あるものである。氏は地中海盆地に嘗て二つの湖水があつたことを暗示してから、かう述べてゐる。

「東の窪地にあつたものは淡水湖であるが、その水が西の窪地の別な湖の方に流れ出して涸れてしまつた。もし氷原の消散の結果、大洋の水面が再び高くなつて、それが地中海地域に注ぎ込み始めたとしたら、その時何が起るかを考へることは興味がある。流れ込む水は始めの間僅かではあるが、入口が浸蝕されて徐々に低くなり、大洋の水面が徐々に高くなると、注入の水量はやがて增大して、莫大な擴がりとなる。もしまた海峽の口に固くない部分でもあるならば、結果はまつたくの大洪水である。地中海のやうな、かかる大盆地を充たすためには、どんな巨大な奔流でも、長時間を要するはずであるが、その結果から見て、兎に角同じやうなことが起つたことを斷言すべきである。尤もこれは粗野な空想に過ぎないと見えるかも知れない。しかし實のところ、單なる空想ではない。もしジブラルタル海峽の海底の等高線圖を調べるなら、巨大な谿谷が地中海の深所から起つて、海峽を眞直に横斷し、更に大西洋の海底の砂洲の中をある距離まで掘つてゐることを見出すであらう。この谿谷、すなはち咽喉は、多分內部放水時代の終末に於ける大洋の奔流の作用に因づくものである。」

この地中海の再現期は、大まかな年表に依れば、紀元前約一萬五千年乃至一萬年である。これは人類の有史以前に於ける最大の出來事である。もし一萬年說が眞に近いとすれば、文化の生々しい起原も、最初の湖上家屋生活も、また最初の土の香に咽ぶ耕作も、恐らく東方の、ナイル・アドリア・紅海の三河の注ぐレヴァンティン湖の周圍に、その發生を見たであらう。

突然大洋の荒浪は、西方の山々を破り越へて、かうした原始人の頭上に奔騰しはじめた——かれらの家庭、かれらの友であつた湖水は、かれらの敵となつた。嵩を增した水は決して減らなかつた。かれらの定住地は水の底に沈んだ。水は逃げて行くかれらを追求した。日毎に、年毎に、水は谷々に擴がつて、人類を狩り立てた。多數

の者が引切りなしに嵩を増して來る鹽辛い洪水のために、圍まれて捕へられた。洪水はやむことを知らない。水勢は益々迅くなつて行く。木々の梢を越へ、山々を越へて高くなつた水は、やがて今の地中海の全盆地を浸し、やがてまたアラビヤやアフリカの山々の崖を這ひ上つた。遠い昔、有史時代の夜明前に、この悲劇が起つたのである。

かうして水の薄紗（ヴェール）が曳かれた。早くもその下に包まれたものは、人類社會劇の序幕の最も魅力的な幾多の場面である。

第十章　初期の思想

一　原始的哲學

今から六七千年前、人間がいかに最初の都會に寄り集るに至つたか、またそれまでかれらの最高の政治的結合であつた漠然たる部族生活から、いかにより以上のものに發展するに至つたかを述べる前に、人間の頭腦の中に起つた事柄について一言したい。その頭腦こそは、猿人時代から五十萬年の長期間を通じて、成長し、發達し來つたものである。

さうした悠久な年代に、人は自分について、またこの世界について、抑〻また何を考へてゐたであらう。最初人間は、直接的な事物以外には、考へることをしなかつた。その時分、彼はかうしたことを考へるに忙しかつた。

「ここに熊がゐるぞ。どうしようか。」

また。

「あすこに栗鼠がゐる。どうして取つたものだらう。」

言語がある程度まで發達しないかぎり、實際的な經驗の範圍以上に考へることは出來ない。言語は思想の道具であつて、簿記が商賣の道具であると同じやうなものだからである。言語は更に複雜な觀念に到達する思想を記錄し、決定し、且つ可能ならしめる。言語はしつかり握つて、持つてゐるところの心の手である。

原始人は、話をすることが出來なかつた時分、極めて鋭い眼附で見たり、極めて巧みに物眞似をしたり、身振りをしたり、笑つたり、踊つたりしたであらう。そして自分が何處から來たものかとか、なぜ生きてゐるのかとかいふやうなことについては、一向考へてみようともせずに暮してゐたことであらう。彼は暗さを恐れ、雷鳴を恐れ、巨大な動物を恐れ、また不思議な物事と、夢に見るあらゆる物事を恐れる。彼は恐ろしいものや、自分の運命を變へるものを宥めようとし、岩石や、動物や、河などの想像的な威力を和げようとする。彼は生物と無生物を、はつきり區別することが出來ない。ステッキが彼を傷ければ、足蹴にする。河が泡立つたり、洪水を起したりすると、怒つてゐるのだと考へる。彼の思想は今の四五歳の利發な子供の程度でしかない。彼は子供と同じやうに、わけもなく移り氣であり、また氣儘である。しかし言語を殆んど持たないか、またはまつたく持たないから、氣まぐれが起つても、それを進めようとしないし、因襲を發達させようとも、それについて一致行動を取らうとも思はない。

後期古石器時代人の繪を見ても、太陽や、月や、星辰や、森について、何の注意も拂はなかつたことが窺はれる。多分晝と夜を、太陽と星を、森と山を、あたりまへのこととして——恰度子供が食事時間や、許された育兒室の梯子段を考へるやうに考へてゐたことであらう。またかれ等の繪には幻想や、幽靈や、それに似たものは何も描いてゐない。要するに馴鹿人の繪は恐怖のない、日常茶飯の物事に盡きてゐる。畏敬的な題材については、何も取扱つてゐない。かれ等は動物を描くと、その動物がかれ等のところへ近づいて來るものと、考へてゐたらしい。だからかれ等の繪は、狩獵に幸運を求める魔法の繪である。禮拜のための繪ではない。作品のどれを見ても、宗教的、乃至神祕的な象徴と思はれるものは、何一つない。

その生活上には、いくぶん、謂ふところの物神崇拜 fetishism を持つてゐた。彼はその願望を達するために、今日のわれわれから見れば、不合理と考へざるを得ないことをしてゐた。——それが物神崇拜となるのである。それはほんの當推量や、誤つた類推に基づく間違ひの科學に過ぎない。性質上宗教とは全然別個のものである。彼は夢に興奮する。その夢は時々、醒めてゐる時の印象とごつちやになつて、彼を當惑させる。

彼が死人を埋葬したといふので、且つまた後期ネアンデルタール人さへ、食物や武器と一緒に、死人を埋葬したといふので、彼が來世を信じてゐたと論ずる人がある。しかし、初期の人々が死人を食物や武器と一緒に葬つたのは、ほんたうに死んでゐるのかどうか、わからないためであつて、死人に靈魂の不滅を信ずるのとは別であ

るし、且つまた死人た夢に見れば、かれ等の不斷の活力が補強されると信じてゐるためであると考へる方が、もつと合理的である。かれ等は死人に狼憑（おほかみつき）のやうなものがあるものとして、死人を宥めようとしたものかも知れない。

馴鹿人はあまりに聰明で、またあまりにわれわれに似てゐるから、多分言葉を持つてゐたかもしれない。しかしその言葉も、直接的な叙述や、事實の話以上には、あまり役に立つたとは思はれない。彼はまたネアンデルタール人や、彼自身のネアンデルタール型の祖先や、ある類人猿などよりも、より大きな團體を作つてゐた。しかしどんな大きな部族であつたかは、わからない。狩獵の收獲が夥しい時以外は、獵人仲間は多勢一緒にゐるわけには行かない。さもないと、かれ等は飢ゑなければならないであらう。

ラブラドールでカリブー（北米産馴鹿）によつて生計を立てるアメリカ土人は、馴鹿人と同じやうな環境の下に生活する。カリブーが食を求めて散つて行くと、アメリカ土人は小さな家族群に分れて散つて行く。しかし季節が來て、カリブーが集つて來ると、かれ等もまた集合する。この時が交易と祭と結婚の時である。

アメリカ土人の最も低級な者でも、馴鹿人よりは一萬年以上悪ずれがしてゐるはずである。しかしこの集合離散の狀態は、馴鹿人のやり方その儘である。フランスのソリュートレに、大きな宿地や、祭場の跡がある。そこでは定めしニュースが取り交はされたことであらう。しかし、思想の交換のやうなものがあつたとは思へない。

かかる生活の中に、神學や、哲學や、迷信や、思索の餘地はない。恐怖。それはあつた。しかしとりとめのない恐怖。幻想、それに想像の氣紛れ（まぎれ）。あつたとしたら、勝手氣儘な、しかも一時の氣紛れと幻想。

多分かうした邂逅に於ては、暗示の力があつたかも知れない。ほんたうに感じた恐怖は、それを傳へるに言葉を要しない。またある物につける値打も、極めて簡單に傳へることが出來る。

この原始的な思想と宗教の問題に於て、われわれが記憶せねばならぬことは、今日の低級な野蠻人が、言語の充分發達しない前の原始人の精神狀態を、殆んど示してゐないことである。原始人は言語の發達しない以前は、殆んど、或はまつたく、傳統を持たなかつた。これに反して、今日のあらゆる野蠻人と、原始的な種族に、沁み込んでゐるものは傳統である——數千の世代を經て來た傳統である。かれはわれ等の遠い祖先のやうな武器と、遠い祖先のやうな生活を持つてゐる。しかし、かれ等の祖先の心の中に、輕く、淺く刻み込まれた印象は、年代から年代に、恒久無邊の世紀を經て、今では深く、且つ複雑な習慣の着物を着せられてゐる。

二　長老

言語の發生する久しい前から、人類は極めて基礎的な心持を持つてゐた。基礎的な心持とは、われわれの遠い祖先が持つてゐた思想や、感情や、生活から來るあるものである。事實、われわれに近い後期古石器時代人の精

神生活は、われわれと同じやうに、古代のより孤獨的な、より動物的な、類人猿的祖先の基礎の上に建てられたものであつた。

今日急激な發展を見せてゐる精神分析學 Psycho-analysis は、われわれの夢や、無意識や、子供じみた考や、またそれが殘つてゐることがはつきりわかつてゐる野蠻的な心持などを通して、われわれの土臺たる原始人の本質を形造る基礎を研究しようとするものであり、この研究に基づいて、われわれの感情の解釋を、打建てようとしてゐるものである。

大類人猿は對となつて、その仔を育てる。仔が牡親を恐れ出す頃は、牡親の嫉妬の的となる。そこで殺されるか、追拂はれるかする。牝達は牡親の奴隷として保護されるあらゆる動物に一般的な狀態である。原始人がこの點で別種のものであると考へることは、理由のないことである。

長老を恐れることは、社會的慧智の始めである。地面の上にうづくまつて暮してゐた原始人の子供達は、この恐怖の中に育てられる。長老に關係のある物事は、かれ等には大抵禁じられる。彼の槍に觸ることも、彼の座に坐ることも、禁じられる。恰度今日の子供が、父のパイプに觸つたり、父の椅子に掛けたりすることが出來ないのと同樣である。

長老は全女性の長である。この小團體の若者達は、いつでもこのことを覺えてゐなければならない。かれ等の母親達は、それを覺えてゐるやうに、かれ等に教へ込む。母親達はかれ等に、長老に對する恐怖と、尊敬と、注意とを、追々と泌み泌ませる。

あることをしてはならぬといふ考、戒律 tabu に對する考、觸れてはならぬといふこの考は、極めて初期の時代から、原始人の頭の中に泌み込んでゐた。ジェー・ジェー・アトキンスンは、その著書「原始法」Primal Law に於て、全世界の野蠻人中に見出されるこの原始的な戒律類を分析して、兄弟と姉妹を分ける戒律や、繼母から逃げたり隱れたりする戒律を例に上げ、その根本的原因を長老に對する恐怖心に歸してゐる。若者はこの原始法を尊重することに依つてのみ、長老の怒を和げることが出來るのである。

長老の死後に於てさへ、その機嫌を取らうとする心持、これは了解し得られないことではない。原始人は長老の惡夢に、夜な夜なうなされることであらう。ほんたうに死んだのかどうかは、わからない。長老は眠つてゐるのかも知れないし、それとも死んだふりをしてゐるのかも知れない。長老が死んでから餘程經つて、彼を現はすものとしては、塚と巨石だけしか殘らなくなつた時分、女達は長老がどんなに恐ろしいものであつたか、またどんなに偉いものであつたかを、子供達に繰りかへして話して聞かせる。そして、自分の部族で恐怖の的であつたかぎり、他の部族や、敵の部族でも、恐怖の的であつたにちがひないと考へることは當然である。彼は生きてゐる時分、自分の部族で威張りちらしたが、自分の部族のために戰つてもくれた。彼が死んだ後でも、恐れない理

由はないではないか。かうした長老に對する考は、原始的な心には極めて自然であつて、それが後に發達を遂げることは、あり得べきことである。しかもこの長老を恐れる心持が、部族的な神に對する恐怖へと、眼に見えぬ程度で次第に進んで行く。

長老の場合と對照して、更に人間的で、情深いものは、母親である。母はその子を扶け、養育し、且つ忠告を與へる。父に從ふことと、父を恐れることを、その子に教へ込むものは、母である。かの女は片隅で囁く。そして神祕を教へる。

フロイドやユングの精神分析學は、父への恐怖と、母の愛が、人間の心を社會的必要に適應させるために、どんな重要な役割を勤めたかを、われわれに教へるものである。精神分析學者は子供じみた願望や、夢や、想像を徹底的に研究する。かれ等は同時に、原始人の魂の再建に、大なる貢献をする。

要するに、原始人の心は、頑强な幼兒の心である。原始人は家族内の神に卽して、宇宙を見る。長老に對する恐怖や、嫌惡の情は、周圍の危險な動物に對する恐怖心と混合する。現代の幼兒ですら、父に時々熊の役をさせる。原始人が神の始まりなる長老に、動物の形を着せることは、むしろ當然である。

女性なる女神は、より慈愛深くより微妙である。扶助し、保護し、惠み、且つ慰めるもの、それが母である。しかし、同時に長老の露骨な野獸性以上に、ある不可解なものが、女性にある。すなはち、大なる神祕である。女性は原始人の眼からは、恐怖の衣に包まれてゐた。女神は恐れられた。女神は祕密な物事と交渉のあるものとして考へられてゐた。

三　恐怖と希望

原始人が心に懷いてゐた基礎的な心持が、もう一つある。それは傳染病の神祕的な襲來に因づくところの不淨や、呪はれたものの思想である。そしてこのことから、特殊な場所や、人や、特殊な健康狀態にある人を嫌惡する心持が起る。ここに別種の戒律の根柢がある。

人類は精神生活の初期から、場所や物事について、不吉の感情を持つてゐたものと思はれる。陷穽を恐れる動物は、この感情を持つてゐる。虎は糸屑を見附けても、藪の道を變へる。しかも動物ばかりではない、人間の子供も、乳母や大人の仕向けやう一つで、物事を恐れる癖がつく。ここに更に別な心持、嫌惡と忌避の心持が、必然的に人間に湧上がつて來る。

言語が發達し始めると、かうした基礎的な感情の上に言語が働きかけて、それらを系統化し始め、そして心の中にそれらを蓄へさせる。人々は共に話し合ふことに依つて、各自の恐怖を强調し合ひ、禁じられてゐる事や、不淨なものの戒律に關して、共通の傳統を作り上げる。不淨の心持に伴つて、淨めるといふ心持や、呪はれを解

くといふ心持が起つて來る。この淨めることは、賢い老人や老婆の教へや助けによつて執り行はれたものであらう。またこの淨めることの中に、初期の宗教的方便や、妖術の根原がひそんでゐたであらう。呪はれを解くために、また惡を取り除くために、また確めたり、證據立てたりするためには、威力のある事柄をしなければならない。そこで、生命のある者を殺すことや、血を流すこと以上の威力のあることはないはずである。

言語の發生は、その始めから、これまで言葉を持たなかつた親達から授けられた單なる物眞似の教育や、殿付けの教育に有力な影響をもちきたしたに違ひない。母達は子供に話で教へたり、言葉で叱つたりしたであらう。言語が發達すると、子供達は經驗と信念を得て、それがかれ等に力を與へたことに氣付くか、さもなくばそれがかれ等に力を與へるやうに思はれて來る。そこでこれを祕密にして置かうとする。

人間の心には、二つの流れがある。一つは物事を祕密にしようとする氣分、もう一つは後代の起原に屬するものであるが、驚かして感動させるやうなことを話さうとする氣分である。今でも多數の人は、祕密を話すために祕密をこしらへ上げる。初期時代人の祕密は、感動し易い若者に、事柄の眞僞は兎に角として、ある傳授法で、印象深く傳へたものと思はれる。のみならず、人間の心には教師染みた精神が漲つてゐる。多數の人々は「他人に話してはいけない」が好きである。男の子や、女の子や、女達に對する大袈裟で不合理な禁制は、人類史上極めて初期から這上つて來たものであり、且つかれ等に強ひられた、むしろ快感の伴ふ事柄であつた。

生贄には二つの起原がある。一つは長老を宥める心持と、もう一つは威力のあることをして貰はうとする心持からである。生贄は恐らく贖罪よりは、むしろ魔術であつた。それは呪ひを解く。禍を取除く。それにまた、部落的な神に祭り上げられた長老が、心の中でそれをよろこぶにちがひないと、かれ等に考へられたところから、それを執り行つたものである。

四　星と季節

かうした考や心持の中から、人間生活に於ける最初の類似宗教の要素が發生する。戒律や、禁制や、儀式の傳統は、言語の發達と相俟つて、强固なものとなる。そしてそれが發達して行く。今日の野蠻人や、半開人で、かうした傳統の網にかからないものはない。

原始的な遊牧人が現はれて來ると、かうした慣習は更に擴大する。これまで顧られなかつた物事も、人間生活に重大な意義のあることがわかつて來る。新石器時代人は書間だけ食物を要求する初期の狩獵人から異つた心持を持つ遊牧人であつた。彼は方角の觀念や土地の形勢をよく知つてゐる。彼は晝と同樣、夜も家畜の群を監視しなければならない。晝は太陽が、その後で夜は星が、彼の移動を導き助ける。幾時代も經つた後で、星が太陽よりも一層確かな道案內者であることに氣がつく。特殊な星や、星座を覺え始める。そこで、原始人が、ある個々

の事物を見分けることは、その事物の個性と人格を認めることになる。多分彼は目立つ星を人間と見て、かう考へたに違ひない。立派な、氣高い、信頼することの出來る人が、夜になれば、大きな眼を見張つて、自分を見詰めてゐるのだ。あの人々は夜ごとにやつて來る。部族の神樣が自分を助けてくださるやうに、あの人々も、常に自分を助けてくれるだらうと。

原始的な耕作は彼に季節の觀念を強調させる。種蒔時になると、その特殊な星が天上を支配するはずである。高いところに、山の頂か、何かの上に、大きな星が夜毎に動き出す。星はそこに立ちどまつて、やがてまた夜毎に消え失せる。たしかにこれは賢人に告げ知らせる無言の、不思議な默示である。

農業の起つたところは、亞熱帶地方か、それとも一層赤道に近い地方であつた。そこでは大きな一等星が溫帶居住者には想像も出來かねるほどの壯麗な光で燦めいてゐる。そこではまた北の國のやうに、雪や嵐で季節が明白に印づけられるやうなことはない。いつ雨期が來るか、いつ洪水が起るかを知ることは、甚だ困難である。しかし、星は嘘を吐かない。

新石器時代人は計算を知つてゐた。そして數の呪ひにかかつてゐた。野蠻人の言語は五つ以上の數には、言葉がない。ある種族は二つ以上を數へることが出來ない。しかし新石器時代人は、ヨーロッパに來た時分はもちろん、故郷のアジアやアフリカでも、自分の蓄積した持ち物を數へることを、すでに知つてゐた。彼は符木を用ゐ始めてゐたが、三角形が三であり、四角形が四であることを訝かしがつた。それにまた、十二のやうな數が、ある數で容易く割切れたり、十三のやうな數が割切れないのを不思議がつた。十二は彼に取つて高貴な、寬大な、親密な數となり、十三は評判のよくない宿無者のやうなものだと考へた。

人間は多分新月や滿月を時計にして、時刻を計つたものであらう。月の光は遊牧人に取つて、重要なものであつた。彼はもはや狩りをすることをやめて、家畜の群を監視してゐた。月の光は多分また、彼以前の原始人や、地上型類人猿的祖先に取つて、さうであつたやうに、戀をする時でもあつた。

しかし、農業が發達すると、月の容子から、もつと大きな四季の循環に注意が向けられる。原始人は寒くなると、冬の來る前だけ漂浪した。新石器時代人は、冬の來ることをはつきり知つてゐた。そして飼料を、續いて穀物を貯へた。彼は種蒔時を、しかも好都合の種蒔時を、ぜひとも心得てゐなければならなかつた。さもないと、種蒔は失敗する。

最も早い時代の記錄に現はれた計算は、月や、人間の世代に依つたものである。農業の發達につれて、月による毎月の計算を、太陽による一年の計算と一致させる困難な仕事が始まつた。この仕事は、今日の曆の上に、傷痕を殘してゐる。復活祭は年毎に落着きもなく移動して、遊山者を甚だ苦しませる。季節が不都合なほど早く來たり、遲く來たりする。この昔の月に依る時刻の割出しのためである。

人間が一定の目的を以て、家畜や、その他の財産を携へて、ある場所からある場所へ移動しはじめると、やがてかれ等は嘗て行つたことのない他の場所のことが、考へられるやうになる。そしてそこがどんな所だらうといふやうなことが想像されて來る。またある谷間に暫く留まつてゐでもすると、どんなことをして辿り着いたかを思ひ出す。そこで「ここにあるこのものやあのものは、どうしてここまで來たのだらう」と訊いてみたくなる。それから、山の蔭に何があるかを知りたくなり、沈みゆく太陽を見れば、雲の上に何があるかを知りたくなる。

五　物語と神話

言語の發達につれて、物事を話す能力が進歩した。古石器時代人の單純な各自の空想や、散漫な物神崇拜的の習慣や、基本的な戒律やは、漸く發達した言葉に依つて傳へられて、今までよりも系統立つたものとなつて來た。自分達のことや、部族のことや、戒律のことや、またなぜ生きてゐるのかとか、何のために生きてゐるのかとかいふやうなことについて、かれ等は物語をするやうになつた。部族精神が發生した。これが傳統である。

古石器時代人は、野蠻人よりも、更に自由な個人主義者であり、また更に藝術家であつた。新石器時代人は、規定の中に生きて來た。彼は幼い時分から、すべきことと、してはならぬことを教へられた。彼は物事について、自分の獨自の思考を作り上げるだけの自由を持たなかつた。彼は自分に與へられた思想を取入れた。彼は暗示の新しい威力に屈伏した。

言語を多く知り、言葉を多く使用することは、必ずしも精神力の增大を來たすものではない。言語自身は有力なものではあるが、同時に危險なものである。

古石器時代人の言葉は、主として物の名であつた。彼はあるが儘に名を用ゐた。しかるに新石器時代人は、この言葉について考へた。彼は夥しい言葉の混亂に陷りながら、たくさんな物事について考へた。そして馬鹿げた結論に到達した。言葉を以て、彼は自己の種族を結びつける網を編んだ。しかしその網は彼の足まで縛りつけた。各自の結合が、新らしい、より大きな、より實力のある團體を生んだことは事實である。しかし、代價を拂はなければならなかつた。

新石器時代のメンヒアと古代に建てた石亘とは、戰の場所を紀念する標と墓とを兼ねたものである。

新石器時代の繪畫彫刻の發達は、古石器時代の彫像の刺戟を與へるところが頗る興味がある。

新石器時代人の卓越した素質を傾倒した自由直截な藝術家的衝動が、徹底的の缺乏を示したことである。われわれは顯著な勤勉や、甚しい熟練や、磨かれた石器や、きまりき

つた模様の陶器や、あらゆる事物についての協力を認める。しかしながら、個性的な創造力については證跡がない。自制が人々の間に始まつてゐた。かれ等は共同の利益の生活を目指して、長い、曲りくねつた、多難の小徑に分け入つたのだ。今日尙ほ踏みにじられてゐるその個人的衝動のあらゆる犧牲を以て。

神話の中に屢ゝ現はれて來るものがある。新石器時代人は、蛇について、甚しく深刻な印象を受けてゐたし、太陽については、もはや當り前のこととは考へられなかつた。新石器時代文化の行き渡つたかぎりの場所では、太陽と蛇を結合しようとする傾向を、裝飾物や禮拜物の上に現はしてゐる。この原始的な蛇崇拜は、遂には蛇が人間生活上に極めて實際的な意義を持つ地方を超えて、更に遠く擴がつて行つた。

しかし、新石器時代の生活が傳播したその中心地が、やがて明かになる時が來たら、その國こそ、蛇と太陽の光が最も重要な役割を持つ國であるにちがひない。

六　宗教の起源

農業が始まると共に、人間の心の中にさまざまな新らしい思想が湧き起つた。かうして種蒔と生贄との關係についても、因襲的な連絡を生ずるに至つたことは既に述べた通りである。種蒔は經濟上の最も重要な行爲にほかならない。それが人を殺すといふ想像し得る最も强烈な行爲と結合することは自然である。サー・ジェ！・ジ！！フレーザはこの連絡觀念の發達に關して、種蒔時に殺される特殊な犧牲者についての觀念や、この犧牲者を殺す特殊な清淨な階級人、すなはち僧侶階級についての觀念や、それからまた部族が犧牲者の恩惠に出來るだけ多く與からうとして、その肉の一片を食ふ儀式たる聖餐 sacrament についての觀念などは、いづれもこれと結合して生じたものだと言つてゐる。

今日尙ほ存續する季節的な犧牲奉獻の大宗教は、かうした起原の上に發生したものである。

かかる事實から、長老の傳統から、男には女を、女には男を繞る情緒から、惡疫や不淨を避けようとする願望から、魔術を通して、威力や成功を望む心の欲求から、種蒔時の生贄についての傳說から、またかうした種類の信條や、心的經驗や、妄想などから、複雜なあるものが人間生活の中に育て上げられた。そしてそれが共同の生活と行動の中で、精神的に、また情緒的に、かれ等を一つのものに結びつけた。このあるものを、われわれは宗教 religion と呼ぶのである。（ラテン語の religare「結合する」に因る。）

これは單純な物事でもなければ、論理的な物事でもない。それは命令する事物や、命令する精靈に關する、神々に關する、また各種の「すべし」や「すべし式」に關する思想のもつれである。あらゆる他の人間の興味と同じやうに、宗教は成長したものである。それは以前に過ぎ去つたもの、すなはち人が——彼の祖先の類人猿や、中世代の哺乳類も同じことであるが——神や宗教の觀念を持たなかつたことから、區別されるべきものである。

ただ、彼の頭腦と理解力は、極めて徐々にかかる一般的な考に堪へるやうになつたのである。宗教は人間の結合とともに、且つその結合によつて成長した。神は人間によつて發見されたものであり、尙ほまた發見されつつあるものである。

青銅時代の器具
第一段右よりの青銅の斧三種、左端銅の斧、
第二段右よりの鎗の穗先、青銅の喇叭、短刀、
第三段右よりの劍と劍の鞘、青銅時代土器三種

この書は神學書ではない。神學上の議論にかかり合ふつもりもない。しかし、宗教的觀念の起原や發達について、また人間の活動に及ぼした影響について書くことは、人間の歴史の重要な中心點である。前に述べたこれらの事實は、宗教の發達に貢獻を與へたものであり、且つ諸家がこれらのどれかに力說を與へたものである。サー・ジェー・ジー・フレーザーは聖餐は魔術的な犧牲に由來すると說いてゐる。グラント・アレンは、ハーバト・スペンサの說に從つて、彼の「神の思想の進化」Evolution of the Idea of God で、長老の死後の禮拜に重點を置いた。サー・イー・ビー・タイラは「原始文化」Primitive Culture で、原始人が生物と無生物のあらゆるものに靈魂の存在を信ずる傾向があることを說いた。そしてまた、エー・イー・クローリ氏は「生命の木」The Tree of Life で、衝動と情緒の他の中心點、殊に深刻な興奮の源泉として、性の問題について注意を求めた。

要するに、新石器時代はまだ精神的發達を示してゐない。彼は教育のある近代人とはまつたく比べ物にならぬ程度で、混亂させられたであらうし、また非論理的になつたであらう。矛盾し衝突する考が、互に鬪爭も起さずに、彼の心の中に住んでゐたであらう。また今ある一つの物事が彼の思想を強く烈しく支配したかと思ふと、次ぎの瞬間には、別な物事に支配されたであらう。彼の恐怖や、彼の行爲には、子供のやうに何の連絡もなかつたであらう。

不思議なことには、協同作業や團體生活の必要と性能の刺戟から、新石器時代人は指導と知識を要求した。かれ等は自分を保護し指導して、不淨から淸めてくれるやうな人物を、また自分の力以上の力を心から要望した。不思議なことには、この要求に應へて、大膽な男か、物識りか、機敏で狡猾な男かが現はれて、魔法使か、僧侶か、族長か、王かになつた。ただわれわれは、かれ等を詐欺師や、權力の簒奪者と考へてはならない。また殘り

の者たちを、瞞された者と言つてはならない。人は誰でもその動機に於ては、異るところがない。日常のあらゆる事物は、どんなに他人を優越しようとする心持を唆ることであらう。ところで、この動機を、善いとか悪いとか言ふのは當らない。魔法使は常に自分の魔法を信じ、僧侶は自分の儀式を、族長は自分の權利を信じてゐる。人類史は各人が幸福に生きるための共同の目的を理解しようとし、そしてその目的に役立ち、啓示するところの共同の意識と共同の知的蘊蓄を、創造し展開しようとする幾分盲目的な努力にほかならない。

王や、僧侶や、魔術師は、諸種多様の形に於て、後期古石器時代と新石器時代に、世界中に出現した。到るところ、人類は知識や、支配力や、魔法の在り場を探してゐた。到るところ、人々は、正直者にせよ、不正直者にせよ、支配し、指導し、または團體の混亂を宥め得る魔法的存在となることを望んでゐた。

後期古石器時代と新石器時代に於ける不思議な發達は、自己毀損 self-mutilation である。かれ等は自分の身體を切りつける。鼻や、耳や、指や、齒や、その他のものを切取る。そしてその行爲に迷信的な意味をつける。子供達の中には、今日でもその心的發達の途中で、同じやうな過程をとる時代がある。幼い女の子に鋏を持たせて獨りで放して置くと、時々平氣で自分の髪を切つてしまふやうなことをする。動物にはこんなことをするものがない。ユダヤ教と回教に於ける割禮 circumcision の儀式は、この痕跡を殘すものである。

後期古石器時代の岩石畫家の單純で、直截で、超越した氣分は、成熟した近代人の胸に興味を唆る。それは少くとも、後の部族神に發達した昔の長老に對する恐怖心に充ちてゐたり、また獻身的贖罪や、自己毀損や、魔法の殺人などの觀念に憑き纏はれてゐたりする新石器時代人の心理狀態が憩へる以上のものである。疑ひもなく、馴鹿人は慘忍な狩獵人であり、殺伐で熱情的な種族であつたが、彼はわれわれが了解することの出來る理由のために殺した。しかるに新石器時代人は、大法螺の威力や、混亂した思想の過程に依つて、勝手な理窟をつけて殺戮した。かれ等は奇怪な、信じられない觀念のために殺戮した。かれ等は恐怖心のお蔭で、命令される儘に、愛する者をも殺戮した。新石器時代人は種時時に犧牲を捧げたばかりではない、族長の埋葬の時は、自己の妻や奴隷を生贄に供した。かれ等は災難に際會すると、神が血に餓ゑてゐると考へて、男や女や子供を殺戮した。

かうした凡てが、次ぎの青銅時代へと移つて行く。社會的意識は、人間の歴史の中でこれまで深い眠りを貪つてゐて、夢さへ見ることはなかつた。この意識が目を覺ます前に、今夢魔に襲はれたのだ。

今から三四千年前、歴史の夜明け前を越えて遠く、眞夏の早曉の微光の中に息づくウイルトシーア高原を回顧する。炬火は明るくなる曙光につれて色が褪せて來る。石敷きの鋪道を進む行列が、幽かな影を搖がせてゐる。獸皮や、角や、けばけばしく彩られた假面を着けて、幻想的に着飾つた僧侶や——畫家の描く法服を着けて物々しい髯のあるドルイド僧 Druid の繪とは違つてゐる——獸皮を着て、牙の首飾を懸け、槍と斧を携へ、大きな頭の髪に、骨のピンを挿してゐる族長や、獸皮や麻布の外袍を纏つた女や、亂髪の男と素裸の子供の見物人の大

群などの行列である。かれ等は遠い所から集つて來てゐる。通路とシルベリの丘の間の地面には、かれ等の宿所が點在してゐる。祭の享樂は今酣である。それにこの群集の中に、豫定の人身御供達が進んで來る。柔順に、力なげに、かれ等が死なねばならぬ遠い彼方の焔を上げてゐる祭壇の方を見詰めながら——收穫の豐作と、部族の繁榮をもち來たすために。

波打際の泥の中の發生地からここまで來て、生物は三四千年前の時代まで、今やつと辿りついた。

初期思想發達期の新石器時代年表

紀元前	ヨーロッパ	エジプト	メソポタミア
18,000	草原時代 馴鹿人去る	人類新石器時代に入る 農業始まる	
15,000	森林時代 （過渡時代） アジール期		
13,000			
10,000	新石器人ヨーロッパに擴まる		
	太陽巨石文化發達		
8,000	最初の湖上家屋		スメル文化の黎明
6,000		第一王朝 ピラミッド	青銅 ニップル及エリヅ 最初のスメル文字
5,000			
4,000			
3,000	青銅		
2,000	アリアン系言語擴まる		サルゴン一世
1,000	鐵		鐵
320	アレクサンドル大王（ケーザル）		
50	基督教時代		
0			
1,940			

第十一章　人　種

一　人類の分化

先づ、屢〻不用意の間に用ゐられる「人種」といふ言葉の意味から、述べてみよう。

廣く世界に擴がつて、氣候の差異を征服し、異つた土地の異つた食物を攝り、異つた外敵を襲つた人類は、相應の地方的な修正 modification と分化 differentiation を受けて來たはずである。

人類は他の生物の凡ての「種」のやうに、絶えず幾つかの「種」に分化して行く傾向を持つてゐる。一團の人間が孤島か大洋の中に、それとも沙漠か、山脈で隔てられて孤立するならば、程なく特性の發達を促して、その地方的狀態に適應するであらう。しかしながら、人間には一面漂浪的な、且つ冒險的な性質がある。かれに取つて、越え難い障壁はない。人間は人間を眞似て、戰つて、人間を征服して、互に雜婚する。かうして數千年來、二つの力が相並んで作用した。一つは、人間を多數の地方的變種に分けようとするものであり、他は別な「種」が完成する前に、これらの變種を混合し、結合しようとするものである。

オーストラリア人型

過去に於て、この二つの力が作用した結果は、一樣ではなかつた。例へば古石器時代人は多分に漂泊的で、新石器時代人以上に廣大な地域を流浪した。彼は家や巢窟に拘泥することもなく、所有物に縛られることもなかつた。狩獵人であつたから、彼はいつもの石穴の移動を續けて行かなければならなかつた。寒くなつて來ると、數百マイルの遠くまで走つた。そこでかれ等は到るところで混血したから、世界中に殆んど變種は起らなかつた。

耕作が始まると、それらの種族は農に適した地方に土着した。そこで分化を促した。この混合や分化は、文化の程度の高低に關係のあるものではない。多數の野蠻民族は、今日でも數百マイルの先まで徘徊する。一方、第十八世紀の多數のイギリス農民は、かれらの父や祖父も以前さうであつたやうに、自分の村から十マイル以上を出たことはない。狩獵民族は屢〻廣範圍に亘つて移動する。例へば、カナダのラブラドールの村には、二三千の土人が

住んでゐるが、かれ等は年々食物を求めて北に南に彷徨する馴鹿の群について歩き廻る。このほんの小數の人間の足跡がフランス全土に等しい面積に及んでゐる。遊牧民族もまた歩く範圍が極めて廣い。カルムック部落は、夏と冬の牧場の間に、約千マイルの旅をするといふ。

古石器時代人は、世界中を廣く渡り歩いて、薄くはあるが一樣に擴がつた。これは古石器時代の遺物が、何處でも驚くほど一樣であるのを見てもわかる。ここにサー・ジョン・エヴァンズの言葉を引用しよう。

「遠い國々の器具で、イギリスのものと形や性質がまつたく同一のものがある。それが一人の手で作られたかのやうに見える……エジプトのナイル河畔で、現在の水面上數百フィートの高所から、ヨーロッパ型の器具が發見された。またアフリカのソマリーランドでは、海面上甚だ高い古代の谿谷から、イッチ・ダブルュー・セントカール氏が、多數の燧石や石英岩の石器を發掘した。その形や性質から推定すれば、フランスのソンム地方及びセーヌ地方、またイギリスのテームス、または昔のソレントの漂流堆積中から掘出した物と同一である。」

人類の歴史に於ては、散布と混合の狀態が土着と特殊化の狀態を交錯してゐる。しかし少くとも人類は古石器時代の末期以來、今から二三百年前まで、全體として分化しつつあつたものである。「種」はこの時代に頗る多數の變種に分化した。しかも、その中の多數は再び他の「種」と混合して、それが散布すると、更にまた分化するか、さもなければ絶滅した。もしまた地方的特色の顯著な地方で、混合が阻止された時は、人類の變種の出現を餘儀なくされた。かうした地方的變種も、その數は決して尠くない。

世界の孤島、オーストラリアのタスマニアには、極めて少數の種族が、一六四二年にオランダ人に依つてこの島が發見されたときまで、初期古石器時代の生活を營んでゐた。今日ではそれが絶滅した。最後のタスマニア人 Tasmanina は一八七六年に死んだ。かれ等は一萬五千年乃至二萬五千年間、他の世界の人類から孤立してゐたのである。

大西洋や中央アジアの高原や、今は無くなつたが、當時の中央アジアの海や、その他の、かうした民族混合の障壁は、長い間幾つかの大群の變種を、それぞれ孤立させてゐた。そしてその分離された各群は、早くからそれぞれ類似點と相違點を發達させて來た。東部アジア、及びアメリカの諸變種の大部分は、もちろん全體ではないが、今日共通點を持つてゐる——黄色味を帶びた皮膚、硬くて黒い髪、且つ時に高い頬骨。

サハラ以南の大部分のアフリカ土人はこれも全部ではないが、黒か、黒味がかつた皮膚、平べつたい鼻、厚い唇、それに縮れ毛である。ヨーロッパの北部と西部の大部分の民族は、薄色の髪、青い眼、赤味を帶びた顔色である。地中海人種の多數は、白い皮膚、黒い眼、黒い髪である。

この地中海人種は北方に、東方に、また南方に、白と黄、それに純黒色と次第に分れて行く諸民族中の中心民族であるやうに思はれる。この人種の髪は黒くて硬いが、黄色民族の髪のやうに硬くはなく、それに波打つてゐ

る。東方は西方より硬い。南インドには褐色がかつた更に黒い皮膚と、硬い黒い髪の民族がゐるが、もつと東に行くと、更に著しい黄色人種がゐる。パプア島、ニューギニア島、その他の群島には、別種の黒くて褐色がかつた、更に低級の型の、縮れ毛の民族がゐる。

ブッシュマン婦人
オレンジ河下流地方

しかしこれは大まかな分類である。アジアの地域の中にも、ヨーロッパ人に似た民族のゐるところがあらうし、アフリカにもアジア型が多分で、アフリカ型の少い民族のゐるところもある。事實日本には髪の波打つ、毛深い、皮膚の色の白い種族、即ちアイヌがゐる。かれ等は周圍の黄色人たる日本人よりも、その顔の型がヨーロッパ人に似てゐる。白人の漂流して來た一派であるか、さもなければまつたく別な民族であらう。またオーストラリアとアフリカから遠く離れたアンダマン諸島には、原始的な黒人がゐる。黒人らしい黒人の一派は、南ペルシアとインドの一部にある。これがアジア型黒人である。

凡ての黒人、即ちオーストラリア型黒人や、それにアフリカ黒人等が、同一祖先から來たものであるといふ證據はない。しかしかれ等は長い間、同じやうな環境の中に生活して來たものである。多分古代の民族は、いづれも薄黒かつたか、または黒かつた。色が白くなつたのは新しいことである。また東部アジアの地域の民族が、皆一つの方向に分化し、アフリカにゐた民族は、他の方向に分化したと考へてはならない。一つの方向に主流が流れることは事實である。しかし、逆流もあれば、渦巻もあり、混流もあれば、復混流もある。地域から、他に洩れて行く漏泄もある。世界の人種地圖は、四色の地域で示すことは出來ない。それはたくさんな色で、塗り立てなければならない。それに中間のぼかしを合せて。

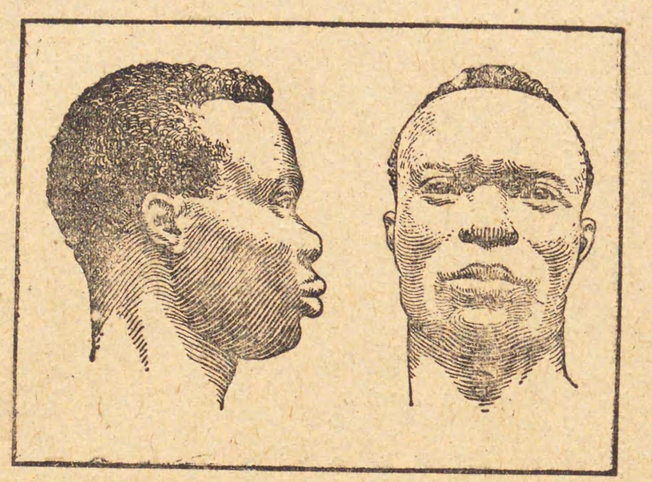
新石器時代の初期——一萬二千年乃至一萬年以前——眞人は世界中で分化してゐた。そしてすでに多數の變種が出來上つてゐた。しかし、かれ等は異つた「種」には分化しなかつた。眞人の唯一の別な「種」たるネアンデルタール人は、歴史が始まる前にすでに絶滅してゐた。

生物學上の用語としては、「種」と「變種」とは區別されなければならぬ。「變種」は混血し得るが、「種」は混血し得ないか、または子供を産むことが出來ない。それは騾馬のやうに不姙である。全人類は自由に混血することが出來る。また同じ言葉を習つて、覺えることも出來る。現代に於ては、人類はもはや少しも分化を受けなくなつたものと思はれる。しかも混合は、次第に烈しくなつて行く。

生物學者の見地から、かう定義することが出來る。人類は分化作用を停止して、更に混合を繰返すある「種」の動物である。

二　主要人種

「種」の分化が停止してゐようと、或は進行中であらうと、それは兎に角として、この「種」の分化のもつれから、人間の諸變種が起つたといふことは、過去五、六十年來始めて考へられて來たことである。それまでは、人類研究の學者達は、ノアの箱船や、その三人息子のセム、ハム、ヤペテの話に意識的か無意識的か影響されて、人類を三つか四つの人種に分類しようとしてゐた。そしてそれをもともと別な祖先から出た別種の人種として、思ひ込んでゐたのである。かれ等は人種の混血や、特殊な地方的孤立や、また變種などについては、何も知らなかつた。分類の仕方に多少相違はあつたが、人類を僅か三つか四つの群に分け盡さなければ承知出來ないと考へてゐたかれ等は、あまりに性急であつたといへる。人種學者達は少數民族の多數について、當初の人種のどれかあれかの子孫であるといふことや、混血であるといふことや、また原型の迷ひ兒であるかないかといふやうなことについて、喧ましく論じ合つた。しかし、どの人種も多少の混血のないものはない。四つの群に分けることはもちろん出來ないことではないにしても、そのどれもが、それぞれ寄せ集めものである。のみならずこの四つの群に屬さない群もあるのである。



黒　人　型

かうした大別法が、どの一群も單純に純粋な人種ではなくて、さまざまな人種の一群であるといふことを、先づ割引して考慮に入れるならば、便宜上この分類法に從つてみよう。

ヨーロッパや、地中海地方や、西アジアには數千年來コーカサス人種 Caucasian と呼ばれる人種が住んでゐる。これは更に二つか三つに細別される。先づ北ブロンド（金髪碧眼）または北歐型 Nordic がある。次ぎが謂ふところの中間型で、これには學者間に異論もあるが、アルプス人種 Alpine である。最後に南方の暗白色人たる地中海人種またはイベリア人種 Iberian がある。

大別に戻つて第二のものは、東部アジアやアメリカに住んでゐる蒙古人種 Mongolian である。一般に黄色の皮膚

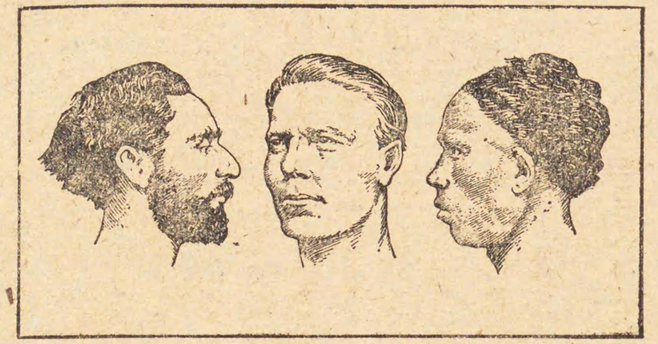
と、硬くて黒い髪と、頑丈な體質をその特色とする。

アフリカには黒色人種 Negro がある。

オーストラリアとニューギニアに住む黒色の原始的なオーストラリア人種 Australoid が第四のものである。これらはもちろん便宜上の分類で、精密に確定したものではない。いづれも主要なある群の共通的な特質を代表するに過ぎない。このほかに、以上の何れにも屬さない少數民族が可なりあるし、以上の四つの人種も、各群の間に常に混血が行はれてゐることを、除外した分類である。

コーカサス人種を二つに分けるか、三つにするかの諸論があるのは、骨骼、殊に頭蓋骨の形の上の差異に分類上の價値を認めるか認めないかに依るものである。讀者は尚讀んで行くうちに、短頭顱 Brachycephalic 長頭顱 Dolichocephalic の術語に屢々遭遇するであらう。いかなる頭蓋骨も上から見て、完全に圓いものはないが、長頭顱は他のものよりも長い。頭蓋骨の幅が後から前までのその長さの五分の四、またはそれ以上ある時は、その頭蓋は短頭顱と呼ばれる。これに對して、幅が長さの五分の四以下の時は、その頭蓋骨は長頭顱である。

ある人種學者は短頭顱と長頭顱の差異を、極めて重要なものとして認めてゐるが、他の一派は、單なる第二義的の差別として、これを輕視する。わたしは後者を推すものである。恐らく民族の頭蓋骨の形は、比較的僅かな世代に於て、特殊な環境の下に變化するものと思はれる。



コーカサス民族の諸型

右より地中海型（ベルベル人）、北歐型（イギリス人）、地中海型（アルゼリアのニダヤ人）

サー・エフ・ピートリに依れば、イタリアのロンバルディ人の頭蓋骨は、二三百年間に長頭から短頭に變つたさうである。またボーアズは米國の移民の頭蓋骨の形が、一代で變つたと言つてゐる。われわれはいかなる影響で頭蓋骨の形が變るのかわからないが、それは丁度、オーストラリアのダーリング地方に住むイギリス人の子孫が、なぜとてつもなく脊が伸るのか、またアメリカのニューイングランド州に移つた人々が、なぜ顎骨が細つて來て、齒が込み合つて來るのか、そのわけがわからないのと同じことである。

新石器時代でさへ、長頭顱と短頭顱の頭蓋骨が、同じ遺跡の中に時々一所に埋められてゐるのが發見される。これは今日の大抵の民族についても事實である。中央ヨーロッパの山岳地方の人々は、割合に短頭型が多い。しかるにスカンディナヴィアでは、長頭型が多い。新石器時代のイギリスや、スカンディナヴィアの初

期の土塚は長い墓の形の塚であり、後期のものは圓形であるが、前者から發見される頭蓋骨は常に長頭であり、後者は、大抵短頭である。恐らく新石器時代の西ヨーロッパに、人種の連系があつたものか、さもなければ、食物や、習慣や、氣候の變化によるものであらう。

この頭蓋骨の形の研究の結果、多數の人種學者は、從來ハックスリがコーカサス人種を北ブロンドと、地中海北アフリカの暗白色、またはブルネット人種 brunet の二つに分けてゐたのを變更して、三つにした。すなはちハックスリのブロンドを、更に二つに細別したものである。一つは北ヨーロッパ型ブロンドで、長頭顱、北方型である。次ぎは地中海人種、またはイベリア人種、暗白色人種ともいひ、髪の黒い、長頭顱である。この二つの間にかれ等は第三の人種を認める。それが短頭顱の、アルプス人種である。

反對派は謂ふところのアルプス人種を、單に北歐型人種、またはイベリア人種の地方的な短頭顱の一變種と見做すのである。イベリア人種は長形の塚を築いた新石器時代人で、始めヨーロッパと西アジアの大部分に多く散在してゐた。かれ等は初期の歴史を支配する。北歐人種は後に現はれた。北ヨーロッパの森林と、西部、中部の沿岸、それにアジアからはひつて來たものである。

三　ブルネット人種

コーカサス人種の一分派たる地中海人種、またはイベリア人種は、北歐型人種よりも、初期に於て廣く散布してゐたが、その特徴は後者よりも少なかつた。その上、黒人との間に南方の境界線を劃することは、極めて困難であつて、中央アジアに於ける初期の遺跡に於ては、初期の蒙古人種との境界もつけがたい。ウィルフレッド・スケーン・ブラントは、ハックスリが「エジプト人とインドのドラヴィダ族の祖先は、同じではないかと久しく考へてゐた。恐らく彼は、初期時代にインドからスペインまで、帶褐色人種が帶のやうに長く續いてゐたことを信じてゐたからである」と言つてゐる。

暗白色人種で、帶褐色人種なるこのブルネット人種が散布してゐたハックスリの所謂「帶」は、インドの先までも擴がつてゐた。かれ等は實に太平洋の沿岸にも及んで、到るところ常に新石器時代文化を創造した所謂文化の開始者であつた。この意味で、かれ等は近代世界の基礎的民族であるとも言へる。

北歐型人種と、蒙古人種は、この基本的な本幹から分れた西北と東北の二つの小枝である。或は北歐型人種は小枝であつても、蒙古人種は黒色人種のやうに、別な同格の、立派な幹であるかも知れない。多分またこの蒙古人種は南支那でブルネット人種と混合して、この別種の幹となつたのかも知れない。或はまた北歐人種は、古石器時代から分れて發達したものかも知れない。グリフィス・テーラは、蒙古人種は蒙古人種と北歐型人種の共通の本幹たるアリアン人種 Aryan から派生したものであると考へてゐる。すべてこれらは、まだ未解決の問題で

蒙古民族の諸型

右端よりアメリカインデアン型（女）、支那型（女）、カルムツク型

あつて、それが解決されるまでには、尚ほ何年かを待たなければならないであらう。

ホラビン氏とわたしは、人種に關する分派を總括するための圖表を、苦心して作り上げた。そしてヨーロッパと、アジアと、北アフリカと、オーストラリアに關するかぎり、地圖の上に重なり合ふやうに工夫した。われわれはまた眞人と、重要な亞人種族の血統的關係を示す圖表も作つてみた。

それからわれわれは、クロマニョン型 Cro-Magnon と、グリマルディ型 Grimaldi について、言はゞ意見をも挿入した。これはヨーロッパに於けるある古石器時代の遺骨に見られる差異に基いて、幾分誇張したものである。グリマルディの遺骨は、類黒人型の痕跡を持つてゐる。かれ等は、赤色インド人に似たクロマニョン人よりも、もつと原始的なボスコップ人種により多く似てゐる。この二人種は同じ地域を漂浪してゐたのかも知れない。一

方は原始黄白人種、他は原始類黒人種とした。

そこで類黒人種と、黒色人種は、先づ本幹から分れてゐる。次ぎに暗白色人種の大幹がある。それから二本の小枝が分れて、一方は北の森林地方に、他は北東アジアの砂塵に煙る沙漠地方に、それぞれ分れて出て行く。森林地方へ行つたのが、北歐型人種であり、沙漠地方に分れたのが蒙古人種である。

もし讀者がもう一度前のパラグラフを見るならば、これらの小枝のどれが本幹たるブルネットから來てゐるかいろいろな觀點から考へることが出來るであらう。またスカンディナヴィア人と、エスキモー人を除けば、北歐型人種にせよ、蒙古人種にせよ、純血民族として殘つたやうには書いてゐない。圖表の小枝が曲りくねつて、ほかの小枝とかち合つてゐるのは、人種的混血を暗示する。

尚ほまた、この圖表には、疑問符が胡椒のやうに振りかけてある。先づこんな風に調味すれば、世上のむづかしくてこみ入つた人種の分類よりも、多分手輕に早わかりがするであらう。

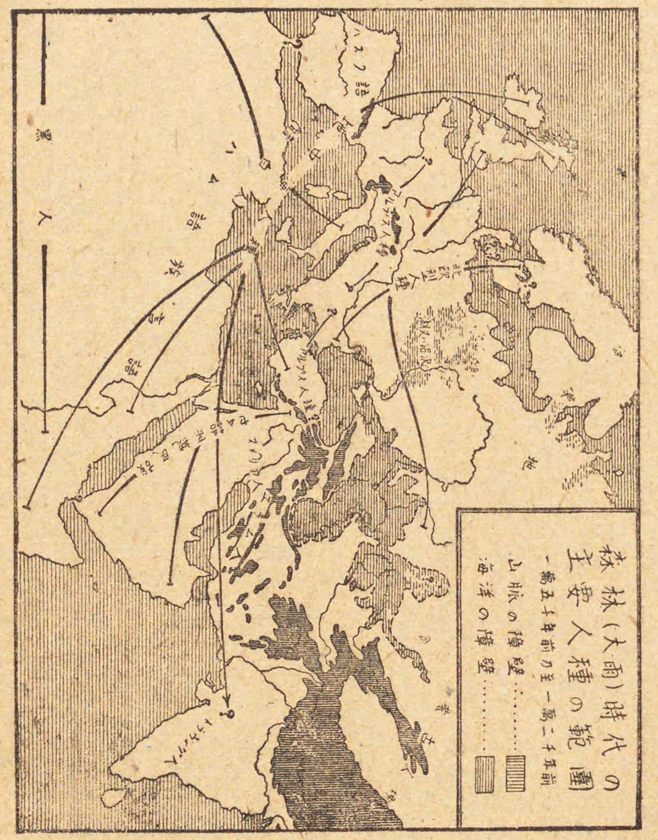
四　太陽巨石文化

ある時代に、新石器時代文化の特殊な形のものが、廣く世界に擴がつたことがある。（エリオット・スミスは「初期文化の移動」Migrations of Early Culture にこれを書いてゐる。）それは地球上の各所に、別々に發

達したものではなくて、ある一つの文化から生れて来たものである。その地域は、ブルネット人種、即ち地中海人種が住んでゐた地方全部を始め、インドを越えて、支那の太平洋岸に達し、更に太平洋を横ぎつてメキシコやペルーにまで及んでゐる。要するに海岸線文化である。

新石器時代文化の特殊形たるこの文化を、エリオット・スミスは太陽巨石文化 heliolithic と呼んでゐる。次ぎに掲げる奇習の一部、または全部を包含する點に、その特徴がある。

（一）割禮。
（二）擬娩。couvade 子供の生れる時、父親が寢床に就く奇習。
（三）マッサージの練習。
（四）木乃伊の製造。
（五）巨石の碑。（例、イギリスの巨石柱 Stonehenge）
（六）布を卷いて子供の頭を不恰好にする。
（七）文身（いれずみ）。
（八）太陽と蛇の宗教的結合。
（九）幸運のシムボルとして、スワスチカ swastika すなはち卍字の使用。この妙な符號が陽氣に世界中を一



馬してゐる。二度とこんなものを發明したり、珍らしがつたりするものはないであらう。

エリオット・スミスに依れば、かかる奇習は星座のやうに、地中海や、インドや、太平洋の全地域に亘つてゐる。しかもこの一つのあるところには、他の大部分が伴つてゐる。この奇習はイギリスをもボルネオやペルーと結びつける。しかし北歐型人種や、蒙古人種の原始的な家の中には、侵入することがなかつた。またアフリカの赤道以南の地方にも、あまり伸びなかつた。

紀元前一萬五千年乃至一萬年に亘る數千年間、かうした太陽巨石文化と、その所有者たる褐色人種は、丸木舟に乘つて果てしのない海を漂ひながら、溫暖な地方から地方へと、地球を一周してゐた。その時分、これが世界最高の文化であつた。この文化は最高程度に發達した團體を、最も長く育て上げた。その起原地はエリオット・スミスに依れば、地中海や北アフリカの地域であつた。

時代から時代へと、この文化は次第に移つて行つた。それが太平洋岸まで擴がると、島の飛石を傳はつて、アメリカに渡つて行つた。しかしその以前すでにその起原地方では、ほかの文化が代つて發達してゐた。

東インドや、メラネシアや、ポリネシアの多數の民族は、第十八世紀にヨーロッパの航海者に發見された時分でも、まだこの太陽巨石文化時代の程度にゐた。エジプトやエウフラテス・チグリス流域の最初の文運も、恐らく、この宏大かぎりなき文化から直接に派生したものと思はれる。支那文化が別種の起原に因るかどうかについては、これを後章に讓るであらう。

アラビア沙漠のセム系遊牧民にも、太陽巨石文化時代があつたやうである。

五　アメリカ土人

アメリカの原住人は蒙古人種に屬する。かれらは新石器時代に、ベーリング海峽を經て、アメリカ大陸に達したものであらう。（今日でも兩大陸の間を、皮舟で往來する土人がある。）

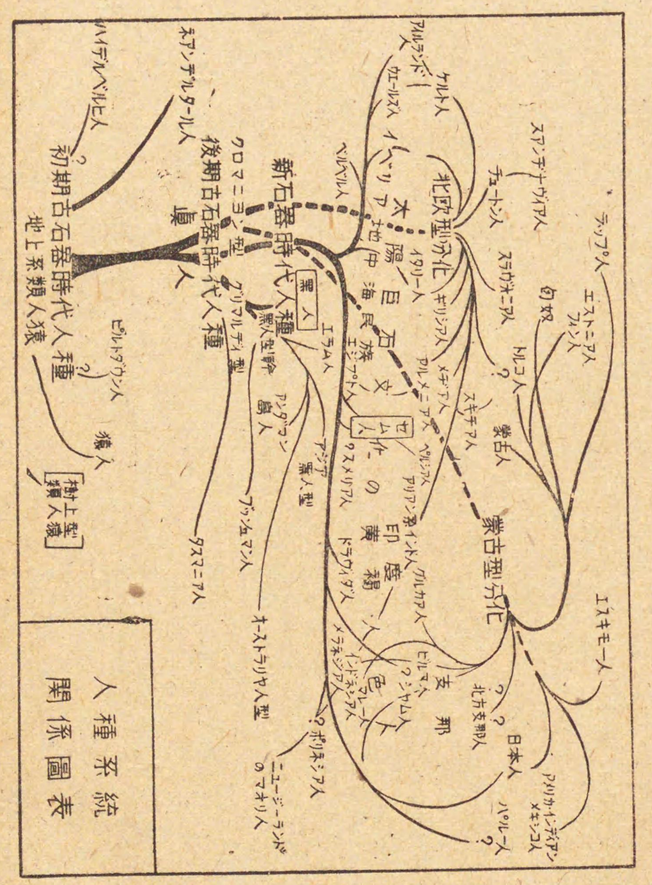
その後で、（これについては人種學者に異論があるが）新たな民族と、太陽巨石時代の新たな文化思想が、海を越えてアメリカにはひつて來た。

不思議にもかれ等は小麥を持つて行かなかつたらしい。それとも持つて行つたものが絶えてしまつたのかも知れない。兎に角その代りに、舊世界の何處にもない玉蜀黍（とうもろこし）が、この新世界の穀物となつた。しかし宗教生活の上には、新石器時代に舊世界で廣く行はれた種蒔時の人身供養と同じものがあつた。

アメリカ大陸の大部分を占めてゐたアメリカ部族は、新石器時代の未開の狀態を、いつまでも保つてゐた。牧草の生える地域では、かれ等は野牛を追つて、遊牧人となつた。北の果では、アメリカ產の馴鹿カリブー caribou を追つて暮した。（馬は人間時代には、アメリカ大陸に存在しなかつた。後になつてヨーロッパ人が持つて行つ

たものである。）熱帯の森林地方では、アメリカ・インディアン、すなはちアメリカ土人が、鳥類や小獣の狩獵に從事してゐた。

しかし、一二の豐饒な地方では、優れた社會組織を發達させて、灌漑に努めたり、精巧な彫刻で飾つた石造の建物を築いたりして、都市や帝國を建設した。



第十二章　人類の言語

一　初期の言語

人類共通の言語はない。古石器時代人には言葉はなかつた。かれ等が自由に喋れたとは思はれない。

古石器時代人は物の形や様子に鋭敏な感覺を持つてゐた。その證據はかれ等の繪である。かれ等の思想を交換するものは、大部分身振りであつた。恐らく初期の民族の用ゐた言葉は、主として警戒の叫び聲や、激怒や、具體的な物の名であつたらうし、それらの言葉も、物から自然に出る音や、物に聯想される音を眞似たものであつたらう。サー・アーサ・エヴァンズの説によれば、アメリカでは手眞似言語 sign-language は土人全部に共通であるが、言語は異つてゐる。これで見ると、手眞似言語は言語の發達する前に行はれるものである。

最初の言語は僅かばかりの間投詞や名詞の寄せ集めであつたと思はれる。その名詞はまた、異つた意味を現はすためには、異つた抑揚で言はれたものであらう。假りに古石器時代人が「馬」や「熊」の言葉を持つてゐたとすれば、音調や身振りで、かうしたいろいろな意味を示したに違ひない。

「熊が來るぞ」
「熊が逃げて行く」
「熊を狩らなきやならん」
「熊が死んだ」
「熊がここにゐた」
「熊がこんなことをした」

やがて次第に、形式的な態度を以て、動作や關係を現はす方法が發達して來た。現代の言語は數千語に及んでゐるが、初期の言語はたかだか二三百語に過ぎなかつた。今日のヨーロッパの百姓すら、一千語にも足らぬ言葉で、日常の用を辨じてゐると言はれる。初期新石器時代の頃までは、この程度のものであつたに違ひない。その時分、談判や説明に恥るやうなことはなかつたであらう。何かを話すためには、口を利くことよりも、むしろ躍つたり、動作をしたりした。かれ等は二數語を用ゐて二を現はし、ある方法で多數を現はすほかには、計算することを知らなかつた。

言語の發達は、はじめは極めて緩漫であつた。文法上の形式や、抽象觀念の表現は、ずつと後代に起つたもので、恐らく四五百世代以前からのことと思はれる。

二　アリアン語族

全人類の言語に通ずる共通のものは、何もないといふことを、言語學者に依つて言はれてゐる。廣い地域に亘る各群の言葉の中で、語源を同じくするものや、思想を現はす方法を同じくするものはある。しかし他の地域では、それが根本的構造を異にして、動作や關係を現はすに、全然異つた方法を採つて、その上文法上の組立まで違つてゐる場合が少くない。

今日殆んど全ヨーロッパを覆ひ、且つインドまで延びてゐる言語の一大種族がある。すなはち英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、ギリシア語、ロシア語、アルメニア語、ペルシア語、及びインドの諸語である。これがインド・ヨーロッパ語族、またはアリアン語族である。この族全部を通じて、同一の根本的語根や同一の文法上の約束を見ることが出來る。例へば、父と母の義を含む次ぎの語を比較する時、これが明白となるであらう。

英　語	father	mother
ドイツ語	Vater	Mutter
ラテン語	pater	mater
ギリシア語	pater	meter
フランス語	père	mère
アルメニア語	hair	mair
梵　語	pitar	matar

アリアン語族の諸言語は、こんな風に大部分の語根に變化を繰返してゐる。この變化の規則をグリムの法則といふ。これらの言語は別種のものではなく、一つの言語の變化である。

新石器時代の遠い昔、すなはち八千年前、またはその以前に、單純な原語があつて、それからこれらのアリアン語が分れて來たものと思はれる。中央ヨーロッパと西アジアの中間に位する何處かに、混血した一群の種族が一つの言語を使ひながら漂泊してゐたと思はれる。便宜上かれ等をアリアン民族と呼ぶ。サー・エッチ・ジョンストンは、かれ等をアリアン・ロシア人と呼んでゐる。白人種中の北方のブロンドの一族で、北歐型人種に屬するものである。

嘗て言語學者は、言語と人種を混同して、同じ言葉を話す民族を、同じ血族として考へてゐた。しかしアメリカ土人は今日英語を喋べるし、アイルランド人は——政治上の示威運動のためなら別であるが——もはや昔のアース語は話さない。同じやうにコーンウォル人は、祖先のケルト語を忘れてゐる。言語の共通は、行はれた交渉

の共通を示すものであり、且つ混血の可能を示すものである。それは起原の共通を示すものではないが、少くとも未來の共通を示すものである。

紀元前五六千年に話されたこの本來のアリアン語は、決して原始的言語でもなければ、蠻語でもなかつた。これを最初に話した民族は、新石器時代の文化程度にゐたか、またはそれ以上に進歩してゐた。その證據には、文法の形も、用語法も、相當複雜してゐる。今では絶滅した後期古石器時代人や、アジール人や、初期新石器時代の貝塚人などの表現方法は、最初期の形のアリアン語より遙かに粗野なものであつたに違ひない。

アリアン語族は、ドナウ、ドニエプル、ドン、ヴォルガ等の諸河の流域地帶たる裏海の北、ウラル山脈の東に當る廣い地域で發達した。この地帶を漂泊してゐたアリアン民族は、長い間大西洋岸にも黒海の南岸にも達しなかつた。その時分、ボスフォルス海峽はまだヨーロッパとアジアの劃然たる分岐點をなしてゐなかつた。今日の南部ロシアのヴォルガ地方からトルキスタンまで、それに黒海、裏海、アラル海を包含する地域は、當時大きな海であつて、ドナウはこの海をさして東に流れてゐた。多分またこの海は北氷洋に向つても腕を伸ばしてゐたであらう。それはアリアン族と北東部のアジア人を分ける有効な障壁となつてゐたに違ひない。

この海の南は、バルカンからアフガニスタンまで打續く海岸線が擴がつてゐた。その北西部は一面の泥沼と鹹湖で、それがバルト海まで達してゐた。

三　セム語族

アリアン語族の次ぎに、これとはまつたく別種のものと考へられてゐる語群がある。即ちセム語族 Semitic である。

ヘブライ語とアラビア語は緣類のものであるが、共にアリアン語とは語根を異にしてゐる上に、同じ思想を現はすにも、別な方法を取つてゐるし、文法の基礎も異つてゐる。アリアン族とは接觸することのなかつた民族によつて作られたものであらう。

ヘブライ語、アラビア語、アビシニア語、古アッシリア語、古フェニキア語、その他のこれに類した言語は、セム語族と呼ばれる。

有史時代の始め、紀元前四千年頃、アリアン語族系民族と、セム語族系民族との間に、地中海の東端で戰爭と貿易の最も活潑な交涉が行はれた。しかし、原始アリアン語と原始セム語の根本的な相違は、有史時代以前、新石器時代の數千年間に、兩語族系民族が完全に分離されてゐたことを裏書する。

セム語族系民族は、南アラビアか、北東アフリカに住んでゐたと思はれる。

四　ハム語族

言語の第三語族は、ハム語族 Hamitic である。ある學者はこれをセム語族と全然別種のものと主張するが、他の學者は兩者の間に類似點を認める。しかし今では、この語族に原始的關係があるといふ意見が、多數を占めてゐる。

ハム語族はセム語族、またはアリアン語族よりも、その範圍が廣く、これに屬する言語群も多い。それにセム語族とは多くの類似點があつて、アリアン語族よりもセム語族に近い。恰度鳥類が爬行類の一種屬から出たやうに、セム語族は原始ハム語族から派生したものとも思はれる。のみならず、アリアン語族も、哺乳類が爬行類の他の種屬から生れたやうに、他の原始ハム語から出たものであるかも知れない。これは單なる想像ではあるが、アリアン語族の原始的な祖先群が、原始ハム語族から分れた時期は、セム語が分離して特殊化した時よりも尙早いやうである。

今日ハム語族系民族は、セム語族系民族のやうに、主として地中海人種である。ハム語族に屬する言語群に古エジプト語、ベルベル語(北アフリカの山間種族たる覆面のツァレッグ人、その他の言語)、エチオピア語、ガラ語、ソマリ語、その他がある。これらのハム語族は地中海のアフリカ沿岸を中心として四方に散り、當時存在したヨーロッパとアフリカの接合地帶を經て、西部ヨーロッパまで廣く擴がつて行つたものであらう。

上述のアリアン、セム、ハムの三大語族は、他のいかなる語族も持たない共通した特徴を持つてゐる。卽ち文法上の性である。しかし、この三大語族が、嘗て共通の祖先を持つてゐたかどうかは、尙言語學者の研究を待たなければならない。しかし兎に角この文法上の性の問題は、この三大語族系民族が、極めて遠い昔、長い間、分離して暮らしてゐた明白な證跡とは、何の關聯もないことである。

セム人種と、北歐型人種は、人相學上著しい特異性を持つてゐる。かれ等はその特徴のある言語と同じやうに、より一般的で、原則的なハム語族系民族に比して、一層特性化し、特殊化されてゆくものと思はれる。

五　ウラル・アルタイ語族

アリアン語族とセム語族の地域から北東にはなれて、更に別種に屬する特殊な語族が擴がつてゐた。すなはち、ツラニア語族 Turanian またはウラル・アルタイ語族 Ural-Altaic である。

この語族に包含されるものは、ラプランド人のラップ語、シベリア人のサモイド語、フィンランド語、マジャール語、トルコ語またはタルタール語、滿洲語、蒙古語等である。

一語族としては、ヨーロッパの言語學者の研究は、まだ充分盡されてゐない。また朝鮮語や日本語が、この語

族に含まれるべきかどうかについても、まだ充分な證據がない。

イッチ・ビー・フルバートは朝鮮語と、インドのドラヴィダ語の比較文法論を公にして、兩者の間に見出される密接な關係を發表した。

六　支那語族

第五の語族の發祥地は、南東のアジアである。この地方に行はれる言語は、語尾變化のない單綴音語 Mono-syllable から成り立つて、しかも一つの言葉の發音が、その意味を決定する。これを支那語族、または單綴音語族 monosyllabic といふ。支那語、ビルマ語、シアム語、チベット語、などを含んでゐる。

この語族の言語と、ヨーロッパの言語の間には、甚しい相違がある。支那語中の北京語型は、僅か四百二十の單綴語を基礎とするに過ぎないから、當然それらの言葉に、夥しいいろいろな意味を持たせなければならない。そこで、その異つた意味を現はすには、文脈を變へるか、音を別にする方法に依るのである。

かうした言語の相互間の關係は、アリアン語族系とは全然別な方法で現はされる。支那語文法は、英文法とその性質を異にする。ある學者は支那語には、全然文法はないと言ふが、もしヨーロッパの文法のやうな、語尾變化や數性の一致を求めるなら、これは理由のないことではない。從つて、支那語を英語に直譯するのはむづかしい。思想の表現方法が違つてゐるからである。支那哲學はこの點で、ヨーロッパ人に取つてはむしろ密封された祕本である。逆にヨーロッパの哲學は、支那人に取つて難解であらう。表現法が異つてゐるからである。

七　他の語族

以上の語類のほかに、言語學者は次ぎの語類を擧げてゐる。

アメリカ土人、卽ちアメリカ・インディアンの言語は極めて多數の系統に別れてゐるが、いづれも舊世界の言語類から明白に區別されるものである。むしろこれらは一語族をなすものと見るよりは、個々の語系の寄り集りといふべきものかも知れない。

アフリカには赤道の少し南から南の果まで、大きな語族がある。これがバンツー語族 Bantu である。ほかに中部地方にも種々の言語系統があるが、これは省略することとする。

更にまた別種の語族としては、南部インドにドラヴィダ語族 Dravidian があり、またポリネシアに擴がつてゐて、今では諸インド語までも包含するマレー・ポリネシア語 Malayo-Polynesian がある。

人類が嘗て家族的部族から次第に大きな團體を形成し始めた時分、かれ等が互に長い物語を話したり、議論したり、思想を交換したりし始めた時分、人類は世界にところどころばら撒かれて、互に交渉もなく暮して來たに

人種諸型　エジプト墳墓の壁畫より

ちがひない。少くとも以上の各語族の根本的な相違から、かうした結論が下されるであらう。かれ等を相互に分離させたものは、大洋であり、內海であり、密林であり、沙漠であり、山脈であつた。多分遠い昔、一萬年前、またそれよりも古く、アリアン語や、セム語や、ハム語や、ツラニア語や、アメリカ土人語や、支那語やを話してゐた部族群と家族群は、かれ等の地方地方を漂泊して、狩獵や、牧畜や、季節々々の耕作に從事しながら、似たり寄つたりの文化程度の中で、自分自分に特有の言語を發達させて來たにちがひない。多分またこゝらの原始部族の數は、今日北西部地方に住むアメリカ土人程のものであつたかも知れない。農業の組織化は、やつとその時分からはじまつて來た。この種の農業が、人口の稠密を招來するまで、全世界の人口は僅かに數千を越えぬものであつたかも知れない。事實後期古石器時代までは、人間はこの世界で甚だ珍らしい動物であつた。もし農業が人間生活にとつて重要なものとなつてゐたとしたら、それに當時人口がいくらか稠密なものになつてゐたとしたら、それは恐らく地中海地方であつたらうし、また恐らく、今日海の底に沈んでゐる地方であつたかも知れない。

かうした新石器時代の部族のほかに、更に原始的な森林民族が、アフリカやインドで、夥しい種族に別れて住んでゐたことと思はれる。その數は二三千もあつたかも知れない。かれ等は今日のゴリラほど少なかつたか、或はそれよりももつと少なかつたはずである。中央アフリカは、ナイルの上流地方からかけて、その時分宏大な森林地帶で、普通の人間には足を踏み入れることが出來なかつた。その森の一つなる今日のコンゴーの森林は、小さくなつた過去の名殘を留めてゐる。

原始的なオーストラリア型人種より更に高等な人種が、東インド諸島地方に擴がつて行つた時、マレー・ポルネシア語類が發達した。その時期は前記の諸言語族の發生した時よりも後のことである。ポリネシア人はブルネット人種の後期東方擴張に屬するものである。恐らく北歐型人種の混血があると思はれる。

言語學者の言語分類と、人種學者の人種分類は、大體に於て符合してゐるものである。人口が極めて少なかつたことや、また長年代の間、各人種が互に離隔してゐたことについても、かれ等は一致した意見を持つてゐる。氷河時代に於ては、北極から中央ヨーロッパまで、またロシアやシベリアを越えて中央アジアの大高原まで、氷か、さもなければ、少くとも苛酷な寒氣が、人種の膨脹を沮止してゐた。最後の氷河時代の後でも、この寒氣はその苛酷性を、極めて緩漫に北方をさして緩めて行つた。その長い間、殆ど人間の姿は見られなかつた。只僅か

漂泊民族の狩獵人が、東の方に、またベーリング海峽を越えた彼方に、擴がりを見せてゐた。

北ヨーロッパや、中央ヨーロッパや、アジアは、後の時代――つまり一萬年乃至一萬二千年前――までは、農業に適した氣候に惠まれなかつた。それは密林時代であつた。狩獵民族時代と農業民族時代の間に狹まれた中間時代である。

この密林時代は、甚しい濕潤時代であつた。「霖雨時代」Pluvial または「湖上時代」Lacustrine とも呼ばれてゐる。世界の陸地の輪郭は、この一萬年間にさへ、甚しい激變があつた。有史前の地理的變化として、見落すことの出來ぬものである。

氷河が退却するにつれて、バルト海からヨーロッパ・ロシアを越えて、裏海に到るまで、宏大な水面と、無數の通行を沮止する沼地が擴がつて來た。裏海や、アラル海や、トルキスタン沙漠の一部は、昔の大海の遺跡である。その當時この洪大な海は、遙かにヴォルガの流域に達し、西は腕を伸ばして黑海を結びつけてゐた。山脈は今日よりも尙ほ高い障壁を築いてゐたし、今のインダス河の流域は當時一方の海の腕であつた。初期北歐型人種は、これらの海や山に依つて、蒙古人種から、またドラヴィダ人種から、完全に隔離されて、明白な人種的分化を遂げて來たものである。

サハラ沙漠は海が乾上つて出來たものではなく、熱風が砂を吹きつけて、嘗ては豐饒であつた土地を埋めてしまつたのであるが、それが次第に乾燥して、次第に砂地が深くなると、アフリカ中央部の森林地帶に散在する原始的黑人は、地中海人種から分離されてしまつた。

ペルシア灣は今の海岸線の尖端を、遙か北方に伸ばして、シリアの沙漠に結びついてゐた。セム人はそのために東方の地域から、隔離されてゐた。一方、今日よりも遙かに肥沃であつたアラビアの南部は、今のアデン灣を横切つて、アビシニアやソマリランドまで達してゐた。霖雨時代の地中海と紅海は、糸のやうな淡水湖を形作つてゐた豐饒な谿谷であつた。ヒマラヤ山と、中央アジアの高い山々と、今日のガンジス河流域まで北に伸びてゐたベンガル灣は、ドラヴィダ人種と蒙古人を分離して、丸木舟のみが僅かにこの兩人種を繫ぐ鎖であつた。今ではゴビ沙漠となつてゐるゴビ地帶の海と湖や、中央部から北東部にかけたアジアを横切つてゐる幾條かの大山系は、蒙古人種を支那語族とウラル・アルタイ語族に分けてゐた。

ベーリング海峽は、霖雨時代の前か後かに出來上つた。その時からアメリカ土人は孤立した。

かうした古代の分離は絕對の分離であつた。それは少くとも、人間の社會團體が漸く出來始めた時分に、種族的混合と言語の混合を沮止する力があつた。しかしそれにも拘らず、その當時でさへ、ある程度の集合や交易が行はれ、知識の融合が招來された。粗雜な模樣や、さまざまな器具の使用法や、元始的農業の種子などが、かうして世界に擴まりはじめた。その後に丸木舟が、やがて更に船が現れた。これらの農業と交易の宣傳をもつと盛

んにするために。

八　原始言語

新石器時代の始めの言語は、前に述べた九つの語族に限るものではない。それらは原始的な祖先を逐出して、生殘つた最新の言語である。多分他にも多數の言語があつたことと思はれる。ただそれが微弱であるために、次第に他に壓倒されて行つたのもあらうし、また幼稚な言語のために、自然に消えてしまつたのもあるであらう。われわれは不思議にも、つぎはぎのやうな言葉が、何の緣りもないのに、ある言葉の中に交つて出て來るのを、時々見ることがある。

しかし、よく仔細に調べて見ると、この緣りのなささうなつぎはぎが、實は人間の言葉の更に單純な、更に一般的な、更に基本的で普遍的な典型を、氣まぐれにひよいと覗かせたやうにも考へられる。ここにバスク語族といふ方言がある。バスク人は、今ではピレネー山脈の北と南の斜面に住んでゐる。その數はヨーロッパ中で六萬を超えないであらう。かれ等は今日まではなはだ頑固な、獨立的精神に富んだ民族である。その言語は、今日見るやうに、充分發達してゐる。ただアリアン語族系言語とは、まつたく異つた系統に依つて發達して來たものである。

バスク語新聞がアルゼンチンと合衆國で、富裕なバスク移民團のために發行されてゐる。カナダの最初の「フランス人」の移民は、このバスク人であつた。今日でもフランス・カナダ人の中には、屢々バスク名がある。古蹟を探ると、スペイン中にバスク語とバスク人が多く廣く散布してゐた證跡がある。

長い間、このバスク語は、學者にとつて深い謎であつたし、その構造上の特質に、アメリカ土人語と何かの關係がありはしまいかと考へられてゐた。エー・イッチ・キーンは「過去及現代の人類」Man Past and Present の中で、バスク語は北アフリカのベルベル語と緣類であり、またこのベルベル語を通して、ハム語族全系と關係を持つものであると言つた。

しかし、他の學者はこの關係なるものを疑つてゐる。學者間に一般に信じられてゐるところに依ると、バスク語はコーカサス山地方の孤立狀態にある殘存語類と緣類のもので、嘗ては前ハム語系の中で、最も廣く行はれたが、それが變化し、特殊化して、今日に生殘つたものである。しかも以前は西部ヨーロッパや、南部ヨーロッパや、西部アジアの大部分の地域を占めてゐたブルネットの地中海人種の主用語であつた。

のみならず、バスク語はインドのドラヴィダ語と深い關係があるとも考へられ、また東インドを通して、ポリネシアやその先きまで東方に擴がつた太陽巨石文化人の言語であるとも考へられてゐる。

八千年乃至一萬年以前に、西部ヨーロッパと南部ヨーロッパに擴がつてゐて、アリアン語がはひつて來る前に

消滅してしまつた言語族は、このほかにも三つほどある。

（一）古クリート語 Cretan リディア語 Lydian その他。（尤もサー・ハリ・イッチ・ジョンストンは、これらを「バスク・コーカサス・ドラヴィダ語族」に屬するものとする。）

（二）スメル語 Smerian

（三）エラム語 Elamite

かういふことが考へられる――これは單なる臆測ではあるが――古代スメル語は、「古代バスク・コーカサス語族」と、古代蒙古語族とを繋ぐ語族であつたのではなからうか。もしさうであるとしたら、この「バスク・コーカサス・ドラヴィダ・スメル・原始蒙古語族」は本來的なハム語族よりも更に古い、更に祖先的の言語でなければならない。これこそ言語學上のミシング・リンク、卽ち連鎖缺環であり、また今日われわれが想像し得る最古の言語的祖先である。これとアリアン、セム、ハム各語類との關係に至つては、後期古生代の原始爬蟲類と、哺乳類、鳥類、恐龍類との關係を思はせる。

九　孤立言語

ホッテントット語はハム語族と類緣關係を持つてゐる。中部アフリカのバンツー語が、ハム語族から全然分離されてゐるのと、好一對をなすものである。またホッテントット語に似たある言語は、ブッシュマン語と緣類關係を持つてゐるが、それが東部アフリカの赤道地方で話されてゐる。これで見ると、東アフリカの全部に、嘗てハム語が行はれてゐたことが窺はれる。

バンツー語と、バンツー種族は、西部中央アフリカの發生地から、比較的後世に擴がつて、ホッテントッド人をハム民族から切離した。或はホッテントット語を分離した言語群と見ることも出來るであらう。

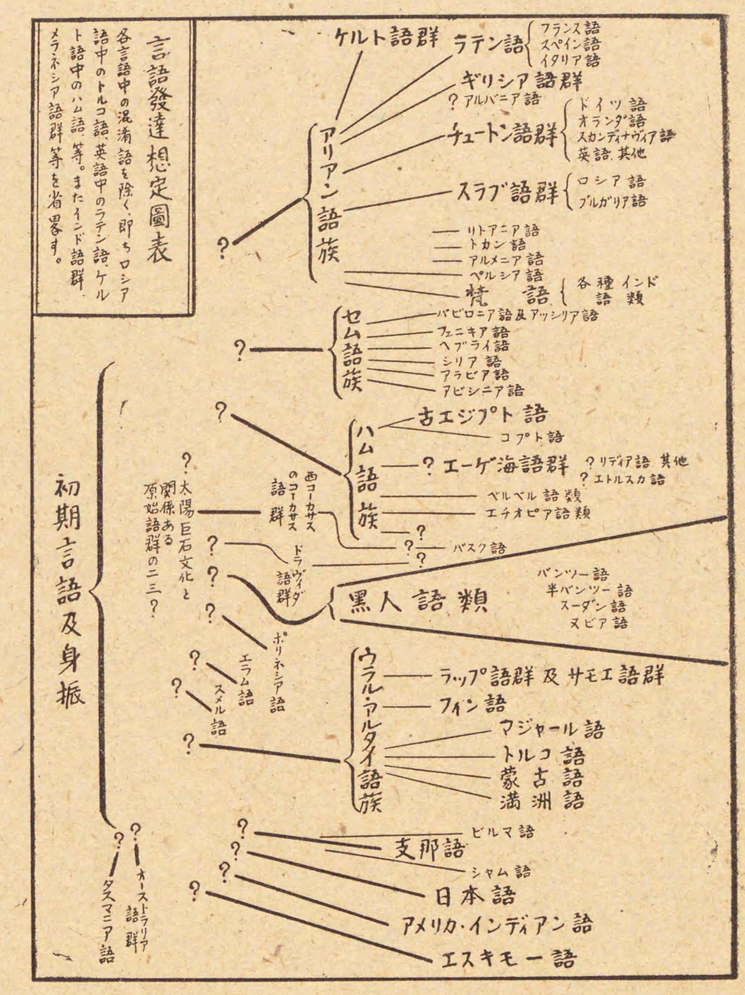
他の孤立した言語群の中に、ニューギニアのパプ語 Papuan や、オーストラリアの土人語を擧げることが出來る。今は絶滅したタスマニア語については、深くはわからないが、わかつてゐる限りでは、石器時代人は比較的言葉を用ゐなかつたやうである。

ハッチンソンの「現存の人種」Living Races of Mankind から、この點に關する部分を引用する。

「タスマニア土人語は取り返へしの附かないまでに亡びてしまつた。今では僅かに言語の構造の面影と、少い言葉を、それも不完全ながら殘つてゐるばかりである。齒音 sibilant の缺けてゐる點や、その他から見れば、オーストラリア語に似てゐるが、それよりも一層粗雜で、その構造の發達も一層低く、その上不完全極まるものである。この問題の權威者ヨセフ・ミリガンが言つてゐるやうに、かれ等は文章の構造上に、言葉の順序や排列をきめることはしない。ただ調子や、態度や、身振りのやうな補助的な方法を用ゐて、われわれが法や、時や、

數などで現はす意味を變化させる。

「抽象的な言葉は稀である。ゴムの木や、アカシヤの木などの各種類の木については、その名があるが、一般に〝木〟といふ言葉はない。また堅いとか、柔いとか、溫いとか、寒いとか、長いとか、短いとか、圓いとかいふ性質を表はす言葉もない。すべて堅いものは〝石のやうな〟とか、圓いものは〝月のやうな〟とかいふ風に言ひあらはす。通常言葉に動作を用ゐて、話の意味を手眞似や身振りで、はつきりさせるのである。」



第三篇　最初の文化

第十三章　初期の帝國

一　耕作と牧畜

農業の出現は人類社會を一變させた。二萬年乃至八千年前の數千年間に、農業は徐々に發展して、人間生活にさまざまな變化を與へたのである。

その時分まで、人間は比較的少なかつた。かれ等は漂浪しながら器具を用ゐる肉食動物の野蠻人であつた。小さな團體を作つてゐたが、言葉はまだよく發達しなかつたし、手に持てるだけの財産しか持たなかつた。その全生活を食物の狩獵に費した。しかも長い饑饉と、短い絶食の時が交代した。食物と季節につれて、動物が移つて行くと、かれ等はその動物について移つた。自由で、貧しくて、その生活には絶えず危難があつた。

やがて聰明な食物の生育と貯藏の仕事がはじまつた。今まで獵をしてゐた動物を養牧しはじめるとともに、肉の不足を補つた種子や、根や、果物のある場所を注意しはじめた。半家畜の番をするために、また收穫を待ち設けるために、うろつき廻る範圍が狹められた頃には、器具の數がやがて多くなつた。

八千年前、人間は地方に依つては、夥しい數になつた。どんな猿にしたところで、また似寄りの他の動物にしたところで、嘗てこれまで夥しい數に達したことはない。人間は家を作り、財産を持つた。食物を狩る代り、週期的勞働に依つて食物を得るために土着した。食物が貯へられ、勞働がはじめられた。饒倖と冒險であつた食事から、一定の食事時が出來上つた。かうして人間は、遣りつ放しの動物から、經濟的な動物に變つた。

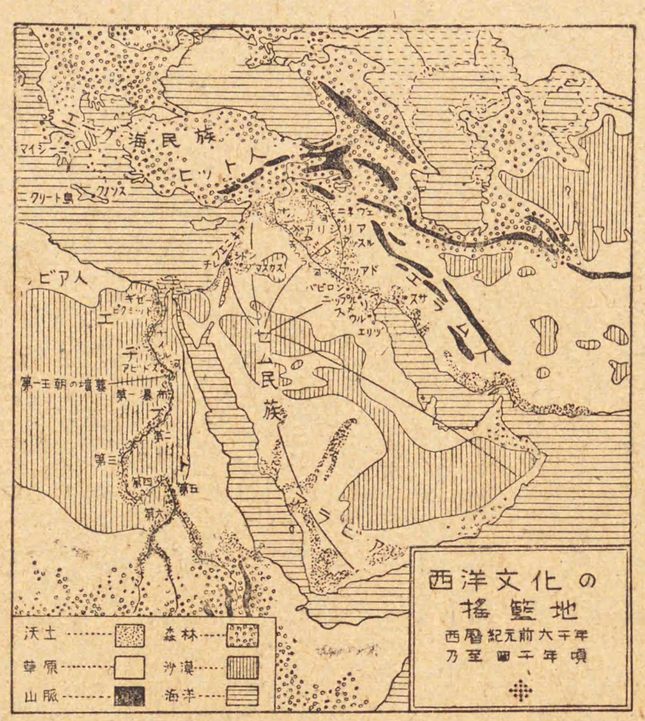
人間は經濟的動物となつた唯一の哺乳類である。經濟的哺乳類は他にない。海狸は巢を作り、食物を蓄へる。栗鼠は溜める。犬は骨を埋める。しかし社會を形作つて、食物と住居を用意し、貯藏し、消費するために規則的に働くものは、人間以外には蟻と蜂きりない。

土着以前、人間の生活には勞苦や、不安や、缺乏があつた。しかし組織的な勞働はなかつた。勞働が後期古石器時代人の生活にもあつたことは事實である。ただそれは偶發的であり、また常に興味のための仕事であつた。器具は絕えず作られなければならなかつた。しかしそれらは使用者の手で作られた。皮は剝がれなければならなかつた。食物は狩られなければならなかつた。誰かが火の番をしなければならなかつた。火種を絕やすことは、重大な仕事である。特に命じられた者が、責任を以て火の番に當つた。後の聖火に奉仕する童貞尼は、初期の火の番人の名殘りであらう。

繁雜な勞務は、多分女に課せられたものと思はれる。原始人に騎士道はない。小團體の移動の時は、女や女の子はありつたけの道具を擔いで行く。男は萬一の場合の備への武器だけを持つて、手ぶらで出て行く。そして子供の面倒は、女に任されてゐた。

農業をはじめたものは女であると言はれる。さうかも知れない。種子や、植物性の食物の蒐集は女のもので、男は狩に出掛けて行く。古い住み場に生へた穀物に氣がついたものは、女であつたかも知れない。後で百倍にしてかへして貰ふ考から、氏神の御供として最初に穀物を蒔いたものは、女であつたかも知れない。

最初の農業は熟穗ひろひであつた。



かれ等はまだ大部分遊牧民であつたから、蒔いて置いて、後に戻つて來て刈入れをしたものであらう。種蒔時と人身御供の因緣は、發育と成熟に委せて立ち去るこの熟穗拾ひの時代に由來するかも知れない。一人が殺されて殘され、牧穫の見張りをする意味があるのであらう。

始めの頃の農業は、畑仕事であつた。小さな庭先の畑を手で――多分女の手で耕作する。これが主要食の肉を補つた。この農が重要なものとなるに至つたのは、特別な事情に因るのである。

一定の時期に洪水の起る土地に種子を蒔く利益を、早くから知つてゐる者がある。水の上に食物を撒いたら、それが何倍にもなつて返つて來た。副業としてではなく、主たる企業として組織的な農業が最初に起つたのは、エジプトであつた。とかうエリオット・スミスは言つてゐる。季節に依る種蒔を覺えるには、エジプトほど適當した土地はない。始めは組織的な種蒔が、洪水のあつた地方に試みられた。それが洪水の手傳ひの第一歩であつた。卽ち謂ふところの灌漑である。

耕作は文化ではない。小麥の栽培は、大西洋まで、且つ太平洋沿岸まで、新石器時代文化の普及に伴つて擴まつた。紀元前一萬五千年乃至一萬年、文化の曙前の時代である。文化は季節的な小麥栽培以上のものである。人人が絕えず耕作し占有した地面の上に定着して、共同の規則と共同の都市、または城砦のある建物の中に絕えず住んで生活する時に、それが始めて文化となる。

新石器時代人が食物の豐富な間だけ一時的な住居をすることをやめた時、眞の定住生活にはひるために必要とした第一の條件は、水と、家畜の飼料と、かれ等自身の食物と、住居を作るための建築材料を、確實に年中不斷に供給されることであつた。要するに、四季を通じて、かれ等の必需品が得られる場所で、またそれより遠く漂浪しようとする氣を起させない場所でなければならなかつた。かうした條件を備へたところは、ヨーロッパやアジアの谿谷にいくらもあつた。事實スイスの湖上家屋のやうに、かうした谿谷には極めて古い時代から人類が定住してゐた。しかし、エジプトのやうに、またユーフラテス・チグリス兩河の上流とペルシア灣の間の地方のやうに、かくも惠まれた條件がかくも大規模に見出され、またこの狀態が年が明けても暮れても、かくも確實に恩寵を持ち來たした國が、この世界の他の何處にあつたらう。

そこでは果しない太陽の光の下で、盡きることのない水の供給がある。來る年も來る年も豐作が打ちつづく。ヘロドトスが言つたやうに、メソポタミアは小麥が野にも生へて、蒔くものには二百倍の收穫がある。またプリニが言つたやうに、小麥は二度刈られて、その後に羊の飼料（かひば）が生へて行く。しかも夥しい椰子と、さまざまな木の實。建築材料には、エジプトに粘土と、細工向の石材。メソポタミアに日光で燒瓦の出來る粘土。

かうした國々で、誰かここから漂浪し去らうとする者があらう。知らず知らずに人は定住する。かれ等は殖えて來てやがて夥しくなる。その數に依つて折々の襲擊者から遁れる。人口の增加は世界に嘗て例のない稠密を惹

き起した。家屋は益々堅固になり、野獸は廣い地域に亘つて跡を斷つた。生命の安全が增すとともに、普通の人人は武器の足手纏ひなしに、町や野を步き廻つた。かうして少くともお互の間だけは平和な民族となつた。人々は前に下ろしたことのなかつた根を、ここに下ろしたのである。

メソポタミアとエジプトは、人類の最初の永住地として、最も惠まれた國であつた。六七千年前まで、紅海谿谷と東地中海谿谷の海水が漲つてゐたが、アラビアの沿岸、殊に南西の隅は、その時代以後にはなかつたほど、肥沃を極めてゐた。紅海は海峽に依つて地中海に通じ、ペルシア灣は今日より遙か北に伸びてゐた。

この大谿谷民族が根を下ろして、人口の增殖を來たしつつあつた間に、ヨーロッパの森林や、アラビアの沙漠や、中央アジアの季節的な草原のやうな、四季に依つて氣候の甚しく變るあまり豐饒でない土地には、まつたく異つた型の活動力のある、初期遊牧民がゐた。かれ等は農業民族とは反對に、自由な、冒險的な生活を送つてゐた。かれ等は瘦せて、饑ゑて、牧畜の暇にはまだ狩獵をしてゐた。牧場の奪ひ合から敵の家族と戰つた。器具の改良と金屬の使用が定住民に依つて發明されると、それが遊牧民にも傳はつて、かれ等の武器の進步を促した。かれ等は定住民についで新石器時代から青銅時代へと進んだ。武器が改まると、一層好戰的になつて、交通の便がかれ等を益々活潑に活動させた。

人間社會の遊牧狀態は、必ずしも定住狀態に先行するものではない。人類は始め食物を求めて動く緩漫な漂泊

人であつた。それがやがて分れて、一方は定住を始め、一方は益々明かに遊牧的になる。定住民は食物に益々多く穀物を攝り、遊牧民は益々多く牛乳を用ゐはじめる。生活の樣式は反對の方向へと特殊化して行く。

遊牧民と定住民は、もはや衝突を避けがたくなる。定住民には遊牧民が粗野な野蠻人に見え、遊牧民には定住民が柔和で、女性的な、誂へ向の掠奪品に見える。そこで文化發展の邊境では、勇敢な遊牧民族や山地民族と、都市や村落にゐる一層數の多い、しかし一層好戰的でない民族との間に、絶えず侵入と鬪爭が行はれる。

かうした侵入は、多くは邊境に限られてゐる。定住民族は人數の多い强味がある。遊牧民族は掠奪や侵略はしても、留まることは出來ない。幾世代もの間、この種の軋轢が繰りかへされる。しかしいつかある指導者なり、ある部族なりが、この放縱で獨立的な遊牧民族の中に現はれて、同種類の部族を統一するとしたら、接近した文化國は禍を避けることは出來ないであらう。

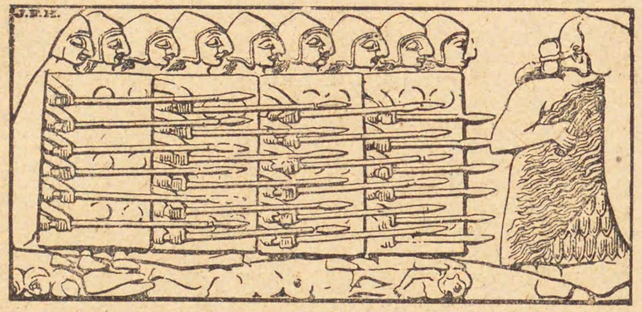
統一された遊牧民族は、戰を欲しない定住民を襲つて、武裝のない平野に殺到する。征服の戰がはじまる。戰利品を運び去る代りに、征服者は征服した國に定住する。その國はかれ等にとつて戰利品となる。村民と市民は奴隷に引下げられて、貢稅を納め、樵夫となり、水汲み人となる。そして遊牧民族の指導者達は國王や諸侯となり、族長や貴族となつて、かれ等もまた定住する。そこで被征服者の技術や教養を學んで、もはや瘦せて餓ゑた者でなくなる。しかし幾世代もの間、昔の日の遊牧時代の慣習が、かれ等に痕跡を留める。かれ等は狩獵をし、

戸外のスポーツに耽る。戰車を驅つて競走する。勞働を、殊に農業上の勞働を、下等人種、下等階級の仕事として蔑視する。

過去七十世紀の間、またはそれ以上の長い年代の間、さまざまに姿を變へて、歷史の主要な骨子となつて現はれたものがこれである。われわれが讀む古代の歷史は、實にあらゆる文化國に於て、働かない支配階級と、勞働に攜はる大衆階級の間に置かれた區別を、われわれに見出させる。同時にまた、數世代の後には、定住した貴族は植民地の技術や、敎養や、法律遵守の風習などを尊敬しはじめて、生來の頑固な性質を緩和して來る。そして雜婚する。そして征服者と被征服者の間に、信仰の自由が生れて來る。宗敎思想が交換されて、土地と氣候に因る敎訓を敎へられる。征服者は遂に征服した文化の一部分となる。そしてその間に、この文明國の外界では、自由奔放な冒險者達に依つて、新たな侵略の機運が醸し出される。

二ノ一　スメル人

定住、遊牧的征服、純化、再征服、再純化、かうした人文史上の局面の交代は、特にエウフラテス・チグリスの地方に、著しい特色が見出される。この兩河の流域こそ、沙漠ほどに不毛ではないにしても、文化人を養ふほどに肥沃ではない廣漠たる平野に連つてゐる。この地方で、むしろ全世界で、最初の都市を建てたものはスメル人 Sumerian である。粘土を引掻いて書く一種の文字を用ゐ、その言語はすでに判讀されてゐる。それは現存の他のどの言語よりも、コーカサス語に似てゐる。多分バスク語と關聯して、嘗てスペインや西ヨーロッパから、東インドに擴がり、南は中央アフリカにまで達した初期言語族を代表するものであらう。



古代スメルの石彫
上に楔形文字の刻銘がある

前の大戰當時、アール・キャンベル・タムソン大尉がエリヅで試みた發掘に依つて、初期新石器時代の農業狀態が明らかになつた。書法發明以前、また靑銅時代以前、初期スメル文化の基礎が置かれた頃のものである。スメル前人は土器の小鎌を用ゐて收穫の刈入れをした。

スメル人は頭を剃つて、單純な羊毛の外衣のやうなものを着てゐた。かれ等は始めペルシア灣に程近い下流地方に定住してゐた。當時のペルシア灣は、今日よりも百三十マイルほど陸地に深く喰込んでゐたものである。セースは「バビロニア及アッシリアの生活」 Babylonian and

Assyrian Life の中で、紀元前六千五百年頃、エリヅが海岸であつたことを書いてゐる。スメル人は灌漑用の濠を穿つて水を引き、耕地を沃土としたり、やがては熟練した水力學の設計者となつたりした。牛や、驢馬や山羊等の家畜を持つてゐたが、馬はなかつた。泥土作りの家屋が集つて、町が出來た。かれ等の宗教は、塔のやうな寺院建築を生んだ。

日光に乾かした粘土は、かれ等の生活上の重大な必需品であつた。エウフラテス・チグリスの下流地方は石がない。かれ等は煉瓦を用ゐて建築をし、土器製造所を建てて土器の像を作つた。また粘土を瓦のやうに作つて、その上に繪を描き、文字を書いた。紙も、羊皮紙もなかつたやうである。書物や覺書はもとより、手紙までが土器の破片を用ゐた。

エンリルの神のために、煉瓦の高塔がニプールの都市に建てられた。これが傳統のバベルの塔の本體である。幾つかの都市的國家に別れて、數百年間互に戰爭をしたり、武備の充實を圖つたりした。兵卒は長い槍と楯を携へて、密集隊形で戰つた。スメル人は、同種族の間でこそ、征服したり、されたりしたが、しかも長年代の間、嘗て他人種のために征服されたことはなかつた。かれ等が文書や航海術の興隆に努めて、文化の發展に力を盡したその期間の長さに至つては、キリスト時代から今日までの全期間の二倍に相當する。世界の人文史は、かうしてやがてセム民族の勃興に依つて、文化の交代を招來する。

スメル帝國は、最初都市イーレクの神に仕へる高僧に依つて、建てられたものである。ニプールで發掘された碑文に依ると、當時帝國の版圖は、下はペルシア灣から、上部は地中海、または紅海まで達したといふ。農耕時代の前半期に屬する恒久の歴史的記錄は、エウフラテス・チグリス谿谷の泥土の中に埋まつてゐる。人類發生以來最初の寺院や、僧侶的支配者達は、實にこの流域地方にその繁榮を極めたものである。

スメル人はインドの北西部まで行つて、交易をした形跡があり、またそこに植民した形跡もある。しかし、それが陸路に依つたものか、海路に依つたものかは、今日尙ほ不明である。多分は海路を經たものであらうと思はれる。かれ等は人種上にも、文化上にも、ガンジス河流域に住む民族と、酷似した類緣を持つてゐる。

二ノ二　サルゴン帝國

スメル帝國の西部邊境に、やがてセム語を話す遊牧民族が現はれた。この遊牧民族は幾世代もの間、スメル人と交易をしたり、掠奪をしたり、また戰爭をしたりした。紀元前二七五〇年頃には、かれ等の中に大指導者サルゴン Sargon が現はれて、セム民族を統一し、スメル人を征服したばかりでなく、東はペルシア灣を越え、西は地中海に至るまで、その支配力を擴張した。その種族をアッカド人 Akkadian その帝國をスメル・アッカド帝國と呼ぶ。二百年以上存續した。

セム民族はサルゴン一世の時から、紀元前三世紀に至る二千年以上の間、全近東世界の到るところに優勢を示した。しかし、セム民族の征服者と、スメルの各都市に君臨したセム人の王達は、スメル文化のためにその單純なセム文化を壓倒された。新來のセム民族はスメル人の文字（楔形文字 cuneiform）を學び、スメル語を修めた。かれ等はセム人自身の文字を作り上げることをしなかつた。

スメル語はこの野蠻人に取つては、叡智と權力の言葉となつた。恰かも中世時代の蠻人に取つて、ラテン語が慧智と權力の言葉となつたのと同一である。スメル文化は偉大な活力に富んでゐた。兩河の流域地方に打ちつづく長年代間の征服戰や、政治的轉換を通して、スメル文化は尙ほ將來に長く生き殘る運命を持つてゐた。

二ノ三　ハンムラビ帝國

スメル・アッカド帝國が、政治上に、また軍事上に、その勢力を失墜すると、東方からは好戰的なエラム人 Elamite が殺到し、西方からはセム族のアモリ人 Amorite が侵入して挾撃した。

エラム人の人種も言語も不明であるが、セースの說に依ると、スメル人でもセム人でもない。その中心都市はスサであつた。かれ等の考古學的研究は、まだ着手されてゐない。サー・イッチ・イッチ・ジョンストンは、エラム人は黑人型であると言ふ。兎に角、現在のエラム民族は黑人型の特徵が極めて强烈である。

これに反して、アモリ人は、アブラハムや、後のヘブライ人と緣類關係がある。アモリ人は最初上流に小都市を建てて定住した。それがバビロンである。百年間戰爭をした後で、大王ハンムラビ Hammurabi は、紀元前二千百年の頃、全メソポタミアを統治して、第一バビロニア帝國を建設した。

平和と安逸が再びやつて來ると、進取的精神が衰退した。更に百年後には、新たな遊牧人がバビロニアに侵入して、馬と戰車を持つて來た。そしてバビロンにかれ等自身の王を擁立した。この遊牧人がカス人 Kassite である。

二ノ四　アッシリア

チグリスの上流で、粘土地であり、且つ細工し易い石材が得られる地方に、セム民族に屬するアッシリア人がアッスルやニネヴェを主とした幾つかの都市を建設して定住したのは、まだスメル人がセム民族に征服されない以前のことであつた。かれ等の人相學上の特徵は、鼻が長く、唇が厚く、今日のポーランドのユダヤ人の型に酷似してゐる。かれ等は髯を長く延ばし、長髮を縮らせ、高い帽と、長い外衣を着けて、西方のヒット人 Hittite を相手に絕えず掠奪したり、されたりしてゐた。サルゴン一世に征服されたこともあれば、自由を得たこともあり、北東部のミタニの王ツシュラタのために、暫くニネヴェを占領されたこともある。またある時代はエジプト

人と共謀して、バビロニアに對抗し、エジプトから金を貰つたこともある。

アッシリア人は戰術の發達に專念して、强力な掠奪者となり、貢稅を誅求した。やがて馬と戰車を採用して、一時ヒット人と和を講じた。後にティグラト・ピレセル一世 Tiglath Pileser I の時、紀元前一千百年頃、バビロンを征服した。しかしこの下流の、古い、文化の發達した地方を維持する自信がなかつたので、セム風の煉瓦都市たるバビロンを棄てて、セム風の石造都市たるニネヴェをその首府として留まつた。數百年の間、ニネヴェとバロビンは交る交る優勢を誇つた。ある時はアッシリア人が、またある時はバビロニア人が、全世界の王と稱して、覇を爭つた。

アッシリア兵
サルゴン二世宮殿の淺浮彫

セムの一群族アラメア人 Aramean が新たに北方に侵入して來て、定住した。そこでアッシリア人は四世紀間に亘つて、エジプトの方面に膨脹することが出來なかつた。このアラメア人の首府はダマスクスで、その子孫は今日のシリア人である。（斷はつて置くが、アッシリア人 Assyrian とシリア人 Syrian のこの二つの言葉の間には、別に何の關係もない。偶然の類似に過ぎぬものである。）

アッシリアの王達はアラメア人と戰つて威力を南西方に擴張した。紀元前七四五年に、ティグラト・ピレセル三世が卽位した。これが舊約聖書のテグラテ・ピレセルである。（列王紀略下、第十五章の二九、及び第十六章の七以下）彼はイスラエル人をメディアに移住せしめたばかりでなく、（所謂「失はれた十族」として、その最後の運命については人々の好奇心を唆るものである）バビロンを征服して、これを統治し、史家の所謂新アッシリア帝國を建設した。彼の子息シャルマネセル四世 Shalmaneser IV（列王略紀下、第十七章の三）はサマリアの攻圍中に死んで、次いで王位を繼いた簒奪者は、バビロニア人に媚びるために、古代のアッカド・スメル名のサルゴンを取つて、サルゴン二世と稱した。アッシリアの軍隊に、始めて鐵の武器を與へたものは、多分彼であり、ティグラト・ピレセル三世が命じた十族の移住を事實上決行したものも、多分彼であつた。

かうした民族の大移動は、アッシリア新帝國の特殊な政策であつた。かれ等の鄕土にあつては統治に困難な全民族を、一括して馴れない土地の見知らぬ異民族の中に移したことは、かれ等の生き殘る唯一の希望が、主權の服從に依るほかはないことを知らしめたであらう。

サルゴンの息子のセンナケリーブ Sennacherib は、エジプトの國境までアッシリア軍を進めた。そこでセンナケリーブの軍は、惡疫のために殲滅した。その災厄を舊約聖書列王紀略下第十九章にかう記されてゐる。

「その夜ヱホバの使者出でて、アッスリヤ人の陣營の者十八萬五千人を擊ちころせり。朝早く起き出でて見る

に皆死にて屍となりをる。アッスリヤの王セナケリブすなはち起ち出で歸りゆきて、ニネベに居りしが……」

そしてその息子達のために殺された。

センナケリーブの孫アシュールバニパル（Assurbanipal）（ギリシア人はサルダナパルス Sardanapalus と呼ぶ）はエジプトのナイル下流地方を征服して、一時これを統治した。

二ノ五　カルディア帝國

アッシリア帝國は、サルゴン第二世の後僅かに百五十年で亡びた。南東部から來たセムの一群族の遊牧人なるカルディア人 Chaldean は、北部のアリアン族なるメディア人 Mede とペルシア人の援助の下に、アッシリアに反抗して、紀元前六〇六年にニネヴェを陷れた。これがアリアン語系民族が歴史の上に現はれた最初である。かれ等は北部及び北西部の平原や森林地方から漂泊し來つた頑強で好戰的な群族であつた。ある者は南東部のインドに侵入した。そしてアリアン語の一方言が梵語に發展した。また他の者は舊文明世界に引返へした。これまで農業國の遊牧的征服者は、エラム人かセム人であつたが、今やアリアン人は六百年に亘つて征服者の役割を勤めることになつた。エラム人はかうして歴史上にその影を消してしまつた。

カルディア帝國はバビロンをその首府として（第二バビロニア帝國）ネブカドネザル大王 Nebuchadnezzar（ネブカドネザル二世）とその繼承者の治世に及んだが、ペルシアの建設者キロス Cyrus の襲來前、紀元前五三八年を以て崩壞した……

時勢は移る。紀元前三三〇年には、ギリシアの征服者アレクサンドル大王 Alexander が、最後のペルシア支配者の屍骸を見詰めることになる。

チグリスとエウフラテスの文化展開のこの荒筋は、要するに征服に次ぐに征服を以てする人間哀史である。征服が行はれる。すると古い支配者や支配階級は、新來者に置き替へられる。スメル人や、エラム人が衰へると、その言語は消えてなくなり、種族は混血して、やがて滅亡する。アッシリア人は、カルディア人や、シリア人の中に見る影もなく、溶け去つてゆく。ヒット人はやがて特徴を失ひつくす。そしてスメル人を呑込んだセム民族は、北部から來た新來のアリアン民族の支配者に、席を讓らなければならなくなる。メディア人と、ペルシア人は、エラム人に代つて現れる。しかもアリアン語族系のペルシア語は、他のアリアン族なるギリシア人に依つて公生活から追ひのけられるまで、帝國を支配する。

かうした間に、鍬は來る年も來る年も土地を耕して、收穫が集められる。建築家は教へられて建築する。商人は新手段を凝らして商賣する。文字の知識が擴がる。目新しい事物、たとへば馬や、車や、鐵が輸入されて、人類に恒久の遺産を招來する。海上や沙漠の交易はその量を增し、人間の思想は廣くなり、知識は益々成長する。

尤も退歩や、殺戮や、悪疫があつたことは事實である。しかし全體として、歴史は進歩し擴大した。

過去四千年間、エウフラテス・チグリス兩河の土壌にその根を下ろしたこの新しい文化は、いま成長して大樹となつた。ある時は枝を伐取られ、またある時は嵐に苛まれた。しかしいつも成長し續けて、已むことを知らなかつた。優勢な種族には盛衰があつたけれども、そしてその言語には移り變りがあつたけれども、しかし文化は本質的に發展しつづけた。四千年の歳月は流れても、武人や征服者等は尚ほまだこの文化の上を右往左往して、それが絶えず成長を續けてゐることには氣がつかなかつた。しかし當時（紀元前三三〇年）人々はすでに鐵や、馬や、文字や、算定法や、通貨や、種々雜多な食物と衣服や、それからまた古代のスメル人よりも、この世界についてより廣い知識などを持つてゐた。

サルゴン一世の帝國から、アレクサンドル大王のバビロン征服までの間には、最少限度に見積つても、アレクサンドル大王から今日までと同じ長さの時が經つてゐる。それにまた、サルゴン一世時代以前、人々がスメルの國土に定住して、都市生活を營んだり、寺院に赴いて禮拜したり、また組織化された社會を形作つて秩序立つた農業生活に從事したりしてゐたその時分まで遡るには、また同じ位の長さの時の流れを數へなければならない。エリヅにせよ、ラガシュにせよ、またウルや、イシンや、ラルサにせよ、これらの都市ははじめて歴史上に現れて來る以前、すでに朧氣な記憶となつたほどの遠い過去を持つてゐるのである。

歴史家にとつても、讀者に取つても、最も困難な仕事は、かかる時間的觀念の確實なる把握であるが、かうした古代に於ては、想像力の遠近法に因つて短縮される傾きがある。人類文化の期間の半ばと、あらゆる主要な人類の制度の基調は、サルゴン一世以前に見出されるはずである。

三　エジプト

スメルの古代初期文化に平行して、エジプトに於ても同じやうな過程が行はれた。ただ、スメルとエジプトのいづれが古いか、それとも同一の起原を持つてゐるのか、それともまた一方が他から出たものか、かうした點については未だに論爭があつて、一定の結論に到達してゐない。

太古からアレクサンドル大王時代までのナイル流域の歴史は、バビロニアの歴史と甚しい相違はない。ただバビロニアは四邊が開けてゐて、侵入に都合のよい地勢を示してゐるに反して、エジプトは西は沙漠により、東は沙漠と海によつて護られて、南には黒人種があるばかりである。從つてエジプトの歴史は、アッシリアや、バビロンの歴史ほどには、異人種の侵略を受けたことがない。紀元前八世紀にエチオピア王朝に亡ぼされた時まで、征服者は悉くスエズ地峽を渡つて、アジアからはひつて來た者ばかりである。

エジプトに於ける石器時代の年代は不明であるが、古石器時代や新石器時代の遺跡がある。ただこの遺跡を殘

した牧畜民族が、後のエジプト人の直系祖であるかどうかは、はつきりしてゐない。むしろ多くの點で、かれ等は後代エジプト人と完全に異つてゐる。かれ等は死者を葬つたが、葬る前に死體を切斷して、その肉をたしかに喰つたものである。しかもそれが、死者に對する尊敬の念に基いたものと思はれる。サー・フリンダース・ペトリの言葉を借りれば、かれ等は「尊敬するために喰つた」のである。生き殘つた者たちが、死者の力と德にあやからうとするためであつたらしい。同じやうに野蠻な習慣は、アリアン民族の撒布以前の西ヨーロッパ一帶に擴がつた長塚の中にも、その痕跡が見出される。この風習は、アフリカの黑人間にも行はれたもので、ただ今日では、これが僅かに消えかけてゐる。

紀元前五千年、またはそれ以前に、かうした原始民族の痕跡は跡を斷つて、眞のエジプト人が登場し來るのである。原始民族は掘立小屋に住み、新石器時代の低級な狀態にあつたのに反して、エジプト人はすでに文明化した新石器時代人であつて、祖先の掘立小屋の代りに煉瓦や木造の建築を用ゐ、石材の施工さへ採用してゐた。かうして程なく青銅が到來した。かれ等はスメル人の文字と相並んで、まつたく別種のものとして發達した繪畫文字を持つてゐた。

かれ等は多分、南部アラビアからアデンを經て侵入して來たもので、上部エジプトから次第にナイルの三角洲地方に下つて來たものであらう。ウォーリス・バッヂ博士は、かれ等を「東方よりの征服者」と呼んでゐる。し

かしかれ等の神や、習慣は、繪畫文字同樣、スメル人とは全然別種のものである。かれ等の最古の神像として、知られてゐる河馬の女神の像は、全然アフリカ型に屬してゐる。

ナイルの粘土はスメルの粘土ほどには、緻密でもなく、また彈力性もない。それにエジプト人は、この粘土を文字を書くために用ゐるやうなことはなかつた。しかし、早くから紙草 papyrus といふ葦を剝いて固めたものを用ゐた。紙 paper の言葉の起原がこれから出てゐる。アッシリアの文字は尖筆か押型を用ゐて書いたもので、硬く尖つた書體に適應する。しかるにエジプト人は刷毛を用ゐて書いた。その結果は表現力を豐富にした。

エジプト史の大體の輪廓は、メソポタミア史よりも單純である。從來の史家はエジプトの支配者を幾つかの王朝 dynasty に別けて、エジプト史の時代を第一王朝、第四王朝、第十四王朝といふやうに呼んでゐる。エジプト人はバビロンを攻略したペルシア人のために征服された。そして最後にアレクサンドル大王によつて亡ぼされたのは、紀元前三三二年で、最後の王朝たる第三十一王朝の時であつた。

アレクサンドル大王から今日までの期間よりも、遙かに長い期間に相當するその四千年以上の恒久の年代に亘る文化進展の概況は、かうである。「舊王國」として知られてゐる時代は、メネス王に依つて南北兩王國が統一された時にはじまり、第四王朝に至つて全盛を極める。富と光彩の時代である。王達は人類世界に取つて空前絕後の實現と滿足の機會に惠まれて、自分自身のための紀念碑を建造しようとする欲望に壓倒された。第四王朝の

ケオブス Cheops（紀元前二七三三年、ウォリス・バッヂ博士に依る）ケフレン Chephren ミケリヌス Mycerinus の三王は、ギゼー Gizeh の地に大ピラミッド、第二ピラミッド、第三ピラミッドの宏大なる築造を企てた。大ピラミッドは高さ四百五十フィート、各側面の幅七百フィートに達してゐる。その重量は實に四百八十八萬三千トンと測定される。（バッヂ博士はかう言ふ）。すべてこれらの石は、專ら人間の勞力に依つて置き据えられた。しかもこの想像を絶した宏大な、無意味な墓標の大建造物は、土木工學がまだ起らなかつた時代に、前後三代に亘つてエジプトの資源を涸渇させ、戰後さながらの擧國的疲弊を後に殘すに至つたのである。

第四王朝から第十五王朝に至る歷史は、首府相互間の戰爭や、宗教上の爭鬪や、乃至は王國の分列融合の反覆の物語に盡きてゐる。要するにそれは國內史である。これを封建時代 Feudal Period といふ。歷代のファラオ Pharaoh の一人、ペピ二世 Pepi II は、その治世九十年間に及び、エジプト史中最長期の統治であるが、幾多の碑銘と建造物を殘した。嘗てメソポタミアの文化史に頻來したものが、ついにエジプトを見舞つた。エジプトは遊牧人のセム民族に征服された。かうして牧羊者の王朝、ヒクソス王朝 Hyksos（第十五王朝）が出來たが、やがてエジプト土民のために驅逐された。この侵入は多分ハンムラビが創建した第一バビロニア帝國の全盛期に當るものであらうが、初期エジプトとバビロニア間の精緻な年代的關係に至つては未だ明らかになつてゐない。この後長い間、服從してゐた民衆は、遂に起ち上つて、この異民族を再び追放した。異民族に對する憎惡が、エジプト精神を結合させたのである。

この解放の戰（紀元前約一六〇〇年）の後で、エジプトの大繁榮期、新帝國時代が到來した。エジプトは統一された一大軍國となつて、その遠征軍はエウフラテス河畔までも達した。エジプトと、バビロニア・アッシリアとの間には、再び權勢の爭ひが長年代に亘つて繰返へされた。エウフラテス・チグリス兩河の流域は、これまで戰を交へるためには、離れ過ぎてゐるやうに思はれた。しかるに今や交通が著しく開けた結果、軍隊が一方の流域地方から他方へ、やすやすと進擊し得るに至つた。

この戰に於て、エジプトは暫くの間優勢であつた。紀元前十五世紀には、トトメス三世 Thothmes III と、アメノフィス三世 Amenophis III（第十八王朝）は、エチオピアからエウフラテスに至るまでを支配した。いろいろな意味で、エジプト史中に不滅の名を留めたこの二人の王は、大建築家として、多數の紀念碑や碑銘を殘した。アメノフィス三世はラクソー Luxor を建て、またカルナーク Karnak を大增築した。テル・エル・アマルナ Tell-el-Amarna では、多量の書簡が發掘された。バビロニア王や、ヒット王や、その他の國王と交通した親翰で、ニネヴェを攻略したツシュラタ Tushratta 王の署名のものも含まれてゐる。これらは當代の特殊な政治的社會的事情を知るために、多大の暗示を與へるものである。アメノフィス四世については、後に詳述するが、エジプト王中最も傑出した有能のハタス女王 Hatasu については省略する。かの女は男性の服裝を纏ひ、智慧の

表徴として長髯を蓄へた姿を、紀念碑に留めてゐる。

その後は、シリア人が暫時エジプトの征服者となり、やがて目まぐるしい王朝の交代がはじまる。その中で、第十九王朝にラムセス二世 Rameses II がある。彼は寺院の大造營者で、六十七年間（紀元前約一三一七年から一二五〇年に至る）統治した。モーゼ時代のエジプト王は、彼であつたと言はれる。第二十二王朝にシシャク Shishak がある。ソロモン Solomon の寺院を掠奪したものは、彼である。それから後は、エチオピア人が上部ナイルから侵入して來て、第二十五王朝を築いた。異人種の王朝である。しかもテイグラト・ピレセル三世や、サルゴン二世や、またセンナケリーブに依つて、新アッシリア帝國が建設された以前、紀元前六七〇年に、このエチオピア王朝は崩壊した。かうして今バビロニアは始めてナイル地方に君臨するに至つた。

エジプト人が諸異國民の上に優勢を誇つた全盛時代も、やがて終焉の時が近づいて來た。暫くの間、第二十六王朝（紀元前六六四――六〇〇年）のプサメティクス一世 Psammetichus I の時、エジプト人自身の統治が復活した。そしてネコ二世 Necho II は、メディア人やカルディア人がニネヴェを攻めてゐる間に、暫時ではあるが、シリアの舊エジプト領地を、エウフラテス河に達するまで奪取した。しかもネコ二世はニネヴェが陷落し、アッシリア人が敗北するに及んで、大カルディア王、ネブカドネザル二世、すなはち聖書のネブカドネザルのために、慌しい戰勝の夢から叩き起された。のみならず、ネコ二世と同盟を結んだユダヤ人は、ネブカドネザルのために捕虜となつて、バビロンに移されてしまつた。

紀元前六世紀に、カルディア人がペルシア人に亡ぼされた時、エジプトもその運命をともにした。その後エジプト人は叛亂を企てて、更に六十年間に亘つて獨立した。しかも紀元前三三二年には、アレクサンドル大王を己れを亡ぼした征服者として迎へなければならなかつた。そしてそれから後は、長く異國民の統治にまかせるに至つた。すなはち、最初はギリシア人、次ぎにローマ人、それからアラビア人や、トルコ人や、英國人と、次ぎ次ぎに主權者は變つたけれども、半獨立的立場に置かれる今日まで、かれ等は永劫に異民族の魔手の中に、その多難の運命を委ねなければならなかつた。

これがエジプトの起原以來の略史である。始めの間孤立してゐたエジプトは、その後、交通の至便の增大が、世界の諸民族を益々密接な交互作用の中に引き寄せた時、異國民との間に國情の紛糾が增大して來た。

四　インド

エジプトの簡單な歷史よりも、更に簡單にインドの歷史を述べてみよう。

ドラヴィダ民族は、スメル人や、エジプト人の社會と平行線を描いて、ガンジス河流域に發達した。スメル人の璽印と酷似したものが、北部インドで發掘された。しかし初期インド人の團體が、スメル人や、エジプト人と

おなじ程度に進歩した高級な社會的發達を遂げてゐたものかどうかは、うたがはしい。かれ等は殆んど紀念碑を殘してゐない。文字の發明も實現しなかつた。かうした古代に於ては、セム民族のインド征服は起らなかつたと思はれる。

ハンムラビ時代、またその以後に於て、當時北部ペルシアや、アフガニスタンに占據してゐたアリアン語系の遊牧人の一支族が、北西部からインドに侵入して來た。メディア人や、ペルシア人の祖先と密接な關係があつたかれ等は、征服に成功して、北部インドの暗色人全部に打ち勝つた。そして全半島の上にその支配力と威力を押し擴げた。しかし印度の統一には、遂に成功を示さなかつた。インド史は要するに、國王と國王の戰爭、共和國と共和國の戰爭の歷史である。

ペルシア帝國は、バビロン攻略の後を受けて、國力大膨脹の日にインダス河を越へて、その國境を擴張した。その後アレクサンドル大王は、ガンジス河流域からパンジャブを分つ沙漠地方の邊域まで軍を進めた。しかしここでは、この概說に留めて、インド史と別れることにする。

五　支　那

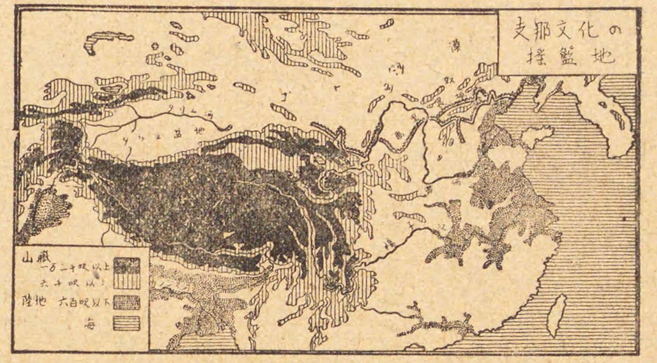
世界文化は三つの系統を取つて發達した。第一はインドに、第二はアジア、アフリカ、ヨーロッパの接合點に近い地方に、第三は全然別種の文化で、支那に發達したものである。この第三のものは、今でこそ乾燥して荒廢した谿谷となつてゐるが、當時豐饒を極めたタリム Tarim 盆地に發祥して、崑崙山脈から二つの方向を取り、一は黃河に沿ふて下り、他は揚子江の流域に出て行つた。

われわれは支那の考古學については、まだ殆んど知つてゐない。しかし種々の石器が、この國の各地方から發掘されたし、殊に河南省と滿洲の發掘に依つて、この國の石器時代文化が、幾分かわかつて來た。

當時の民族は、今日の北支那の住民と大差がないやうに思はれる。かれ等は村落に住んで、豚を家畜としてゐた。斧や、四角刀は石で作り、矢の根は石盤石や、骨や、貝殼で作つてゐた。絲紡ぎの術を知つてゐたし、陶器も製造してゐた。その陶器中には、今日の製品と殆んど同じ型のものがある。この貧しい證據から離れて、不完全ながら探究された支那文學から、支那の初期文化を親ひ知ることが出來る。

支那文化は明かにそのはじめから全然蒙古文化であつた。アレクサンドル大王時代以後まで、アリアン人や、セム人や、またハム人の影響を受けた形跡がない。その當時まで、あらゆるこの種の影響は、山脈や、沙漠や、兇暴な遊牧種族で隔てられた別世界のものであつた。支那人は要するに、自發的に、且つ他の力を借りずに、自己自身の文化を作り上げたのである。

近時歷史家の中には、支那と古代スメルとの關係を想像してゐる人々もある。實際また河南省で發掘された特



殊な型の彩色のある陶器は、中央アジアや、西アジアや、また東ヨーロッパの諸所の古蹟地で發見される陶器と酷似してゐる。これは地理的に隔絶した兩文化の間に、聯絡の可能性を暗示するものでなければならない。もちろん支那とスメルの兩文化は、殆んど全世界にひろまつた初期新石器時代文化の基礎の上に、その起原を持つてゐる。しかしタリム盆地と、エウフラテス下流地方は、山脈や沙漠の宏大な障害物に依つて、間を隔てられてゐる。一度それぞれ定住した兩民族の間に、移住や交代が行はれようとは考へることが出來ない。

恐らく北方からの流れが、南方から來た別な文化の流れと合致したものと思はれる。支那文化は全然蒙古系であるとはいへ、北方にのみその起原があつたわけではない。最初の發祥地をタリム盆地とする以上、それは他の諸文化（メキシコや、ペルーを含んで）とは異り、太陽巨石文化から出て成長したものではない。ヨーロッパ人は南支那の人種學や、史前史については、殆んど知つてゐないが、少くとも南支那では、シャム人や、ビルマ人のやうな緣類民族と混血して、一層黑いドラヴィダ人や、マレー人への橋渡しをしたものかと思はれる。

支那には北方と同樣、南方にも文化の起原があつたことは、この國の記錄に依つて頗る明白である。支那文化が紀元前二千年に歷史の上に現はれるに至つたのは、南方と北方の兩文化の長い間の爭闘や、混合や、また交換の結果である。但し兩者の中で南方文化の方が、より古いものであり、且つまたより高度に發達してゐたものらしい。多分南方支那人が北方支那人に對する役割は、恰度ハム人やスメル人が西部地方に於てアリアン人やセム人に對するやうなものであり、また定住したドラヴィダ人がインドに於てアリアン人に對するやうなものであつたらう。かれ等は最初の農業人であり、また最初の寺院造營者であつたかも知れない。しかしこの興味ある史前史については、遺憾ながらわれわれは深く知るところがない。

支那古代の記錄によれば、北東の國境には常に異人種ウラル・アルタイ民族の匈奴（きょうど） Hun が押寄せて來て、古代の皇帝はこれと戰つたものである。

支那歷史はヨーロッパではあまり知られてゐない。殊にその古代史については、一層不明の點があるが、紀元前約二七〇〇年、乃至二四〇〇年に五帝が統治した。この皇帝達は殆んど信じられない程模範的な人物であつたやうである。

五帝の次ぎに、幾つかの王朝が續く。それが次第に近代に近づくに從つて、益々精確となり、納得することが出來るやうになる。兎に角支那の長い歴史は、國境戰により、また定住民の烈しい爭闘によつて、埋め盡されてゐる。一體この國は、スメルやエジプトのやうに、都市國家の國であつた。政治ははじめ多數の王達の政治であつた。それがやがてエジプトのやうに、一人の皇帝の下に集つて、ゆるやかな封建制度を形作ると、その後で、またエジプトのやうに、中央集權の一帝國となつた。その封建期の二大王朝は、商（紀元前一七五〇——一一二五年）と周（紀元前一一二五——二五〇年）である。當代の青銅器は善美壯麗を極め、その樣式はまた典雅で、今日尙ほ現存してゐるものが尠くない。商朝以前すでに高度の文化が存在したことは疑ふ餘地がない。

エジプトや支那の歴史家が、それらの古代史を述べるに當つて、後世の帝國の王朝と匹敵する王朝の名を以て呼び、またエジプトのメネスや支那の五帝を、等しく「皇帝」として稱してゐるのは、要するに後代との均齊のためである。古代王朝の中央集權的威力は、後世の王朝に比して遙に微々たるものであつた。これを商朝に例を取るも、當代に有力な政治的結合なるものはなかつた。むしろそれは宗教的結合に過ぎなかつた。「天子」は全支那人のために生贄を提供した。支那には共同の書體があり、共同の文化があり、且つまた北西部の國境には、匈奴なる共同の敵があつた。

殷朝の最後の皇帝は慘忍で、且つ愚かな主權者であつた。周朝の建設者武王のために大敗すると、自分の宮殿の中で、生きながら自ら燒け死んだ。武王は國民の叛亂に助けられたと同樣、南西部の種族に助けられたと思はれる。

一時支那は周朝の皇帝達の下に結合してゐたが、それは中世紀のキリスト教國が法王の下に結合した程度のものであつた。周朝の皇帝達は殷朝に代つて、傳統的な國家の祭司となると、支那の國政上の主權を要求した。しかし周朝を結束させてゐた慣習と感情の紐が、次第に人々の心からほぐれ出した。匈奴が北方と西方で支那文化に當り散らした。しかし支那の統一を實現することは出來なかつた。封建的諸侯は獨立を望みはじめた。

一九一九年、巴里講和會議の支那代表の一人、陸徵祥氏は、その著書「支那と國際聯盟」China and the League of Nations の中で、紀元前八世紀乃至四世紀には黃河と揚子江の兩流域にかけて、五六千の小國が分裂し、それらを支配する强國の數も、十箇國を越へたと言つてゐる。支那全土は絶え間のない戰亂に壓倒されて戰國時代を出現したのである。紀元前六世紀には、趙と秦が黃河以北の强國として、また楚が揚子江流域の頑强な威力として、互に干戈を交へた。反楚同盟國は聯盟を作つて、百年に亘る平和をもたらした。すなはち、聯盟は楚に打ち勝つてこれを併合し、武裝解除の條約を取り結んだのである。かうして新らしい平和な帝國の基礎が築き上げられた。

鐵が支那にはひつて來たのは、いつの頃のことかわからないが、紀元前五〇〇年の頃から、鐵の武器はひろく用

ねられた。要するに、アッシリアや、エジプトや、ヨーロッパで。一般に使用された時代から、二三百年後のことである。多分匈奴が北方から支那に輸入したものであらう。

周朝最後の支配者は、秦の王達に依つて追放された。秦の王は生贄に用ゐる青銅の鼎を拋り出して、天に捧げる供物を身を以て提供した。秦朝はかかる態度で創建され、前代に例を見ない威力と効果を以て統治した。

秦の始皇帝（最初の宇宙間の皇帝の意味である）の治世は、支那の封建制度と分立割據の終末點を劃するものとされてゐる。彼は西のアレクサンドル大王が決行したその同じ役割を、東に於て演じた。ただ始皇帝は一層長生した。そしてその統一的覇業は、比較的久しいものであつた。これに反して、アレクサンドル大王の帝國は、大王の死とともに瓦解した。始皇帝は國民總協力を命じた多くの偉業の中で、萬里の長城を築造して匈奴のために備へた。彼の治世が終りに近づくと、内亂が續いた。そして漢朝の創業となつて、秦朝の幕が下りた。

漢朝時代の支那帝國は兩大河の流域を越へて擴張した。匈奴は絶對に侵入することが出來なかつた。しかも支那人自身は西方に侵入して、やがては自分自身と異なる文化人と文化そのものを學びはじめた。

紀元前一〇〇年には、支那の威力はチベットや、西部トルキスタンを越へてひろがつた。そして支那人は、ペルシアや西方諸國と、駱駝の隊商によつて交易を行つた。

支那に關しては、ここで一先づ筆を擱くことにする。支那文化の特徴は、後に更に詳述するであらう。

六　文化の發達

過去數千年間、人類がこの舊世界に於て、太陽巨石文化の野蠻狀態から、一歩自分の道を切り開きつつあつた間に、他の世界では、何が起つたことであらう。

かうした文化の中心地の北、ライン河から太平洋に至る地域では、北歐型民族と蒙古民族が、金屬の使用を學んでゐた。しかし文化が定着しはじめたのに反して、これらの大平原の人々は移動的になつて、緩漫な漂泊的生活から、完全な季節的遊牧生活へと發展して行つた。

文化地帶の南なる中央アフリカや、南部アフリカでは、黑人が一層緩漫な進歩を辿つてゐた。しかもそれは地中海地方から侵入して來た白人種族が、耕作や、金屬の使用法をひろめたことから、その刺戟を受けた結果にほかならない。白人種がはひつて來た道筋は二つある。第一はサハラ沙漠を越へて、西方にはひつたもので、ベルベル人、ツァレグ人、その他がそれである。黑人と混血して、フラ人 Fula のやうな半黑人種を生じた。第二の道筋はナイル河の道に依つたもので、例へばウガンダのバガンダ人 Baganda（ガンダ人 Gandafolk）がそれであるが、極めて遠い白人種の祖先から出た形跡がある。その時分、アフリカの森林は今日よりも密生して、上部ナイル地方から東と北にひろがつてゐた。

三千年前の東印度諸島は、多分古石器時代のオーストラリア型人種が、そこここの濱邊に、ほんの僅かだけばら撒かれてゐたものであらう。かれらは遠い昔、東インド諸島からオーストラリアまで陸續きであつた時分、こゝまでさまよつて來たにちがひない。大洋洲諸島は、當時まだ無人島であつた。太陽巨石文化民族が丸木舟を操つてこの島にやつて來たのは、紀元前一千年以後のことである。更にその後になつて、かれらはマダガスカル島にも達した。ニュージーランド島の美景は、それを眺める人もなかつた。この島の最高の生物は、大きな駝鳥に似た化石鳥 moa であつたが、今では絶滅してゐる。それにまた小さな鷸鴕（しぎ）鳥 Kiwi もゐた。まばらな頭髪のやうな羽毛と、極めて小さな翼の痕跡のある島である。

北アメリカでは、蒙古型民族の一群が、舊世界から切り離されてゐた。かれ等は南方にひろがつて行つて、平原に棲む夥しい野牛の群の狩獵に從事した。それから玉蜀黍を主とする新世界獨特の農業をはじめた。南米にはいつて行つては、駱馬（らま）を馴らして家畜として使用した。メキシコや、ユカタンや、ペルーにはひつて行つては、それぞれ風變りな、異色のある特殊な文化を建設した。かれ等がアメリカの最南端まで達した時分は、巨大な樹懶（なまけもの）の大懶獸 Megatherium や、巨大な犰狳（きゅうよ）の彫齒獸 Glyptodon がまだ棲息してゐた……

かうしたアメリカの原始文化は、人類發達の跡を示す點に於て、われわれを裨益するところが尠くない。第十五世紀の末葉にヨーロッパ人によつてアメリカが發見された時まで、ここでは紀元前五六千年代の太古の思想や

生活が、その儘そつくり殘されてゐたからである。

かれらは鐵の使用を知らなかつた。その冶金術は幼稚なものであつた。主要な金屬としては、銅と金を自然銅や自然金として拾ひ集めてゐたに過ぎなかつた。しかし石材細工や、陶器や、織物は、頗る高度に發達してゐたし、染色術に於ては特に著しい熟練を示してゐた。

舊世界に於ける原始文化の迷信的な風習は、アメリカの社會にも行はれて、種蒔時や收穫時の生贄にからむ迷信の著しい形跡がある。舊世界ではかうした原始的な社會思想は、他のさまざまな思想に影響されて、中和させられ、緩和させられるのが常であるが、アメリカではそれが迷信思想を極度に發達させた。蛇は宗教的裝飾の主要な象徴であつた。要するに、アメリカ文化は本質的に僧侶中心の國であることを思はせる。戰時の指導者も、平時の統治者も、宗教上の掟の下で、神意を遵奉してのみ行動したものである。

かうした僧侶達は、天文學について、深い造詣を持つてゐた。かれ等の曆法に對する知識は、往年のバビロニア人を遙かに凌いでゐた。

ユカタン文化は、マヤ文字 Maya writing といふ精巧な書法を發達させた。われわれが讀み解いたかぎりでは、精密複雜な曆を記錄するために、僧侶達が精力を傾倒して、これを用ゐてゐたものである。マヤ文化の美術は、特に目覺ましい發達を遂げた。ペルーの單純な彫刻は、スメルの彫刻に匹敵する。マヤの織物に至つては、

舊世界の何處にも見られないほど見事なものである。これにやや近いものでは、尤も酷似してゐるといふのではないが、南部のアメリカ・インディアンの彫刻がある。その技巧上の力と、圖案の精巧さに於ては、まつたく驚くのほかはない。同時にまた、そのグロテスクさや、その氣違じみた複雑さと因襲には、途方に暮れるばかりである。マヤの夥しい碑銘は舊世界のどの碑銘よりも、むしろヨーロッパの精神病院の患者に依つて描かれた精巧な繪に似通つてゐる。マヤ精神は舊世界精神とは別系統の發達をしたもので、舊世界の標準による嚴密な合理的精神を以てしては、到底判斷し得られない扭れた思想の一脈があるとしか考へられない。

アメリカ文化の變態が、一般人の精神的變態を培養した例證として、流血の思想をかれらの迷想の中に見出すことが出來る。メキシコのアズテック人 Aztec の文化は屢〻血を流した。そこでは毎年數千人の生贄が捧げられた。生きながら犧牲者を切り裂いて、まだ皷動してゐる心臟を取り出すことが、この不思議な僧侶の精神と生活を支配した。社會生活も、季節の祭も、凡てはこの幻想的な戰慄すべき固定觀念から出發した。

マヤ文字は石に刻まれたばかりでなく、皮膚の上にも書かれて、彩色まで施された。けばけばしく彩られたその彩色は、今日アメリカやヨーロッパの子供に賣られてゐる廉價の色紙に似通つてゐる。それらのあるものは、何かの物語ででもあるかのやうに、同じ模樣が變化しながら幾度となく繰りかへされてゐる。

ペルーの初期の文字は、さまざまな色と長さの糸に結び目をつくつて用ゐたもので、この不思議な、複雑した方法で、物事を記錄した。法律や、訓令までこれによつたものだといふ。この糸の束を結繩文字 quipu と呼んでゐる。結繩文字は今日尙ほ發見されるが、今ではそれを讀み解くことが出來ない。

エル・ワイ・チェン氏の支那歷史は、支那でも文字の發明以前に、同じやうな結繩文字があつたといふことを書いてゐる。ペルー人はこの他にも、地圖を作つたり、計算機を使用したりしてゐた。

スペイン人がはじめてアメリカに來た時、メキシコ人はペルー人のことを知らなかつたし、ペルー人はメキシコ人のことを知らなかつた。昔存在してゐた聯絡は一切失はれて、忘れられてゐた。メキシコ人は馬鈴薯のことを全然知らなかつた。しかも馬鈴薯はペルー人の主要な食料の一つであつた。

紀元前五〇〇〇年に、スメル人とエジプト人は、互に少しも知らなかつた。アメリカは舊世界から、六千年遲れてゐた。

七　アトランティスの傳說

アトランティスの傳說について、述べてみよう。ジブラルタル海峽の先きの大西洋の中に、今から三千年前の頃、一大文明國があつたといふことは、かなり多數の人々によつて信じられてゐる。これは大きな國で、むしろ一大陸であつた。ヘスペリディーズ Hesperides の神園（＊）なるものは、ここにあつたといふ。（＊ギリシア神

話の女神ヘラがゼウスと結婚した時、愛情と多産のしるしとして、地球の女神ジェアから黄金の林檎を貰つた。この林檎はヘスペリディーズの神園に貰つたものであると言はれる。）

ギリシア文學や、後世の文學には、かうした消滅した國について、いろいろな物語を傳へてゐる。それは映畫製作者や、シネマファンには誂向きの話であらう。しかし畢竟地理學上、地質學上、また考古學上の事實としては、受け容れられないものである。

地質學上の杳遠な時代に於て、今日大西洋の荒波が捲きかへしてゐる底に、嘗て陸地があつたことを想像するとしても、それはあながち理由のないことではない。ただ中新世以來、ヨーロッパやアジアが、西洋に伸びてゐた證據に至つては、何もない。しかし文化はたかだか二萬年、事に依れば、ほんの一萬年以來のもので、人類が眞の人間になつたのは、僅かに洪積世以後のことである。われわれはスペインや北アフリカの人類の遺物の中で高度に發達した文化が、嘗てヨーロッパの西部にあつたことを證據立てる何物をも發見することは出來ない。初期ギリシア文學では、ホーマーや、ヘシオドスさへ、スペインの存在を知らなかつた。もとより大西洋を知つてゐようはずはない。

レギナルド・フェッセンデン氏は、かうしたアトランティスの傳說について、始め愼重な研究を發表した。その結論に據れば、アトランティスは大西洋中の一消滅國ではなくて、恐らくコーカサス地方に嘗て華やかな發達を見せた一文化地點であつたらしいといふのである。人類時代以來、ロシアの南部や中央アジアの一帶に、海水がみなぎつたり、潮が退いたりしてゐたことを、われわれは知つてゐる。事實今日の沙漠は以前の海洋であり、生物の跡を見せない今日の不毛の地が、嘗ては密林の繁茂してゐた時代があつた。この地方からは、いつかは初期文化の夥しい遺物が見出されることを信ずべき理由がある。

アリアン民族がまだ南下しはじめなかつたその以前のある時代には、黒海の沿岸に洪水が起つて、一大悲劇を現出したこともあつたであらう。それに急激な大氾濫であつたかもしれない。黒海は今日その水面が五十フィート上れば、裏海とつながる。濕つた寒い年が續いて來ると、黒海や裏海から海面の蒸發を抑止する。その結果は急激な大氾濫を惹き起さないともかぎらないはずである。

現代では、人は誰でも地圖を手にすることが出來るし、一定の地理學的觀念を持つてゐる。かうしたわれわれにとつては、紀元前二千年代の人々が、たとへ博學な人々でも、どんなに地理に暗かつたかを想像することは、至難なことである。嘗てダルダネルス海峽を越へて航海して行つたその消滅國の不思議な物語が、いつの間にか形を歪められて、ギリシアやフェニキアの商人達が地中海の西端に航路を切り開くに及んで、同じこの不思議な物語を、新發見の海峽を越へて達すべき彼方の國の傳說として變形したことは、考へられないことではない。

黒海と裏海に狹まつてゐるジョージア Georgia は、疑ひもなく考古學上に重要な地位を占める國である。も

し今後に於て、初期文化に關して最も貴重なる價値を有する遺物が發掘されるとすれば、それは黑海と西トルキスタンとの中間なるこの地帶から見出されるにちがひない。

ギリシアの物語や傳說の大多數は、このジョージアに集中してゐる。アルゴ船遠征隊（*）Argonaut の目標たる金羊毛 Golden Fleece の國はここである。プロメテウ（**）Prometheus が鎖に縛られて、生きながら兀鷹に啄まれたところもここである。（*太古黑海の東岸コルチスの一神林に、金羊毛が不眠の龍に護られてゐたのをヤースン Jason が五十餘名を率ゐて、アルゴ船遠征を企て、その地に到つてこれを持ち歸つたと傳へられるギリシア神話の一つ。**ギリシアの神人プロメテウスは土偶を造り、天から火を盜み來つて、これに生命を與へたがマーキュリ神の怒りに觸れて、コーカサスの山の岩角に縛られ、兀鷹のためにその肝臟を啄ばまれたといふ。）

サー・フリンダース・ペトリは、コーカサスの南の國、コルチス Colchis と先史時代のエジプトに、極めて古い太古の關係を認めてゐる。ヘロドトスもコルチス人とエジプト人の酷似點について書いてゐる。

第十四章　航海民族と商業民族

一　初期の船舶と航海者

舟の始めは、新石器時代に河岸や湖岸の住民の手で作られたのが、その濫觴である。

それは人間の不完全な游泳力を補助するための浮木に過ぎないものであつた。やがて樹木をくりぬいた丸木舟が出來た。それから、工具類の發達と、初期木工術の進步につれて、船の築造がはじまつた。エジプトやメソポタミアでは、瀝青でかためた原始的な籠編舟が發達した。モーゼがその母のために匿まはれた葦の箱舟は、これであつた。

する中に小枝を編んで、その上に毛皮や生皮を張つた舟が出來た。今日アイルランドの西海岸で、牛皮の枝編舟が用ゐられてゐる。ここでは牛が多い代り、大きな樹木が乏しいためである。またエウフラテスや、南ウェールスのタウィー河で用ゐられてゐる。それにこの古代型の舟は、アラスカでも、アメリカとシベリアの間を縫ふやうに橫ぎつてゐる。皮張りの舟は、枝編舟より以前に生れたものであらう。ガンジス河の上流でも、今尙これ

ナイル河の船

西紀前二五〇〇年頃

が使用されてゐる。かうした大河の流域では、舟は早くから重要な交通機關となつてゐた。やがて充分大海に適した船に乘つて、天涯漂渺たる海原を突切りながら、最初の航海を企てた人は、この大河の河口から出發したものと思はれる。

入江や潟沼で舟乘り術を習ひ覺えた人々は、やがて漁師として海に出て行つた。これが疑ひもなく航海術の始めであつた。地中海に大西洋の水が再び湛へられた以前、レヴァンティン湖上をかうした舟がめまぐるしく往き來したことであらう。

丸木舟は太陽巨石文化の重要な要素であつた。地中海から、最後はアメリカに至るまで、丸木舟はこの文化を携へて、溫暖な海上を漂ひ歩いた。紀元前七千年頃には、別々な河口に代つて、ペルシア灣に注いでゐたエウフラテス・チグリスの兩河の上をさうした丸木舟ばかりでなく、スメル人の小舟や大船が走つてゐた。

スメルの都市エリヅは、當時ペルシア灣口に建つて、海に船を浮べてゐた。（それが今では、海岸から沖積層によつて百三十マイルも隔てられてゐる。）六千年前には地中海の東端に於て、十分に發達した海上生活の證跡を認めることが出來る。多分當時すでに丸木舟は、近東インド諸島の間を橫ぎつてゐたことであらう。エジプトの王

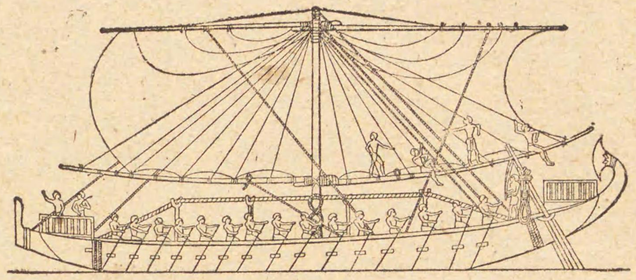
朝以前、新石器時代の繪は、象を載せることの出來るほどの大きさの、ナイルの河舟を描いてゐる。

舟乘り達はすぐに舟がかれらに與へる特殊な自由と機會を實感したであらう。かれらは島々に逃げることも出來る。酋長も、王も、小舟や大船を追跡する目算はない。船長と言へば、卽ち王である。舟乘り達は島々や、陸地の要所に、たやすく巢窟をつくることが出來る。そこで船を港に着けて、ちよつとした農業と漁をやる。しかしかれらの專門でもあり、本業でもあるものは、もちろん海を橫ぎる遠征である。それも通常交易的遠征なるものではない、大抵の場合海賊的掠奪である。われわれが人類について知つてゐるかぎりでは、かう判斷を下さざるを得ない。卽ち、最初の舟乘りは出來る時に掠奪をやつた。そして已むを得ない時だけ交易をした。

古代の航海術は、東地中海や、紅海や、ペルシア灣や、インド洋の西角のやうな、比較的溫い、靜かな海に發達したから、大きな帆を張つた最近四百年間の大海を走る帆船とは、著しくその特徵を異にする。

トル氏はかう言つてゐる。

「地中海では帆船は幾日も風が凪いで進めなくなるが、櫓船はわけもなく滑らかな海上を橫ぎつて、暴風雨が來ると到るところの海岸や島蔭へ手近に避難することが出來る。だから、この海では、航海上の重要な用具は櫓であり、造船術の主要な問題は櫓の排列である。地中海諸民族が西ヨーロッパを支配してゐた時代は、風が帆に適しても、櫓には强過ぎたその北海の沿岸でさへ、尙ほ南方型の船がつくられた……



紅海のエジプト船
西紀前一二五〇年頃

「橈の逆さ漕が最初に見られるのはナイル河である。エジプト最古の繪畫紀念碑に橈船が描かれてゐる。漕ぎ手が二三人、舳の方を向いて順漕に漕いでゐるが、ほかの漕ぎ手は艫の方を向いて逆さ漕をしてゐる。順漕の方がたしかに古い慣習である。何となれば、象形文字の Chen といふ字は二本の腕が順漕の姿勢で橈を摑む姿だからである。象形文字の發明は極めて初期の時代に屬する。この順漕の慣習は、當代の紀念碑に描かれてゐるに拘らず、紀元前二五〇〇年には廢滅したと思はれる。事實紀元前一二五〇年以後の紀念碑では、漕ぎ方は確かに艫の方を向いて逆漕をしてゐる。ただそれでゐて順漕の姿勢で橈を摑んでゐる。多分エジプト畫家は、書き慣れた象形文字の方向に、機械的に從つたものであらう。壁畫によると、ナイル河の船には二十人、紅海の船には三十人の漕ぎ手があつた。しかし最古の壁畫では、漕ぎ手の數はまちまちである。恐らく畫面の餘白次第で人數を加減したものであるかも知れない。」

アリアン語系民族はその後になつてはじめて海に出た。海上に最初に船を浮べたのは、スメル人か、ハム人である。セム人はすぐにそれらの先驅者の後に續いた。セム族の中のフェニキア人 Phoenician は地中海の東端に沿ふて獨立の海港都市を幾つか建設した。その主要なものは、アクル、チレ及びシドンである。その後更に西方に航海を進めて、北アフリカにカルタゴとウティカを建設した。

多分紀元前二〇〇〇年には、すでに地中海にフェニキアの龍骨船が浮んでゐたと思はれる。チレ、シドンの兩都市は、本來島の上に築かれたものだから、陸地からの侵略を防ぐに至難ではなかつた。

さて、大海洋民族の海上遠征を述べる前に、その遺跡がクリート島に發掘された初期海洋民族の甚だ異色のある不思議な根據地を一瞥しよう。

二　エーゲ海都市

初期クリート人は、人種上スペインや西ヨーロッパのイベリア人に似てゐるが、小アジアや北アフリカの暗白人にも近い。その言語は不明である。この人種はクリート島のみではなく、キプロス島や、ギリシアや、小アジアや、シシリーや、また南イタリアにも住んでゐた。白色の北歐型ギリシア人が、マケドニアを貫いて南方に進出して來た時まで、かれらは長年代に亘つて當代の文化人であつた。

クリート島のクノソスに、最も驚異すべき廢址と遺物が發見されてから、クノソスはその他の植民地の光彩を

奪つた觀がある。ただクノソスはエーゲ海文化の一主要都市に相違ないとしても、エーゲ海はその長い全盛の期間に、尙夥しい都市と、廣大な領土を持つてゐたのである。

クノソスには、エジプトの王朝以前の遺跡よりも古い新石器時代の遺跡がある。エジプトに青銅時代が始まるとすぐ、クレート島にもはじまつた。サー・フリンダース・ペトリがエジプトで發見した第一王朝の花瓶は、クレート島から輸入されたものであると言はれる。クレート島で發見された石の花瓶や、魔除や、刻印は、王朝時代以前のナイル河流域と關係があることを示してゐる。ピラミッドを建てた第四王朝の特徴のある石器も發見きれた。第十二王朝時代に、クレート島とエジプトとの間に活潑な交易のあつたことは疑ふ餘地がない。これが紀元前一〇〇〇年の頃まで續いた。

クレートの土壤の上に發生したこの島の文化が、少くともエジプト文化と同樣に古いものであることは明白である。しかもそれはセム人やアリアン人がまだ歷史の舞臺に登場しない以前に、紀元前四〇〇〇年の太古に於て、すでに海上に進水しはじめたのである。

クレート島の繁榮時代は、それほど早くはない。紀元前二五〇〇年頃、この島は一人の支配者の下に統一された。それから古代世界にその比を見ない平和と繁榮の時代がはじまつた。敵襲からの安全。快適な氣候の日常。諸文化國との交易。かうしてクレート人は、生活上にあらゆる技術と享樂を自由に發達させた。

このクノソスは都市といふよりは、むしろ王と、その人民との廣大な宮殿であつた。城壁すらなかつた。王は代々ミノス Minos と呼ばれた。エジプト王が常にファラオと呼ばれてゐたと同じである。

クノソスの王は、ギリシアの古傳說の中に、ミノス王として現はれて來る。彼は迷宮 Labyrinth に住んで、人身牛頭のミノトー（＊）Minotaus を飼ひ、その餌としてアテネ人に少年と處女の貢を賦課してゐた。このギリシア神話はギリシア文學の一部として常に愛誦されて來たものであるが、しかもクノソスの發掘に依つて、この傳說が事實に甚だ近いものであることがわかつたのは、つい最近二三十年のことである。（＊九年目毎にアテネから貢納する七人の少年と、七人の處女を食つたといふ怪物。）

このクレートの迷宮は、古代に他にその比を見ないまでに壯大で、複雜で、且つ豪華を極めた大建築である。のみならず、われわれがこれまで近代生活の最新式な設備とのみ考へてゐた水道や、浴室や、その他の同じやうな施設が、早くも當時すでに完成されてゐたのである。

陶器や、織物や、彫刻や、繪畫や、寶石や、象牙細工や、金屬品や、象嵌細工や、これらはいづれも嘗て人類の手になつたものの中の最も精巧を極めた優秀品であつた。かれらは祝祭や、興行物に熱狂し、殊にまた闘牛や種々の競技に、擧つて耽溺した。女の服裝は、そのスタイルが、驚くべきことにはヴィクトリア朝式である。コルセットを着、また裾襞をつけた衣裳を着てゐた。かれらは一種の文字を持つてゐたが、それはまだ讀み解かれてゐない。

今日人はかうしたクリート人の鴻業に驚異の眼を放つて、かれらを文化の黎明期に於ける信じがたいほどの藝術的才能を持つた民族であるかのやうに見做すことが、普通になつてゐる。しかしながら、かれらの繁榮時代は遂に黎明期を過ぎてゐる。年代をいへばずつと後の紀元前二〇〇〇年頃のことである。かれらの藝術と熟練が最高度の發達を示すまでには、幾世紀かの歳月が流れてゐる。悠々三千年間、外敵の侵略を受けることなく、平和の夢を貪り續けること一千年の久しきに及んだとしたら、かれらの藝術も、光彩もそれほど驚くには足らないはずである。世紀から世紀に、工匠はその熟練を完成させたであらう。そして、男と女は洗練に洗練を重ねたであらう。

かうした恒久の年代に亘つて、かうした平穏な生活を營み得たかぎり、いつの時代でも、またいかなる民族でも、藝術上の彩華を花咲かせないものはない。機會を與へよ、あらゆる人種は藝術的人種となるであらう。

ギリシア神話に依ると、デダルス（*）Daedalus が最初の飛行機を作らうとして企てた場所は、このクリート島であつた。デダルスは巧妙な工匠の義で、機械的熟練を總括して人格化したものである。デダルスの息子のイカルス Icarus は翼を蠟づけにして飛んだが、太陽に近づき過ぎたので、蠟が溶けて海中に墜落したといふ傳說の背後に、抑〻いかなる事實の胚子がひそむかを瞑想することは、興味のあることである。このイカルスこそ實に最初のグライダー飛行家であつたと思はれる。（＊斧、突錐、斜角規等を發明した彫刻家且工匠とせられ、迷宮ラビリンスの設計者として傳へられてゐる。）

やがて一大變換期がこのクリート人の生活狀態の中に闖入した。ギリシア人とフェニキア人が、強力な艦隊を率ゐて海上から迫つて來たのである。その災厄の原因も、その原因を作つた人物も、今はわからない。兎に角紀元前一四〇〇年頃にクノソスは掠奪されて燒失した。クリート人は尙四世紀の間不具狀態の中で、敗殘の餘生を辛くも續けてゐたが、遂に紀元前一〇〇〇年の頃（卽ち、東方に於てアッシリアの勃興した時代）最後の破滅に遭遇した。クノソスの宮殿は破壞された。そしてその時かぎり、再建と再住の機會は訪れなかつた。多分この破壞者は、蠻族ギリシア人の艦隊であつたらう。このギリシア人は地中海の新來者で、北方から押寄せたアリアン語系民族の一群であつた。クノソスを亡ぼしたと同樣、トロイの都市を亡ぼしたのも、かれ等であつた。

シシアス（＊）Theseus の傳說は、この襲撃を語つてゐる。彼は迷宮の奥深く闖入して、ミノスの娘アリアド

= Ariadne の手引に依り、怪物ミノトーを殺戮した。（＊アルゴ船乗組遠征者の一人。アテネ王イージウス Aegeus の子。アリアドニのために絲を以て迷宮の奥に導かれ、ミノトーを殺戮するや、アリアドニを伴つて遁れ、夫婦となる。後にアリアドニを棄てる。）

イリアッドに依れば、トロイの滅亡は、その理由が明白である。トロイ人がギリシア女を盗んだからである。しかるに近代史家は近代思想を以て、これを解釋して、ギリシア人がトロイを襲撃したのは、黒海東岸のコルキスに販路を擴張するためであるとか、或はその他の込み入つた商業上の利益のためであるとか言つて、證明しようとしてゐる。果して然らば、イリアッドの著者は甚だ巧みに、その眞相を隱したものと言はなければならぬ。むしろまた、トロイ人と戰爭をしたホーマー時代のギリシア人は、ベルリン・バクダッド鐵道の一停車場をやつつける目的であつたといふ方が、適當であるかも知れない。

ホーマー時代のギリシア人は、健康にはちきれるやうな、野蠻なアリアン民族で、商賣や販路のことでは、殆んど考がなかつた。かれ等がトロイ人と戰爭をしたのは、度々女を盗まれて、ひどく苦しんゐたからである。ミノスの傳說に因るも、またクノソスの遺跡の實證に徵するも、クリート人が奴隷や、鬪牛者や、競技者にするために、多分はまた生贄に捧げるために、少年や處女を誘拐したり、盗んだりしたことは明白である。かれらはエジプト人に對しては正直に交易を營んだ。しかしギリシアの野蠻人達の集團的實力を認識することが出來なかつた。かれらはギリシアに對して暴力を以て「取引」をした。その結果は自分達の上に劍と炎を持ち來した。

ギリシア人よりも古い他の海洋民族は、フェニキア人である。かれらは大航海民族であつた。そのわけは大商業民族であつたからである。かれらの植民地カルタゴは、紀元前八〇〇年の以前に、チレ市民に依つてアフリカに建設されたが、それが古いフェニキアの諸都市のどれよりも大きくなつた。その前、紀元前一五〇〇年以前には、すでにシドンとチレの兩植民地が、アフリカの沿岸に建設されてゐた。

カルタゴはアッシリアや、バビロニアの軍勢に對して比較的安全であつた。それに、ネブカドネザル二世の長期に亘るチレ包圍に便乘して、大なる利益を蒙つた。前代にその比を見ない世界最強の海軍國となつたからである。カルタゴは西部地中海を己が領海として宣言した。そしてあらゆる船舶を捕獲して、サルディニア以西をその手中に收めるに至つた。

ローマの史家はカルタゴ人を、殘忍酷薄として批難する。カルタゴ人はギリシア人とシシリー島を爭つた。その後紀元前二世紀には、ローマ人と戰つた。アレクサンドル大王はカルタゴの遠征を計畫した。しかしその計畫が實現する前に死んでしまつた。

三　探檢航海

カルタゴはその全盛期に於て、前代未聞の百萬の人口を擁してゐた。その市民の大部分は産業に携つて、産出される織物は世界的に著名であつた。沿岸地方の貿易ばかりでなく、カルタゴは中央アフリカとも大陸貿易を營んでゐた。

ここで斷つて置くが、アフリカに家畜としての駱駝がはひつて來たのは、ペルシア人のエジプト征服以後のことである。また駱駝が交通用の動物として北アフリカに渡つて來たのは、紀元前七前紀のアラビア人の侵入以後のことである。それ以前の沙漠の交通範圍が、極めて狹いものであつたことが想像される。ただ三千年前乃至二千年前のサハラ沙漠は、その乾燥程度や、不毛の程度が、今日ほどではなかつた。岩石に殘された壁畫から察すると、サハラ沙漠の旅行者は、牛や牛馬に乘つて、また多分馬や驢馬に乘つて、オアシスからオアシスへと通行したものであらう。

カルタゴはかうしたアフリカの奥地と海の間に位して、黒人奴隷や、象牙細工や、金屬や、寶石や、その他のものを、あらゆる地中海民族に賣つてゐた。その上、スペインに銅鑛を採掘してゐたし、その船は錫を得るために、ボルトガルやフランスの海岸に沿ふて、北は遠く今のイギリスのシリー諸島か、コーンウォール半島にまで達した。

紀元前五二〇年頃には、ハンノ Hanno なる者が今日尚世界的の大航海として推賞するに足る壯途を企てた。

このハンノは——かれの手記のギリシア語譯で、今日までのこつてゐる「ハンノ週航記」を信用することが出來るなら——ジブラルタル海峽からアフリカの海岸に沿ふて南下して、遠くリベリアの果まで到達した。一行は大船六十を算する大艦隊で、その主要な目的は、モロッコの沿岸にカルタゴの根據地を建設するか、補强するかにあつた。しかも彼は更に南進した。リオ・デ・オロに植民地を作り、セネガル河を突破して航海を續けた。七日後にはガムビアをも越へて、遂にある島に上陸した。晝は熱帶林特有の喰ひ入るやうな靜寂にひきかへ、夜になると、笛や、太鼓や、銅鑼の音が物々しく聞えて來た。それに叢林を燒く火焰が空を眞紅に染めてゐた。そこで一行は恐怖に襲はれて逃げ出した。その先き先きの航海は到るところの沿岸で、同じやうな猛火に燒かれる叢林を見た。焰の河は小山を流れ下つた。炬火は遂に高く昇つて、天空を焦がした。三日の後に一行は湖を控へた島（シェルブロ島か）に着いた。その湖の中にまたある島（マコーレ島か）があつた。狂暴な毛深い男と女がここに住んでゐた。「通譯はこれをゴリラと呼んだ」と彼は書いてゐる。

一行は雌のゴリラ——多分チンパンジーであらう——を數匹捕へてかへつて來た。ただ歸航の途中で暴れ廻つて、手がつけられなかつた。そこで殺して持つてかへつた毛皮を、ジュノーの寺院に供へた。

更に驚くべきフェニキア人の航海について、ヘロドトスが書いてゐる。この話は長い間眞僞を疑はれたが、今では考古學上の證跡によつて支持されてゐる。ヘロドトスによれば、エジプト第二十六王朝のネコ王は、あるフェ

ニキア人に、船によるアフリカ沿岸の一周を命じた。一行はスエズ灣を出帆して南下した。そして遂に地中海を貫いて、ナイル河口の三角洲に歸着した。全航海の所要日數は、殆ど三年に近かつた。毎年かれらは上陸した。そして麥を刈り入れてから、また航海をつづけた。

四　初期の交易

セム民族の人類に對する特殊な贈り物は商業と交易である。しかもそれが早く驚くべき形態をなしたものは、フェニキアの各大商業都市であつた。

セム族のフェニキア人が海上に發展した一方、他のセム種の緣類民族のアラメア人は、ダマスクスを占領すると、アラビアやペルシアの沙漠に隊商の通路を開拓して、西部アジアの主要な商業民族となつた。更にまた紅海やペルシア灣の南方でも、初期海上貿易が行はれた。最近古代のブッシュマンの岩上壁畫が、南アフリカで發見された。それはスペインの東部の古石器時代人の繪畫に比して、その様式と手法の酷似を示すものであるが、この繪の中で、アッシリア産の頭巾を被つた白人が描かれてゐる。

アリアン民族よりも早く文明化したセム民族は過去に於ても、今日に於ても、市場商品の品質と數量に關する感覺の慧敏さに於て、アリアン民族を凌いでゐる。アルファベット文字の發達は、かれらの簿記の必要に基づいたものであり、算定法上の大なる進歩も、所詮はかれ等に負ふものである。現代の數字はアラビア文字である。われわれの算術と代數は、本質的にセム民族の學問である。

セム民族は今日まで、等價と等價の觀念の強い計算的民族である。「爾他人に秤るその同じ秤を以て、爾もまた秤られん。」これである。が滲透してゐる。

他人種、他民族は、種々雜多な不思議な神を氣まぐれに作り出した。しかし正義の商業人としての神を、始めて考へ出したものは、商業的セム民族であつた。その神は約束を嚴守した。その神は最も卑しい債權者をも助けた。その神はあらゆる詐欺的行爲を許すことはなかつた。

紀元前六七世紀以前の古代世界に行はれた商業は、殆どすべてが物々交換であつた。クレディットや通貨は、初期の商業國には見られなかつた。

初期アリアン民族の標準價値は、一般に牛であつた。多分かれらが定住した以前のすべての社會に適應されたものであらう。ヴールー人 Zulu とカフィール族(*) Kaffirs は今日尚その習慣を保つてゐる。イリアッドでは、二枚の楯の一つ一つの價値を、牛の首の數で言つてゐる。ローマ人の金 pecunia といふ言葉は、牛 pecus から出てゐる。牛の貨幣としての長所は、持主から他の者に運搬する手數のかからないことと、もう一つは、飼育の世話や、飼料の費用が要るにしても、繁殖してゆくところにある。(*ヴールー人も、カフィール族もともに南

アフリカに住む黒人の一種族。）

しかし、船舶や隊商によつて交易が行はれると、もはや牛はその長所を失つて來た。そこで種々雜多な牛の代用品が時代時代に伴つて、標準價値としての利便を見出された。煙草は北アメリカの殖民地時代に、法定の提供物であつた。西アフリカでは交換するジン酒の瓶數に依つて、罰金も拂はれれば、商取引も成立する。

初期アジア人の交易には、金屬が含まれてゐた。金屬の塊は需要が一般的であるし、蓄積や保管にも便利である。その上飼料の費用はかからないで、貯るにも小さな室があれば充分である。秤器にかけられる金屬の塊は、すぐに牛や羊よりも重寶なことが認められるに至つた。

鐵を最初に原鑛から還元したのは、ヒット人であつた。鐵は當時あまりない金屬であつたし、需要の多いものであつた。この鐵が最初の通貨であつたと、アリストートルが言つてゐる。「一定の重量の鐵の棒を、プリテン國で通貨として使用されてゐる」と、ケーザルはガリア戰争記 De Bello Gallico の中で書いてゐる。

テル・エル・アマルナで發見されたアメノフィス四世と、その繼承者アメノフィス四世の書簡のコレクションの中に、ヒット王が極めて貴重な贈物として鐵を約束した書簡がある。金は今日同樣、あらゆる標準價値の金屬中で、最も貴重な、また最も携帶に至便なものとされてゐた。初期エジプトでは、第十八王朝の後まで、銀も金同樣珍らしいものであつた。後世東方世界では、一般標準價値が銀となつて、重量を秤られた。銀は今日の金に對する價値關係のやうなものとなつて、その後長くこれが續いた。

初め金屬は鑄塊として取扱はれ、交換の都度重量を秤られた。その後含有量を示す刻印を押されて、純分が保證された。

貨幣が最初に鑄造されたのは、小アジアの西海岸で、鑄貨は金と銀の合金なる琥珀金 electrum であつた。その發行所が都市であるか寺院であるか、または私人の金融業者であるかについては諸説がある。記錄上初めて貨幣が鑄造されたのは、紀元前六〇〇年の頃、小アジア西部の金産國リディアであつた。これが最初の金貨で、鑄造者はリディア王クリーサス Croesus である。その名は富の代名詞となつた。彼は紀元前五三九年にバビロンを奪取したペルシアのキロス王 Cyrus のために征服された。

バビロンではこの時代の以前に通貨が使用されてゐたやうである。刻印のある銀塊の小片、卽ち「刻印附のシェクル」（＊）sealed shekel は、殆んど通貨に近いものである。紀元前二〇〇〇年頃、ウルの月神の神殿に仕へる使者の一行が旅に出た時、瓦に記された信用狀を携帶して、行く先先の都市で、物資の供給を受けたことがあつた。（＊シェクルは古代バビロニアの貨幣の單位。）

皮革や羊皮紙に、巨額の金、または銀を支拂ふことを書いた手形で、發行の捺印のあるものがある。これは貨幣と同じ時代のものか、乃至は貨幣の起原よりももつと古いものであるらしい。カルタゴ人はか

うした紙幣を使用してゐた。

古代の小規模の取引については、殆どわからない。その時分隷屬的の地位にゐた庶民階級は、全然通貨を持たなかつた。かれらは物々交換で商賣を營んでゐた。初期エジプトの繪畫は、この社會狀態を示してゐる。

アレクサンドル大王時代の少し前に、小錢があつた。アテネ人は一組の非常に小さな銀貨を持つてゐた。その小さなものになるとピンの頭位しかない。それを通常口中に啣へて持つて歩いたのである。ギリシアの劇詩人アリストファネスは、喜劇中の一人物が、突然襲撃されて、口中の小錢を呑み込むことを書いてゐる。

五　初期の旅行者

アレクサンドル大王時代以前に、小貨幣がなかつたことや、携帶に至便な交換方法が講じられなかつたことから考へると、その時分旅行が個人にとつて、どんなに困難なものであつたかを想像することが出來る。

最初の旅宿――と言つても、もちろん隊商の宿である――が紀元前三世紀か四世紀の頃、リディアにあつたと言はれてゐる。しかし、この日附は遲過ぎる。たしかにそれよりも古いものであらう。少くとも紀元前六世紀に旅宿のあつたことは確證がある。ギリシアの悲劇作者エスキラスは、その作品中に二度も旅宿のことを書いてゐる。彼は「諸人歡迎者」all-receiver と言ひ、「諸人歡迎の家」all-receiving house と言つてゐる。

その時分、ギリシア地方では、その殖民地をも含めて、私人の旅行者がさらにあつたことが窺はれる。尤も私人の旅行は、比較的新しい流行であつた。初期の歷史家ヘカタイオス Hecataeus やヘロドトス Herodotus は各地を隈なく旅行した。

ギルバート・マレー教授はかう言つてゐる。

「歷史研究のためや發見探檢のための旅行は、むしろギリシア人の發明である。アテネの立法者ソロン Solon はそれを實行した人である。またスパルタの嚴法を制定したリュクルゴス Lycurgus さへ、ひろく旅行したものである……」

かうした少數の私人を除けば、初期の旅行者の多くは、隊商や商船に依つて、金屬や、寶石や、美しい織物の商品を幾梱となく積み込んで、幾シェクルもの通貨をたくさん持つた旅商人でなければ、紹介狀や、相當の從者を連れた政府派遣の役人であつた。恐らく少しは乞食もゐたであらう。それからまた、何處かの禁制の地には、聖地めぐりの巡禮もゐたであらう。

エジプトではナイル河の上流と下流に、極めて安全な狀態に置かれたたくさんの旅行者があつた。アメノフィス三世時代には、古代のピラミッド見物に河を下航する遊山者もゐた。遊覽客がここに始めて出現する。

紀元前六〇〇年以前の初期世界では、單獨の「見知らぬ人」の旅行は甚だ稀れであつた。偶ゝ一人でやつて行

けば嫌疑や危難はすぐに身に振りかかつた。恐ろしい慘酷な目に逢つて、苦しむこともあつたであらう。かういふ人達を保護する法律といつては、何もなかつたからである。從つて團體を離れる旅行者は一人もなかつた。だから誰も彼も、もし遊牧人なら酋長の統治する部族に、文化人なら大家族に、さもなければ大寺院のどの團體かにそれぞれ所屬して、結び附けられて、生きて、そして死んで行つた。もしまた、それ以外の者があたら、それはどの奴隸群かに所屬する奴隸であつたらう。

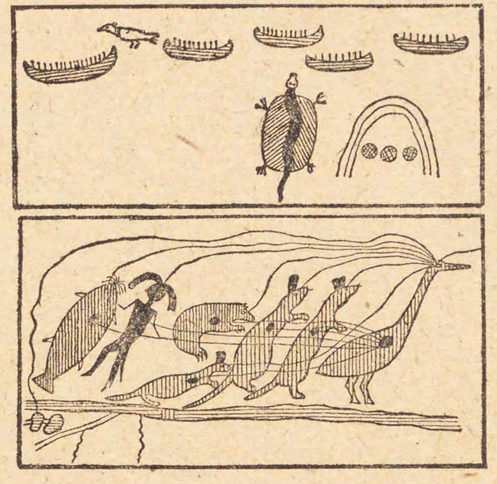
その結果は、自分の住む世界以外のことについては、僅かの奇怪な傳說以外には、何も知らなかつた。今日われわれは、紀元前六〇〇年の世界について、當代に生きてゐたどの人々よりも、遙かに多くを知つてゐる。われわれは、それを描き、それを過去と未來の關係に置かれた全一體として考へてみる。われわれはエジプトや、スペインや、メディアや、インドや、また支那に於て、同一時代に行はれた物事を精確に知りかけて來た。われわれは空想の中で、ハンノの水夫達の驚きばかりでなく、河岸に警告の狼火を擧げた土人達の驚きをも共にすることが出來る。「週航記」に書かれた「天空を焦がす炬火」も、年々の季節に枯草を燒く野火の習慣に過ぎなかつたことを、われわれは知つてゐる。一年、また一年、益々多く、益々迅速に、われわれの常識は增大する。いつかは人々が過去時代の人々について、もつと多くを知るであらう。そしてその時までには、多分かれらをすつかり理解するであらう。

第十五章　文字

一繪文字

これまでの數章にわたつて、わたしは文化の黎明期以來、紀元前六世紀の大王國や大帝國に到るまでの人類社會の發展の跡を概說した。そこで今、紀元前一萬年乃至五百年の間の各時代に行はれた社會的推移の一般的過程や、人間思想の成長や、また人間の相互關係の複雜性などについて、更に精密な檢討を試みよう。これまでわたしが述べて來たことは、バビロニアや、アッシリアや、エジプトや、インドや、支那の諸國の時間的、空間的關聯を明らかにするために、地圖を調べることと、主要な王や帝國の名を列記することに過ぎなかつた。今こそわたしは歷史のほんたうの仕事に取りかかる。かうした外形の下に潛つて、人類個々の思想と生活を掘り出してみよう。

五六十世紀間の社會的進展中に於ける最も重要な事は、文字の發明であり、また文字が次第に發達するにつれて、人間生活上に重大な意義を持つに至つたことである。文字は人間の心靈の新樂器であり、心的活動の分野の



アメリカ・インデイアンの繪文字

【上圖】　シュービリオル湖岸の岩石上にある湖上渡船の繪である。五隻の獨木舟の縱線は、乘組員の數を示す。鳥は魚狗（かはせみ）即ち酋長である。寫狀線（空）の下の三重の圓は、渡るに三日間を要したことを示してゐる。

【下圖】　インディアン部族のある群より北米合衆國議會宛に提出したある小湖の漁業權請願書である。動物は部族の祭神で、貂、熊、人魚、鯰等が鶴に導かれる。各動物の眼と心臟から鶴の眼と心臟に續く線は、各部族の決心が一つであることを示す。鶴の眼から出てゐる他の一本の線は、下部左端の粗末な地圖に示された湖水に達してゐる。

驚くべき擴大であり、且つまた傳統的持續の新機關である。われわれは既に後期古石器時代と、初期新石器時代に於て、言語の發達がいかに人類に傳統的精神の手掛りを與へ、且つまたいかに協心戮力の目覺ましい補强を招來したかを見た。ある時代に於ては、この新獲得物なる言語が、繪畫の初期的功業を壓倒して、身振の使用を絕滅させたことは事實である。しかし、繪はすぐにまた記錄として、記號として、繪を描くことのよろこびのために再び現はれた。かうして繪文字は眞の文字の出現前に生れた。今日尙ほアメリカ・インディアンや、ブッシュマン人や、その他の世界中の野蠻人の間に、この繪文字が用ゐられてゐる。繪文字は本質的には事物及び行爲の繪であつて、紋章的な符號に依つて固有名詞を現はし、線や點を用ひて月日や、距離や、その他の計數的觀念を補足するのである。

かうした繪文字に極めて近いものに、今日ヨーロッパ大陸で、國際鐵道の時間表の中に用ゐられてゐる文字繪 pictograph がある。コップを現はした小さな影繪の符號は、簡單な飮食物を供する驛食堂を示し、交叉したナイフとフォークは料理店を、小蒸氣船は連絡船への乘換を、御者の角笛は乘合馬車を意味する。同じやうな符號は有名なミシュランのヨーロッパ自動車旅行案內書にも用ゐられて封筒は郵便局を、受話器は電話を示してゐる。ホテルの等級は家の窓の數が、一つであるか、二つであるか、それとも三つ、四つ、それ以上であるかに依つて示される。同樣に道路には道ばたの符號がつけられて、門は行く手の踏切を、彎曲した斜線は危險なカーヴを現はしてゐる。かうした象形文字式の符號から支那文字の起原まで、あまり遠い距離ではない。

支那文字は今日尙ほ象形文字の痕跡を留めてゐるものが幾つかある。尤も今日では大部分がその痕跡を認めがたい。口の字はもとは口の形の穴を書いたものであるが、筆遣ひの便宜上四角になつた。子の字はもとは小人を

現はしたが、今では性急にのたくつて、一本の横線がある。太陽といふ字はもとは大きな圓を描いて、中央に點が一つあつたが、組立の便宜上、一本の横線のある長方角に改まつて筆遣ひが樂になつた。かうした象形文字を組合せて、第二次的の觀念を表現する。例へば口の象形文字が、蒸氣を意味する象形文字と結びつくと「言」といふ字になる。

かうした組立に依つて出來る文字を表意文字 Ideogram と呼ぶ。「言」といふ字と舌といふ字を組立てると、「話」といふ字になる。家根の符號「宀」と、豚の符號「豕」を組立てると、家庭、即ち「家」の字になる——尙斷つて置くが、豚は古代支那ではアイルランド同樣、家庭經濟上の重要なものであつた。

前にも述べたやうに、支那語はいろいろな意味を現はす少數の單綴音から成立つてゐる。從つて同一音でありながら、繪で現はすには不向な種々雜多の思想を現はすために用ゐられてゐる象形文字や、表意文字が少くはない。かうした用途で使用される文字を、表音文字 phonogram と呼ぶ。

例へば「はう」 fang は船の意味があり、場所の意味があり、紡ぐ意味があり、また芳香や、訪問の意味がある。それらの區別は文脈に依つて識別される。ただ船の「舫」は書き易いが、他の意味の場合の「はう」は書き難い。ところで、それらをどう書くかといふと、「はう」の種々の意味を區別するために、同じ「方」の字を用ゐながら、特殊な符號を結びつけて限定する。そしてどの意味の「方」であるかを示すのである。場所の意味の場合では「土」の符號を結び合せて「坊」とする。紡ぐ意味の場合では糸の符號を結び合せて「紡」とする。訪問の意味の場合では言葉の符號を結び合せて「訪」とするの類である。

象形文字や、表意文字や、表音文字の發達の徑路を、更に明らかにするために、英語に依つて類似の場合を例に引いて見よう。もしボックスといふ言葉と品物を、繪で現はすならば、ボックス、即ち箱は正方形を以て、またその蓋を斜線を以て現はすのが自然であらう。これが即ち象形文字である。もしまた貨幣を現はすために圓を描くならば、この圓を正方形の符號の中に入れれば、それが金箱となり、金庫となる。これが表意文字である。ところがボックス box といふ言葉は、箱以外にも用ゐられる。例へばボックスウッド boxwood は黄楊材であるが、ボックス・シュラブ box shrub は黄楊の木である。この黄楊の木をほかの木から區別して、すぐにわかるやうに繪に描くことはむづかしい。しかし前に述べた箱の象形文字を描いて、それに木の符號を附け加へるなら、そのボックスは普通の箱ではなくて、ボックスウッドであるといふ意味を限定するのは容易なことである。また動詞としてのボックスは、平手で打つとか、拳骨で殴るとかいふ意味を持つてゐる。これを表はすにはまた限定が要る。即ち二本の劍を交叉した符號は、屢々地圖の上で戰場を現はすに用ゐられるが、これを組合せればよい。劇場のボックス、即ち客席の土間は、更に別な限定を要する。こんな風に組立てゝゆくと、表音文字がいくらでも生れて來る。

漢字は甚だ特殊な、且つ複雑な符號文字である。多數の文字を覺え込んで、その使用に熟達しなければ、漢字を自由に行使することは出來ない。この漢字がいろいろな觀念を表現したり討議したりする力を、どれだけ持つてゐるかといふことは、西洋の標準では到底評價し得ない。ただ兎に角西洋文化の單純で手つ取り早いアルファベットと同樣に、ひろく普遍的な精神力の基礎をつくる可能性を、この漢字なる道具が持つてゐるかどうかは疑はしい。

支那にはかうして進士なる特殊の讀書階級が出現した。これが同時に支配階級であり、官僚階級であつた。かれらは思索や事實に就いてよりも、文字や古典的な形式の上にその精力を集注した。その結果、支那國民は比較的平和に惠まれた、甚だ知的な國民性を持つてゐるにも拘はらず、その社會的、また經濟的進歩を著しく阻止された。今日支那が政治的に、社會的に、且つ個人的に未開の域を脫し得ないのは、全世界の强力な壓迫そのものよりも、寧ろこの言語と文字の複雜に、その原因を歸すべきではなかろうか。

二　綴音文字

支那人が構造の複雜な、使用の困難な形式のぎこちない文字を作つたことは、單純、迅速、精確、平易な通信を尚ぶ近代的要求に合致するものではなかつた。一方西洋に發達して來た文化は、異つた方法で、全體としてはもつと便利な方法で、文字を作り出すために努力してゐた。尤も西洋の文字は、必ずしも迅速と平易を主眼として工夫された譯ではないが、環境がおのづからかうした結果を招來したのである。

スメル人の繪文字は粘土板の上に、小さな尖筆 style で書いたものである。しかも曲線を描くことは、困難でもあり、不精確でもあつたところから、楔形の符號を習慣的に書くやうになつて、本來の物の形とは遠ざかつてしまつた。かうした拙い繪で用を辨じたことが、却つてスメル人の書法の發達を助けた。楔形文字は忽ち支那の象形文字や、表意文字や、また音韻文字の領域を凌駕した。

判じ畫と言はれる考へ物を、人々は知つてゐるであらう。これは繪を以てある言葉を現はすのであるが、その言葉が現はす物事ではなしに、同じ音を持つ他の物事の繪を以てするのである。例へば、二つの門、卽ちゲーツと、一つの頭（ヘッド）は、地名ゲーツヘッドの判じ畫で、また小川（ベック）と王（キング）とハム肉は、地名ベッキングハムの判じ畫となる。スメルの言語は恰度こんな具合のものである。それは極めて長い多綴字で、まつたく不變の綴音で出來てゐる上に、その綴音の多くが個々獨自の意味を持つてゐる。そこでこの楔形文字は急速に發展して、符號の一つ一つが一つの綴音を現はし、その綴音が何れも判じ文字となつた。

やがてセム人がスメル人を征服すると、かれら自身の言語に綴音の方法を適用して、まつたく一字一音式の文字に改めた。それがまたアッシリア人や、カルディア人に踏襲された。しかしそれは一字一語ではなくて、一字

一綴音文字に過ぎなかつた。この楔形文字はアッシリアや、バビロニアや、近東諸國にかけて、長時代の間行はれた。今日われわれのアルファベット中の幾つかに、尙その名殘を留めてゐる。

三　アルファベット

一方、エジプトや、地中海沿岸では、他の文字が現はれた。この起源はエジプトの宗教的繪畫文字、卽ち象形文字 hieroglyphics に發してゐると思はれる。それは一部分音文字となつてゐたものである。エジプトの古碑を見ると、象形文字は裝飾的で、且つ硬い、複雜な文字である。しかし文通や處方箋などに、エジプトの僧侶はもつと單純な、草書體を用ゐた。それが僧侶文字 hieratic script である。

この僧侶文字と並んで、他の文字が象形文字から生れた。それは今日消滅してゐるが、當時地中海沿岸のエジプト以外の諸國人、卽ちフェニキア人、リビア人、リディア人、クレート人、ケルト・イベリア人等に依つて、商賣上の目的のために用ゐられた。それらの文字の幾つかは、後期楔形文字を踏襲したものである。それが外國人の中にひろまるにつれて變形して、母幹を失ふに至つた。もはや當初の繪文字の痕跡はない。それは象形文字でも義字でもない。かうして單なる純音符文字の系統としてのアルファベットとなつた。

地中海沿岸諸國には、著しい差異のある種々なアルファベットがある。フェニキアやその他の諸國のアルファベットには母音が多い。多分フェニキア人は子音を極めて强く發音するに反して、母音を漠然と發音したものであらう。事實南アラビアの諸部族にこれがある。それにまた、フェニキア人は始め商賣上の計算や記號に頭文字だけを書くために、このアルファベットを用ゐたやうである。

地中海アルファベットの一種がギリシア人の間に渡來したのは、イリアッド時代からずつと後世のことであつた。ギリシア人はすぐにこれを以て、高度に發達したアリアン語の明瞭で美しい發音を現はすために努力した。最初は子音文字だけであつたものを、ギリシア人がこれに母音を加へたのである。かれらはこの文字を借りて記錄を綴り、吟唱詩人の傳統を助け、且つ確立した。かうして文字に書かれた文字が、やがて大河となるべき細流として始まつた。

四　人類生活と文字

繪畫から出發した文字は、極めて自然な階段を經て發達した。始め文字は長い間單なる繪畫の記錄上の補助物として、特殊階級の興味でありまた祕法であつた。しかし文字は表現力の點で繪畫の遠く及ばない特長があつて因襲化させたり、法典を編んだりする上では、直接的な繪畫に劣るものではない。文字に依つて文書を送るならば、發信者と受信者以外の文字を知らない者には、その意味が解らない。またさまざまな物事を書きとめて置く

ならば、自分の記憶を助け、味方の記憶のためにも便宜があるが、一般人にはこれを祕密に保つことが出來る。初期エジプトの文書中に、醫藥の處方や、魔術の呪文などが文字で書かれてゐるのは、このためである。

文書の始めは、計算書、手紙、處方、名簿、道案内などであつた。その後讀み書きが普及するにつれて、やがて自分の知つてゐるある祕密なり、變つた思想なり、または自分の姓名なりを書き留めて置いて、見知らぬ遠隔の地の人を驚かさうとし、自分の死後永く讀者の眼や心を奪つてやらうとする人間にありふれた、をかしい感傷的な欲望が起つた。かうしてスメル人は壁に搔痕を殘した。古代の遺蹟として今に傳はつてゐる岩壁や建物は、人類中の最大自家宣傳者たる王達の名前や自己吹聽の文字で埋まつてゐる。恐らく古代の碑銘の半分は、この種類のものである。多くの場合、それらの碑文は、故人が生前に自分の名前や自己吹聽を書き列ねたものだからである。

かうした名前を刻む自己主張の欲望や、祕法祕傳の愛著から、文字は限られた狹い範圍以外には傳はらなかつた。しかし一方、また他人に話さうとする人間の社會的欲望が働いてゐた。そして長い時代の經つ中には、知識や傳統の範圍も内容も性質も發達を遂げて來た。この點について、またこの關係について、前各章で述べて來た人間生活上の基礎的事實を概括することは、興味のないことでない。人類史上に於ける文字の絶大なる價値を明白にするのみならず、人類の將來に於て演ずべき文字の役割を暗示するはずだからである。

1　親が死に、子が生れる。この事實に對して、生物は始め不連續的な意識を繰りかへしたに過ぎなかつた。爬行類動物はその腦の中に經驗を蓄積する可能性がある。しかしその個體が死ぬと、經驗もそれとともに滅びる。その動機の大部分は純然たる本能的のものであり、心的生活の凡ては遺傳（生れつき）の結果である。

2　しかるに哺乳動物は、純粹の本能に傳統が加はる。母親の手本を見做つて經驗の傳統を承け繼ぐ。犬や、猫や、また類人猿等の精神的に發達した動物にあつては、無言の教訓さへある。例へば母猫は仔猫の無作法を折檻する。母猿や狒々の母親も同樣である。

3　原始人は經驗の遺傳の力の上に、更に表現藝術と言語が加はる。繪畫彫刻による記錄と、言語による傳統が始まる。

言語による傳統を最高度に發達せしめたものが吟唱詩人 bard（＊）であつた。かれ等の功績は今日の言語を創造した。（＊中世ケルト種族の遊歴藝人で、王侯の功績などを歌に作り琴に合せて謡ひ歩いたものである。）

4　繪畫による記錄から發達して、文字が發明されると、人間の傳統は益々充實して、且つ益々精確なものとなつた。これまで時代から時代に移り變りのあつた言ひ傳へは、始めて不變なものとなつた。何百マイルとなく相隔てた人々が、互に思想を交通することが出來た。そして、次第に多數の人々が文書による知識と、過去及び未來の觀念を共有し始めた。人間の思索はその働きを擴大して、異境、別時代の人々が互に反應した。人間の思索はかうして益々連續的に、且つ持續的になつた。

5　文字の眞の威力は、尙數百世代の間發揮されなかつた。そのわけは原文の寫しを複製する方法が、長い間成功しなかつたからである。ある時代には原文複製の唯一の方法は、寫本のほかにはなかつた。それだけ書物は高價であり、且つ稀有なものであつた。物事の祕密を尙び、物事を禮式化し、神祕化して、一般民衆の上に利益を得ようとする傾向は、常に人心を強く支配してゐた。多數の人々が讀むことを知り、書物の中に祕藏された知識と思想の寶庫に觸れたのは、極めて最近のことである。

兎に角、文字の發明以來、恒久不滅の傳統が人心の中に芽生えた。人類は自己及び自己の世界を次第にはつきりと意識して來たのである。尤も歷史に見る智力發達の微光は微々たるもので、始め世界には無智と健忘が充滿してゐた。文字は戸の隙間から暗室の中に射し込む一條の光線のやうなものであつた。しかしその光線は次第に幅廣くなつて成長した。そしてヨーロッパ史上の印刷術發明者によつて、扉は急速に開かれた。知識はかうして焰となつた。この焰が燃え上ると、文字はもはや惠まれた小數人の特權ではなくなつた。今日われわれの時代に於ては扉は一層廣く開かれて、光はより明るくなつた。

それにも拘らず、今尙朦朧としてゐるものがある。光は尙塵と煙の雲を通して來るのである。扉はまだ半分だけしか開かれてゐない。今日われわれの世界は、ほんの知識の初步にはひつたばかりである。

第十六章　神・僧侶・王

一　僧侶の出現

エジプトやメソポタミアに起つた人間の新集團を仔細に檢討するならば、それらの都市には必ず單獨又は一群の寺院の存在に氣づくであらう。ある地方では寺院の近い區域に、王宮が併立する。しかもそこでは、寺院の尖塔は王宮を壓して高く聳えてゐる。かうした寺院の存在は、フェニキアの各都市でも、またギリシアやローマでも、その例に洩れることはない。

安逸歡樂の鄕土たるクノソスの王宮でも、他のエーゲ海民族の諸都市でも、必ず宗教的神殿が見られた。クリート島では王宮都市から離れた所にも、更に幾つかの寺院があつた。こんな風に古代文化世界では、到る處寺院の存在しない處はなかつた。事實アフリカでも、ヨーロッパでも、また西アジアでも、苟も初期文化の洗禮を受けるかぎり、寺院の建立を見ないことはなかつた。殊に最古の文化國たるエジプトや、スメルでは、寺院はもつとも顯著な存在であつた。「週航記」を書いたハンノは、アフリカの最西端と考へた場所に、ヘラクレスの寺院

を建てた。

文化の淵源と寺院の出現は、歷史上同時に起つてゐる。この兩者は同一のものである。都市の起原は歷史上の寺院時代に屬する。都市は種蒔時の血腥い犧牲の祭壇の周圍に建設されたものである。

蛇神の信者
クノソスより出た陶器の像

寺院の中には必ず神殿がある。神殿には一般に、異樣な半獸形の巨像が犧牲の祭壇の前に置かれる。後代のギリシアやローマの寺院になると、それが人間の姿を借りた神に變つて來る。かうした像は神として、または神の姿として、さもなくば神の象徴として考へられ、それを崇拜するために寺院が出來たものである。

寺院に附隨して、僧侶や、尼僧や、寺男がゐて、それが時としては驚くべき多數に上ることがある。常に特殊な衣裳を着て、市民中の重要な階級を占める。かれらは家庭を持たないで、かれら自身の新たな一家族を形成する。一般市民の中から選擇された聰明な人々の特殊

階級である。

この僧侶達の主要な任務は、寺院の神を禮拜することと、神に犧牲（いけにへ）を捧げることである。尤もそれは特殊な時や季節に行はれるのであつて、年中行はれるものではない。最も重要な儀式は種蒔時の犧牲が供せられる時である。牧畜と農業が起つて以來、一年の季節の相違や、月日の相違に就いての觀念が、人間生活の中にはひつて來た。寺院はその季節や月日を覺えてゐて、祭禮を執り行つた。古代都市の寺院は、時計やカレンダーの役目を勤めたものである。

しかし寺院にはかうした季節の犧牲や曆（こよみ）の觀測等の初歩的な仕事のほかに、もつと重要な仕事があつた。古代の寺院は諸事件の證明書や割符（＊）を作つた。文字の起つたのは寺院である。知識も寺院のものである。民衆は祭禮に集團となつて詣でるばかりでなく、個人としては救ひを求めに行く。古代の僧侶は醫師であり、魔術師であつた。（＊切り目をつけた木札に貸借の數を複記して切り目より割り、貸借者に各その一片を取らせて、後日の證としたもの。）

古代の寺院には私事の叶つた御禮としてのささやかな供物が献ぜられた。今日尚カトリックの禮拜堂に、祈願が聽かれて救はれたしるしとして、心臟や手足の模型の奉納物 ex votos が捧げられてゐる。

四千年前ウル（＊）の月神の神殿は大地主で、當時すでに交易や産業上の方法が發生してゐた。小作人の百姓の納金が類別に記帳されてゐるし、受取證やその寫しまで取つてある。女の歸依者や奴隷は、寺院の工場で働いて、貢稅として納められる羊毛の紡織に從事して、稼ぎ高に應じて賃銀を貰つてゐた。さうしたことが入念に記帳されてゐる。（＊南バビロニアのスメル人の首都。）

原始時代の遊牧生活にあつては、醫者や、神官や、魔術師は重要なものではなかつた。それが都市生活の進展とともに發達して、野蠻狀態から文化的な定住へ、遊牧生活から規律的生活へと移るにつれて、僧侶は重要な存在となつた。同時に奇異な物事に對する原始的な恐怖や、それから遁れようとして救ひを求める願望や、不思議な神の力に縋らうとする哀求や、清淨を念ずるうぶな祈りや、また力と知識をわが物にしようとする熱望などの凡てが、寺院なるこの新たな社會的現象の發達を齎した。

寺院は複雜な必需性の推積から、數多の根源と必要を以て生れて來た。寺院を支配する男神女神はさまざまな想像の所産であり、あらゆる衝動や、思念や、半思念から出來上つた。そこである神はある種の觀念に支配されて出來たものであり、他の神は別な觀念から生れたものである。神の起原について、かうした多種多樣の別のあることを力說する理由は、宗教の起原に關して今日存在する夥しい文獻が、各々その主張を異にする所以を明らかにするためである。例へばマックス・ミュラー教授は生涯の間いつも太陽說、卽ち太陽崇拜の觀念を主張して已まなかつた。彼に從へば、古代人には快樂も恐怖もなく、威力の熱求も、夢魔も、幻想も持たずに、ただ大空

の慈悲深い光と生命の源泉たる太陽をのみ常に瞑想してゐたものだといふ。もとより日の出と日沒は、日常生活上の興味ある事實には違ひない。しかしそれは尚多くの興味ある事實中の二つに過ぎない。

三四百世代以前の古代人も、今日のわれわれと同樣の頭腦を持つてゐたはずである。われわれの幼少年時代の空想は、恐らく初期宗教の起原と規を一にするものである。幼い時分の心的經驗を回想するならば、人は容易に最初の神の漠然として、怪奇的で、支離滅裂なことを想像し得るであらう。

寺院史の初期に幾つかの太陽神のあつたことに疑ひはない。ただ他に尚河馬の神や、鷹の神があつたし、牛の神もあれば、奇怪な男神、女神もあり、恐怖の神や異樣崇拜の神もあつた。のみならず、大空より突如として落下した隕石の塊に過ぎない神から、その形の珍奇異樣のためにばかり神にされた自然石の神までであつた。

バビロンのマルヅク神 Marduk や、フェニキア人、カナーン人のバール神 Baal なども、要するに今日の子供が思ひつきさうな傳說的怪物に過ぎない。遊牧人が定住生活をはじめた時、かれ等は神に配するに妻の女神を發明した。エジプト人やバビロニア人の神の大部分は、妻の女神を持つてゐる。しかし遊牧人のセム人の神は獨身である。食物の乏しい草原に遊牧する種族は、子供に對する欲望がなかつたためである。

神に住むべき家、供物を捧げさせる家を與へることは、妻を持たせること以上に自然である。この家を智の人たる魔術師が管理するのも自然である。この家を市街から少し離して建てることは、神の威嚴を大いに增すこと

エジプトの河馬女神

になる。農業人が定住して、その人口を增すにつれ、初期寺院と初期僧侶が次第に發達して、一方には偶像や、神殿や、祭壇を設け、歸依者の群の立並ぶ長い內陣を備へた長い寺院建築の時代が、かうして到來した。

記錄や祕法の保存所たるが故に、威力や、助言や、教誨の中心たるが故に、想像力に富んだ聰明な人を求めて禮拜式を執り行はせたが故に、寺院はやがて都市團體の頭腦となつた。畑を耕やし、家畜を飼ふ民衆の寺院に對する態度は、單純で騙され易かつた。寺院に住む神の姿は滅多に見られなくとも、想像力が一層尊く思はせる。神の寵を得れば繁榮があり、神の怒に觸れれば不幸を招く。ささやかな供物も神の心を慰め、神の奉仕者の助けを得る。何人も心の中でさへ冒瀆の罪を犯し得ないほど、神は驚異そのものであり、且つその威力と智慧は無限である。かれ等は皆かう考へ、かう信じてゐた。そして僧侶の中ですら、その大多數はこの標準から少しく高い程度の思想しか持たなかつた。

二　僧侶と星辰

エジプトとバビロニアの主要な寺院について、興味ある事實がある。それは寺院の入口と神殿が同じ方向に面して建てられてゐることである。即ち東を本として位置を定められてゐることである。

バビロニアの寺院の多くは眞東を向いて、三月二十一日と九月二十一日の春分秋分の日の出の方角の正面に面してゐる。春分の日はエウフラテス・チグリスの氾濫が始まる日である。ギゼーのピラミッドは東と西を向き、スフィンクスは眞東を向いてゐる。ナイル三角洲以南のエジプトの寺院の多くは、眞東を向かずに夏至の日の出の方角を向いてゐる。ナイル河はこの日の前後に氾濫し始める。また寺院の中には殆んど北方を向いてゐるものや、天狼星（*）その他の恒星の出る方角を向いてゐるものもある。（*北天中で最も光の強い恒星）

かうした方角を一定してゐる事實は、神と太陽乃至星辰との間に、古く密接な連想を持つてゐたことを示すものである。寺院以外の民衆の一團が迷信を續けてゐる間に、寺院内の僧侶は天體の運動に神殿の威力を結びつけて瞑想に耽つた。かれ等は奉仕する神について考へ、その神に新らしい意義を考へた。星辰の神祕についても瞑想した。不規則に天空に撒かれて、かくも莊嚴にかくも沈默を續けて運行する燦爛たる天體が、人類にとつて運命の前兆を意味するものであると考へたことは、かれ等にとつて甚だ自然であつた。

兎に角この寺院の方角定位は、年々の新年の祭日を定めるのに役立つた。夏至の日の日の出の方角に方位を定めた寺院では、年の中のほんの一朝だけは、最初の太陽の光線が寺院の暗闇の中に闖入して長い柱廊を傳はり、堂奥の祭壇の上なる神を榮光の中に照らし出すのである。古代寺院の細長く、薄暗い構造はこの効果を狙つたものにほかならない。

民衆は夜明け前の暗がりの中に集まつてゐる。暗闇の中で讃美歌が歌はれ、犧牲の人身御供が執り行はれる。神はひとり沈默と影の中に立つてゐる。祈りと熱禱が續く。やがて暗闇のために感光度を鋭くされた禮拜者の眼の前で、かれ等のうしろから上る太陽が、突然神を照し出す。

これはサー・ノーマン・ロッキヤー一派の方位研究家の說である。方角定位はエジプト、バビロニア、アッシリア、及び東方諸國の大部分の寺院のみならず、ギリシアの諸寺院にも見られる。英國のストーンヘンジも夏至の日の日の出に方角を取つてゐるし、ヨーロッパの巨石柱の大部分も同樣である。北京の天壇は冬至の日に方位を定めてゐる。近年まで帝政時代の支那では、支那皇帝の最も重要な國務の一つは、豐年の祈願のために冬至の日にこの寺院で、犧牲（いけにへ）と祈りを捧げることであつた。

寺院の方角定位に關しては、尙多少疑問の餘地がある。サー・ノーマン・ロッキヤは寺院の方角定位の研究に熱心過ぎる餘り、その近著に至つては彼の概說と矛盾する點があるやうである。ピラミッドは確かに方角定位に依るものである。しかし、エジプト寺院の多數が全然計畫的に方角定位に依つたものかどうかは疑はしい。

エジプトの僧侶は紀元前三千年以前に星の位置に依り星座を定め、また黃道帶を十二宮に別けた。

エジプトの神々（一）

右より陽氣なベス神，恐怖の女神テユフオーン，暗の神アヌビス（テユフオーンの人良），左端は暗の神セツト

三　僧侶と學問の黎明

天文學上の研究と、天文學的思想の發達は、既に明白な證跡を示してゐるが、その他にも古代寺院の中で夥しい知的活動が行はれたことは事實である。

近時の學者の中には僧侶を排斥して、常に素朴な民衆を食物にして來た詐欺師乃至はペテン師のやうに考へてゐる人々がある。しかし僧侶は長時代の間唯一の文字使用階級であり、唯一の讀書人であり、唯一の學者、唯一の思想家であつた。僧侶がもしなかつたら、われわれに知的生活はなかつたはずである。われわれは文學にも科學にも親しむことが出來なかつたはずである。寺院は觀測所や、圖書館や、診療所であつたばかりではない、同時に博物館でありまた寶物殿であつた。ハンノの「週航記」の原本はカルタ

エジプトの神々（二）

右端創造の神クヌム（蛙の女神ヘクトの良人），中央愛の女神ハトル，左端學術技藝の神トート・ルーヌス

ゴのある寺院に納められてゐるし、また彼の生捕つた「ゴリラ」の皮は、他の寺院の寶物となつてゐる。凡そ都市團體生活に取つて永久的な價値のあるものは、皆寺院に祕藏された。

ギリシアの歴史家ヘロドトス（紀元前四八五―四二五）は、その史料の大部分を、彼が旅した國々の僧侶から蒐集した。僧侶達が快くヘロドトスに會見して乞はれる儘に澤山の史料を彼に讓つたことは、容易に想像することが出來る。寺院の外の世界では、無智蒙昧と無思慮の人間が、明けても暮れても自分自分の生活にのみ拘泥して暮らしてゐた。庶民が僧侶に欺されたと感じた例（ためし）は嘗てなかつた。それどころか、僧侶に對しては信頼と尊敬の心を常に持つてゐた。事實後代の大征服者すら、ある國、ある都市の僧侶を服從させようとするためには、かれらの地位を愼重に尊

重した。それらの僧侶が民衆の間に絶大な聲望を持つてゐたからである。

もちろん、寺院と寺院の間に相違があり、儀式と儀式の間にも相違があつたやうに、僧侶の精神にも天性にも相違のあつたことはいふまでもない。ある僧侶は不德貪婪であつたであらう。鈍物、空論家、傳統一點張りの頑固屋、さうした僧侶もゐたに違ひない。しかし僧侶階級の墮落と無能については、自ら限度があつた。僧侶は一般庶民の心を摑まなければならない。その點で表裡兩面とも庶民の支持を失ふことは許されない。僧侶の權力は、結局その行動が神意に依るものであるといふ庶民の信賴に基礎を置くものである。

四　王と僧侶の對立

最初の文化的政治は僧侶政治であつた。始めて人々に農耕と定住生活を營ませた者は、王でもなければ、族長でもなかつた。神と豐作の思想に、庶民の默從が作用したためである。スメルの初期統治者は皆僧侶であつた。王とは僧侶の主長に過ぎなかつた。

僧侶政治には特殊な大地に根ざした威力があつた一方、また弱點もあつた。僧侶の權力は自己の民衆を支配するだけの權力である。それは神祕的な恐怖と希望に依る服從を意味する。僧侶は戰爭に際して民衆を動員し得るにしても、その傳統と儀式は軍の規律には不適當である。外部に對して僧侶軍は强兵ではあり得ない。

アツシリア王と大臣

僧侶は誓約と、訓練と、獻身に叩上げられた特殊團體に屬する人間である。その團體精神は頗る强固である。寺院と神のために、その生命を獻げてゐる。從つて自己の團體自己の寺院のためには、素晴らしい內部的勇氣に燃え立つ。彼は自己の神の名譽のために生死を賭ける。しかも隣の町や村には別な神の別な寺院がある。その神から自分の民衆を護るためには、不斷の努力を要する。宗教的信條と僧職は黨派的性質を持つてゐる。改宗や征服は行はれても、合流することはない。

歷史が始まる以前の黎明期のスメルには、僧侶と僧侶、神と神の鬪爭が果てしなく續いた。そしてスメル人はセム人に征服された時まで、互に結合することがなかつた。エジプトの諸寺院の廢墟は、おなじやうな僧侶間の淺ましい抗爭を物語る遺蹟である。宗

教發生の要素について省察するならば、避けがたいことであつたかも知れない。

僧侶の專制下に置かれたかうした時代は、ヨーロッパでは二千五百年前に、既にその跡を斷つてゐた。しかしアメリカでは、その後千年前まで、原始的な犧牲を司る僧侶が、依然として全文化の上に君臨してゐた。その中で中央アメリカとユカタンに著しくその跡を留めてゐる。

メキシコではバビロニアに酷似した王政の下に、僧侶階級が服從して、寺院と王宮が併立してゐた。ペルーには古代エジプトの諸王に似た宗教的主權者がゐた。南メキシコや地峽諸國の森林地帶には、不思議な廢墟を今に殘してゐるマヤ文化があつて、慘虐と衒學の權化ともいふべき僧侶が獨裁政治を司つてゐた。一體世界中何處でも、嘗ては僧侶が獨裁の絶頂を經過した後で、やがて新興勢力たる國王にその席を讓るのが常であるが、マヤ僧侶だけはそれが極度の發達を遂げて、全世界無比の僧侶政治全盛を永く持續したものである。かれ等の曆法は精緻複雜を極めて、祕密觀測を行つた。犧牲の儀式の發達の結果は、肉感的な興奮にさへ墮つた。のみならず、マヤ彫刻は技巧的には優れてゐるとしても、要するに異常の精神病的徴候を思はせる裝飾たるに過ぎない。

兎に角、僧侶階級には、軍統帥の無能力と、異宗派の軋轢摩擦が、かれ等の二大缺陷として致命的なものであつた。この缺陷に乘じて新たに勃興して來たものが國王である。外敵が次第に優勢になつた結果、それに對抗するために、民衆の上に國王が現はれたか、または常々紛爭の絶え間のない僧侶階級が、一かどの武將を作り上げて、やがて平時に於てもその權力の强化を實現したか、そのいづれにせよ、一群の官吏に取卷かれたかうした世俗的な國王は、軍事上で民衆を統治した。これが僧侶の代表者たる國王が、僧侶階級とは別に、僧侶以外から現はれて、人類史上の舞臺に登場して來た起因である。かうしてこの後永く人類は寺院と王宮の二大支配力の複雜微妙な鬪爭下に生きなければならなくなつた。

寺院と王宮のこの反目は、凡そ文化の源泉地では何處にでも繰りかへされたものであるが、ただ東洋とヨーロッパの古代文化の支配者たる蠻人アリアン族は、その文化發達の途上に、僧院政治時代を經ることがなかつた。そのわけは、かれ等が文化に到達したのは、可なり遲い時代であつたからである。即ち、かれ等が文化時代に辿り着いた時分は、僧侶對國王の芝居は、もう幕が半ば終つてゐた。かれ等は自己の征服した文化人ハム族とセム族から、寺院と王宮の鬪爭の物語を、昔噺として聞かされたに過ぎなかつた。

メソポタミアの古代史上にあつては、神や僧侶は實に重要な役割を占めてゐた。しかし國王は次第にその運命を開拓して、やがて僧侶と爭つて、その主權を獲得するに至つた。尤も初期時代にあつては、國王は僧侶に比して無智であり、また孤立的地位にあつた。僧侶のみが物事を知つてゐた。そして民衆は僧侶に畏服してゐた。それが僧侶間の紛爭が續いたところから、國王の勃興に機會を與へた。のみならず、よその都市からの流浪者や、捕虜や、また鬪爭に敗れて零落した僧侶などが、次第に宮殿に集つて來るにつれ、

國王は讀み書きや、魔術の出來る人々を召抱へた。外國人のモーゼを召抱へて、自分の國の魔術師と腕比べをさせるやうなことまでした。その結果は王宮も遂に讀書や記錄の中心となつた。國王自身も智力が發達して、政治を理解し始めた。その上、商人や外國人が宮廷に流浪して來るので、國王は僧侶ほどには記錄が出來ないほど立派な學問がないにしても、諸般の事物に就いて、僧侶よりも廣く、且つ新しい知識を吸收して、現實に一層接觸するに至つた。

一方、僧侶はどうかといふと、幼い時分寺院にはひつて以來永い間、番僧として仕へて來た經驗しかない。それに原始時代の難澁な文字を習ふには、一通りの骨折ではない。そこで博學にはなつたとしても、偏見に捉はれて實社會には通じない。だから意氣に富む青年僧には、國王に仕へる人々が羨望の的になる。寺院と王宮の果てしない鬪爭史は、その實質に於て極めて複雜微妙なものがある。それは既に完成された人間と、新らしく生れ出た者の爭であり、博學と獨創力の爭である。一方は確實な知識と傳統的な習慣を尙び、他方は創造的な意志と想像力を重んじようとする二つの力の爭である。

ただ僧侶がいつも保守的で、非想像的であつたとは限らない。時として國王は偏狹で頑迷な僧侶と戰つた。しかし時としてはまた僧侶が、野蠻な、無智な、保守的な國王を對手に廻して、文化の標準を高めた。

今ここに初期時代の政治上の基本的な鬪爭について、一二の出來事を例に惹かう。紀元前四千年以來、アレクサンドル大王時代に至るまでの歷史は、要するにこれを以て要約することが出來るであらう。

五　ベル・マルヅク神

スメル及びアッカドの古代都市王は、國王といふよりはむしろ僧侶と醫者であつた。その後、外國の征服者がやつて來て、既定の制度下に征服者の地位を確固なものにしようとするに至つて、はじめて僧侶と國王との差別が生じた。しかし僧侶の祀る神のみが、依然として國土と、僧侶と、國王を支配する眞の覇王であつたことは事實である。

この神は萬物の主長であつて、寺院の富と權勢は遙かに王宮を凌駕した。殊に都市に於ては、この傾向が一層著しかつた。バビロニア帝國の創始者ハンムラビは、古代の都市政治を自己の掌中に收めた國王であるが、彼は神に對して最も慇懃な態度を取つた。スメル・アッカドの灌漑工事の記錄たる碑文にかう書いてある。

「アヌ Anu とベル Bel の神予にスメルとアッカドの統治を委ね給ひしより――」

このハンムラビは世界最古の法典として知られたハンムラビの法典を編纂したが、その冒頭に、この法典の發布者とされてゐるシャマシュ Shamash の神から、彼が授けられた次第を記してゐる。

ハンムラビよりも更に古い石柱が、近年ウルから發掘された。これに依ると、月神がウル・エングル王 Ur-

Engil に神殿の建立を命じ、且つ工事を指揮したことが記されてゐる。要するに國王は神の臣下である。

ある都市を征服する場合、政治上の最も重要な仕事は、その都市の神を征服者の神殿に隷屬させるために運び去ることであつた。バビロニアの神々の王メロダク神 Merodach がエラム人に運び去られた時、バビロニア人はこの神をやがて取り戻すまでは、獨立を感ずることが出來なかつた。

時として征服者は、被征服者の神を恐れた。エジプトのテル・エル・アマルナで發掘されたアメノフィス三世と四世に宛てた書簡集中に、ミタニのツシュラタ王から來たものがある。ツシュラタはアッシリアを征服して、イシュタルの女神の像を奪ひ取つたが、その後この神像をエジプトに送りかへした。一つはアメノフィスに誠忠を誓ふため、も一つは女神の怒りが恐ろしかつたからである。また聖書に依れば、ヘブライ人の神の箱舟を奪ひ取つたフィリスティン人が、戰勝の祝としてアシュドッドの魚神ダゴンの神殿にそれを納めると、ダゴンの像は倒壞して、アシュドッドの民は疫病に襲はれた。この話に神や僧侶は登場するが、國王は出て來ない。

バビロニア、アッシリア兩帝國の全歷史を通じて、如何なる君主も「ベル神の息のかからない」間は、言換へれば、神の子として、またその權化として、ベル神の僧侶に認められるまでは、政權の掌握を確實なものたらしめることが出來なかつたやうである。要するに、世界の政治組織も、變換も、僭奪も、王朝の興廢も、外國勢力の隱謀も、その一切が富裕な僧侶と、まだ微力ではあるが、漸次勢力を得つつあつた國王との間の紛爭に基くものであることを、アッシリア・バビロニアの歷史が物語つてゐる。

國王の權力の消長は、專らその兵力の實質如何に依る。しかもその兵は通常外國人から成る傭兵である。給金が支拂はれなければ、すぐに謀反を起し、掠奪して、その上容易に敵に買收される。アッシリア王サルゴン二世の息子センナケリーブは、バビロンの僧侶と激烈な鬪爭に耽つた一人である。彼は「ベル神の息のかからない」人物であつた。彼は遂に僧權を襲撃して、紀元前六九一年バビロンの聖域を壞滅せしめた上、ベル・マルヅク Bel-Marduk の神像を、アッシリアに運び去つた。その後で、彼は自分の息子に殺された。別な息子で、彼の繼承者となつたエサル・ハッドンは、ベル・マルヅク神を復興して寺院を再建し、神と仲直りをした。

エサル・ハッドンの息子アシュールバニパル（ギリシア名、サルダナパルス）も僧侶對國王の鬪爭史上、見遁し得ない人物である。父エサルがベル・マルヅク僧と妥協した結果、サルダナパルスは軍國的なアッシリア風よりは、バビロン風に教育された。彼は過去時代の粘土古文書の一大蒐集家となつた。近年發掘された彼の圖書館は、今日全世界的の最も貴重な史料の源泉である。この學問好きにも拘はらず、彼はアッシリア軍をよく掌握して、一時エジプトを征服し、バビロンの叛亂を平定した。幾度か遠征にも成功した。しかし、彼はアッシリアの最後の王となつた。宗教よりは戰爭を得意とするアリアン族、殊にスキティア人、メディア人、ペルシア人等は、久しく北方乃至北東からアッシリアを壓迫してゐた。遂にメディアとペルシアは、アッシリアを破滅させるため

に、南方の遊牧セム族カルディア人と同盟を結んだ。かうして紀元前六〇六年にアッシリアの首都ニネヴェは、アリアン族の手中に陥つた。

ニネヴェがアリアン族に陥れられて、バビロニア帝國がセム族のカルディア人の手に渡つて以來六十七年目にカルディア帝國、卽ち第二バビロニア帝國の最後の王ナボニヅスは、ペルシア王キロスに亡ぼされた。ナボニヅス王はペルシャザルの父で、學識に極めて富んだ國王であつた。彼は國政の上に、俗世間的な近視眼流の知識でなしに、優れた叡智と想像力を傾倒した。彼の指導に依る考古學的研究の結果から、サルゴン一世の時代を紀元前三七五〇年と確定したが、今日尙この年代は權威者の承認するところである。彼はこの決定を誇つて、碑にそれを記錄した。彼はまた明らかに宗教上の革新者であつた。多數の寺院を建てたり、整理したりして、バビロンを宗教の中心地たらしめるために、地方の神々をベル・マルヅク寺院に集めようとした。各宗派の軋轢が、當時帝國の結合を鈍らせた弱點を招來しつつあつたことを痛感してゐた彼が、心中諸宗統一の志を持つてゐたことは明白である。

しかも歷史は更に急テムポで進展した。彼の革新的思想はベル神の僧侶達の猜疑と敵意の的となつた。僧侶達はペルシア人に味方した。ペルシア王キロスの軍隊は、戰はずしてバビロンに入城した。ナボニヅスは捕虜となつて、ペルシアの哨兵はベル寺院の門といふ門を固めた。寺院では禮拜式が何の妨げも受けずに續けられた。

事實キロスはベル・マルヅク神の加護に依つて、バビロンにペルシア帝國を建設したのである。彼は僧侶達の保守的な本能を滿足させて、地方の神々を故鄕に送り返した。彼はまたユダヤ人をエルサレムに歸してやつた。しかしこれは近視眼的政策であつた。無宗教のアリアン人の手に委ねたことは、寺院の禮拜式の存續のために高價を拂ひ過ぎた。寧ろ眞面目な異端者ナボニヅスの意見に從つて、轉回する時代の要求に應ずるために、その革新策を取上げることは、賢明であつたはずである。キロスは紀元前五三九年にバビロンに入城したが、五二一年にはバビロンは再び擾亂の巷となり、五二〇年には他のペルシア王ダリウスが、バビロン市の城壁を打敗つた。ベル・マルヅク神の古色蒼然たる禮拜式から生命が消え去つて、ベル・マルヅク寺院が石屋の石切場となつたのは、それから二百年以內のことであつた。

六　エジプトの神人王

エジプトの國王對僧侶の物語は、似たり寄つたりのものであるが、しかもバビロニアと全然同一の經路を取つてはゐない。

スメルやアッシリアの國王達は、何れも僧侶であつた。詳しく言へば、還俗の僧侶であつた。しかし、エジプトのファラオ(*) Pharaoh はさうではない。太古の記錄に依れば、ファラオは僧侶に勝る努力と權威を持つて

ゐた。事實ファラオは僧侶や王以上の神であつた。（＊古代エジプトの君主。）

ファラオがどうしてかうした地位を贏ち得たかは、われわれにはわからない。スメルや、バビロニアや、アッシリアの王達は、エジプト第四王朝の大ピラミッド建設者たるファラオ達が大土木にその人民を使役したやうな絶大な權力を持たなかつた。恐らく初期のファラオ達は靈驗あらたかな神の化身として崇められゐたことであらう。ケフレン王 Chephren の大彫像の頭の後部に、鷹の神ホルス Horus がとまつてゐる。後世のラムセス三世 Rameses Ⅲ（第二十王朝）はその彫刻石棺にエジプトの三大神のシムボルを着けてゐる。（現時イギリスのケンブリッヂにある。）その手には、光明と復活の神オシリスの二本の笏を持ち、頭には牝牛たる愛の女神ハトルの角と、尙ほまたアモン・ラー神の太陽球と羽毛がある。尤も信心深いバビロニア王は、同じやうにベル・マルヅク神のシムボルを身に着けてゐた。しかしラムセスの場合では、これ等三主宰神の合體そのものが彼である。

ケフレン王

古代にあつては人間が神の表現として、偶像と同じやうに用ゐられたことが、サー・フレーザの「黄金の枝」に詳述されてゐる。ここにはバビロニアやアッシリアのアジア式君主と、エジプトのアフリカ式君主との思想の相違點を記すにとどめて置かう。

ファラオが神々の眞の子であるといふ思想を强調する彫刻や壁畫は、數かぎりなくある。たとへば、第十八王朝のアメノフィス三世 Amenophis Ⅲ の父と誕生については、ラクソーの彫刻におどろくべき詳細な物語がのこされてゐる。のみならず、かくも神聖な血統のファラオは、平民の娘と結婚することは出來ない。その結果當時にあつては、今日禁制されてゐる近親間の血族結婚はもちろん、その姉妹とすら、平然として結婚したものである。

國王對僧侶の鬪爭は、エジプト史に於てはアッシリアやバビロニアと類を異にする。ただマスペロ教授 Maspero の「古代エジプト新講」New Light on Ancient Egypt には、アメノフィス四世と僧族、殊にカルナークの大主宰神アモン・ラーの僧侶との爭ひが極めて興味深く描かれてゐる。

アメノフィス四世の母は、ファラオの血統ではない。彼の父アメノフィス三世は、臣下なるシリアの美女ティイ Tii と戀に墮ちて結婚したものである。アモン・ラーの僧侶の反對と、皇后の苦悶が葛藤の原因となつた。皇后はその子にアモン・ラー神に對する熱烈な憎惡心を吹込んだ。しかしアメノフィス四世には深い思慮があつた。彼は一千年前のバビロニア王ナボニヅス同樣、エジプト帝國の精神的統一の理想を懷いてゐた。アメノフィス三世がエチオピアからエウフラテス地方まで君臨したことは既に述べたが、テル・エル・アマルナから發掘された

アメノフィス三世とその子四世に宛てた書簡集に依つても、その勢力範圍が極めて廣大なものであつたことが想像される。兎に角アメノフィス四世はエジプト及びシリアの全寺院を悉く閉鎖して、版圖内の各宗派の撲滅を企てた。そしてただ一體の神、太陽神アトン Aton の信仰心を全國到る處に弘めようとした。彼は首都テーベを

ラムセス三世
彫刻石棺の蓋の浮彫
オシリス神としてのラムセス王は女神ネフティスと女神イシスの中に立つ。蓋の周圍の銘に次ぎの辭句がある。「上部エジプト及び下部エジプトの王にして二國の主なるオシリスよ……太陽の子、神々の寵兒、王權の主なるラムセスよ、日輪都市の王子よ、勝利者よ！　なんぢは神となれり。なんぢはウスル神のごとく昇天せん。今やなんぢに敵なし。われなんぢに勝利を與へん……」

をテル・エル・マルナに定めた。のみならず、アモン・ラー神（アメン）に一身を捧げると言ふ意味の「アメノフィス」名を棄てて、太陽の榮光の意味の「アクナトン」Akhnaton と改名した。かくて彼は領土内の全僧侶に對抗すること前後十八年の後、一ファラオとして崩じた。

立去つた。當時テーベはアモン・ラーの都市で、恰かも千年前のバビロンが、ベル・マルヅク神の都市であつた以上の熱狂的な信仰を、只アモン・ラー神に捧げてゐたからである。そして彼は新都

アメノフィス四世、異名アクナトンに對する諸家の見解には、甚だ相違がある。ある人々は彼を以てその母親のアモン神嫌惡の傀儡であり、またその妖艶な妻の溺愛三昧に耽つて暮した人物に過ぎないと見てゐる。彼がその妻に熱情を持つてゐたことは事實である。のみならず、彼は妻への深い尊敬を示した——一體エジプト人には婦人を尊敬する風習がある。幾代か女王が現はれて統治した——彫刻として今日殘されてゐるものに例を惹くならば、彼はその膝の上に妻を載せてゐるし、戰車の中でさへ妻を接吻してゐる。しかし彼がもし愛妻の籠愛にのみ溺れた痴情の徒に過ぎなかつたとしたら、どうして自己領土内の最も優勢な敵手たる僧侶階級との激烈な鬪爭の中で、よくその帝國を支へ得たであらうか。また他の人々は、彼を「憂鬱な狂信家」と見做してゐる。しかし彼の場合のやうに、結婚の幸福を味ふことは、憂鬱な狂信家にとつては不可能なことである。むしろ彼は、神たることを拒絶したファラオとして解すべきものである。その宗教上の政策や、自然の愛情の率直な表現は、强烈で本質的な個性を如實に示すものであるが、彼の美的觀念の上に、一層本質的なものが現はれる。彼は自分の像を傳統的な端麗優美を强調したファラオ神として描くことを許さなかつた。彼の容貌は、三千三百年の恒久な年代の間、他の凡趣味な神々の隊伍の中に於ける唯一個の人間らしい人間としてわれわれに面接する。

彼が胸中に描いた萬物更新の大理想にとつては、十八年間の統治は短か過ぎた。そしてその後繼者たる養嗣子はテーベに歸つて、アモン・ラー神と妥協した。これが第十八王朝の最後の三ファラオの一人である。この三人

の中には、近年世間に騒がれてゐるツータンカーメンがある。このツータンカーメンはアクナトンの娘で、その嗣子たるものと結婚した平凡な青年に過ぎない。アモン僧の手中にまるめ込まれて、抜き差しの出來ない地位に置かれたもののやうである。若くて死んだか、謀殺されたかの那れかである。それが偶然にも彼の墓のみは歴代のファラオ中屬入や掠奪を蒙らなかつた唯一の墓として今日まで殘存した。そして最近それが發掘された。そこで歴史的意義の均衡を破つて、新聞雜誌が騒ぎたてたまでのことである。第十八王朝はツータンカーメンの死後間もなく終焉を遂げた。次いでハレマブ Haremhab によつて興つた第十九王朝がエジプト全王朝中で、最も光輝ある榮華を誇つた。

アクナトン（アメノフイス四世）

エジプト史の最後まで、エジプト人の頭に國王の神性がこびり附いて、それが他人種にまで感染した。アレクサンドル大王がバビロンにはひつた時は、ベル・マルヅク神の權威は既に地に墮ちてゐたが、エジプトのアモン・ラー神は依然として神聖冒すべからざるもので、征服者のギリシア人を嘲弄した。アモン・ラーの僧侶は第十八王朝乃至第十九王朝（紀元前一四〇〇年頃）時代に、沙漠の綠地に寺院と託宣所を建てた。ここではこの神の偶像は話したり、首を動かしたりして、御伺の目錄を受納したり、拒絶したりした。この神託は紀元前三三二年にはまだ繁昌してゐた。言傳へに依ると、若い世界征服者アレクサンドルは特に託宣所訪問の目的で旅をした。彼が神殿の中にはひつて行くと、偶像は暗闇の中から、彼に逢ふために進み出て來た。興味深い挨拶が双方の間に取交はされた。マスペロ教授はその時の會見が、こんな言葉で行はれたであらうと言つてゐる。

「さて、わが子よ、なんぢわれを愛するが故に、われなんぢに勇氣を與へん。われなんぢの脚下にあらゆる國々とあらゆる宗教を保たしめるために與へん。われなんぢの腕による結合にあらゆる民族を任せるために與へん。」

かうしてエジプトの僧侶達はかれ等の征服者を征服した。そしてアリアン人の國王は始めて神となつた。

七　秦　始　皇

支那に於ける僧侶と國王の鬪爭については、ここに詳述することを避けよう。ただエジプトではバビロニアと異つてゐたやうに、支那ではまた更に別である。しかし、いづれの國の主權者にせよ、人民を諸宗派に分離させる宗教的傳統を粉碎するために努力した點では同一である。

「天の子」たる支那の皇帝は、彼自分高僧であり、その主要なる任務は犧牲奉献であつた。殊に支那史上、諸國家紛爭の時代になると、天子はもはや統治の仕事をやめて、犧牲奉献のことばかりに携つた。この風習は近年まで殘つてゐた。天子は春が來るごとに、自ら已が手で土地を耕しはじめることが、彼の任務であるとして、この風習について論議されたのは、僅かに數年前のことである。讀書階級は早く既に僧侶階級から分離した。それが地方の王侯に仕へる官僚階級の起つたもとである。そしてここに支那史と西方諸國の歴史の根本的な相違點がある。

アレクサンドル大王が西部アジアを征服した時分、支那は周朝最後の僧侶的皇帝の治下にあつて、亂世の狀態に沈湎した。地方地方は幾つかの民族と傳統に別れて、匈奴は諸州に蔓延してゐた。秦の皇帝はアレクサンドル大王後八十年頃の人物であるが、國内に橫溢する傳統の積弊を一掃するために、支那文献の一切を破棄することを決心した。その子の始皇は現存する典籍を極力探し出して、燒却してしまつた。彼の統治の間、古典は消滅した。彼は傳統に依ることなく統治した。そして支那全土の統一が、數世紀間に亘る基礎を開いた。しかし彼が崩ずるとともに、今まで隱匿されてゐた古典が再び現はれ始めた。

彼の後裔の治下ではないにしても支那の統一は續いた。内亂の後に、新興の王朝たる漢朝（紀元前二〇六年）が勢力を得た。最後の漢王は始皇のやうな儒學撲滅を企てなかつた。彼の繼承者は儒者を寵用して、古典を復興させた。

第十七章　農奴と奴隷

一　古代の庶民

文化は原始的な新石器時代の農業から發達して來たもので、その農業は恐らく一萬五千年前に地中海東部の何處かに始まつたものであることは、前四章に亘つて述べて來た。尤もその初期に於ては、農業といふよりも園藝であつた。例を擧げれば、當時は鋤がなくて、手鍬を用ゐた。部族の生計をなすものは、狩獵と、羊や山羊や牛の牧畜で、農業はその補助に過ぎなかつた。

初期の定住生活を營む村落の中でも、甚しく豐饒な地方では、次第に人口が殖えて、町となり、都市となり、やがては村の神殿や村醫者が、都市の寺院となり、都市の僧族と變つてゆくことについても、既に概說した。また始めは村々の喧嘩が、やがて一都市と他の都市の僧侶王や神の一層訓練された鬪爭となつて、それが遂に組織的な戰爭の起原となつたことについても、既に述べた。紀元前六千年乃至五千年の頃、スメルに始めて異民族の征服と、帝國の建設の曙光を見せて以來、道路と軍隊を持ち、碑銘と文書を持ち、古來の傳統に支持される敎養のある僧侶や國王や主權者を持つ完成された大帝國の展望までを、本書は既に大急ぎで說き終つた。われわれはまた、同じ經路をとつて發達したエジプトを瞥見した。ナイルや、チチグリス・エウフラテス河畔の諸帝國の出現や、鬪爭や、沒落についても概說した。特にまたナボニヅスやアメノフィス四世のやうなこの種の人物の言行の中に潛む遠大な政治思想についても、深い注意を拂つて來た。要するにそれは悠久一萬年乃至一萬五千年間に蓄積された人間體驗の輪郭である。わたしは今悠久と言つた。もとよりこの後に來る歷史と比較すれば廣漠な悠々たる時の流れである。しかしまた、洪積世の夜明けに、初期の燧石使用者とわれわれの間を隔る大間隙の中に横はる無限の世代の連續に對してそれを測るならば、まことに儚い一瞬時に過ぎない。兎もあれ、この四章に亘つて述べて來たものは、殆んどまつたく一般人類についてではない。僅かに考へる人々、繪を描き、文字を讀み書き得る人々、乃至はこの世界に變動を與へた人々についてであつた。ではかうした人々の活動の下積になつて來た無言の大衆の生活は、一體どうであらうか。

一般庶民の生活も、もちろんかかる物事の影響と變化を受けるはずである。しかしその程度は、家畜の生活や耕作地の樣子が移り變るのと違ひはない。その變化の大部分は、受身の變化であつて、庶民自身の要望や意志による變化ではない。讀み書きはまだ庶民の好むところとはならなかつた。彼は妻子を愛し、犬を鞭ち、家畜を飼ひ、辛い時に愚痴をこぼし、僧侶の魔法と神々の威力を恐れ、上長から自分にだけ特別なお目こぼしを期待しな

がら、畑の耕作に出掛けて行き行きした。

紀元前一萬年の庶民の生活がそれであつた。アレクサンドル大王の時代が來ても、彼の性質と樣子に變りはなかつた。今日尙世界の大部分の庶民はその通りである。たかだか文化の進展に伴つて、いくらか便利な農具を、いくらか品種の良くなつた種子を、いくらか改善された耕作法を、いくらか立派になつた馬を得て、彼の生産物がいくらか組織化された市場で物々交換の役に立つやうになつたのが關の山である。しかし人類が漂泊生活を脫却して以來、ある程度の自由とある程度の平等が、人間生活から消え去つてしまつた。人間は安全と、住居と、日々の食物のために、自由を賣つて勞苦を買つた。庶民は次第に自分の耕やす土地が彼自身のものではなくて、神のものであるといふことを考へ始めた。そこで彼はその生産物の一部を神に支拂はなければならなかつた。さもなければ神は土地を國王に與へた。そこで國王は地代と稅金を取り立てた。さもなければまた國王は土地を役人に與へた。その役人は庶民の主君となつた。時として神か、國王か、または貴族かが、彼に仕事を命ずる場合がある。すると庶民は自分の畑を棄てて、上長のために働かなければならなかつた。

自分の耕す土地が、どこまで自分のものであるかが、はつきりしてゐなかつた。古代アッシリアでは、土地は一種の世襲財產であつた。使用者は稅を拂つた。バビロニアでは土地は神のものであつた。耕作者は神の許しを得て土地を耕した。エジプトでは寺院か、ファラオか、ファラオに使へる貴族かが土地の所有者で、地代受取人であつた。しかし耕作者は奴隷ではなかつた。彼は農夫で、ただ耕作以外には何事も出來ないし、何處にも行く處がないために、土地に結びつけられてゐた。彼は村や町に住んで、働く時は耕地に出て行つた。村ははじめ親類の人々が長老を頭に戴いて營む大家族生活に過ぎなかつた。町も始めは一群の戶主が長老の許に結合したものであつた。

文化の進展につれて、從屬關係が出來た。首長指導者達の威力が增大して、庶民はやがて足並を揃へることが出來なくなつた。そこで依存と服從の傳統がいつの間にか起つて來た。

全體としては、庶民は國王か、神の下に生活して、その命令に服從することに、充分滿足してゐた。そこに安全があり、氣樂さがあつた。あらゆる動物は——人間もその例に洩れることなく——服從者としての生活を求めるのが常である。手つ取り早い例が、人間は生れ落ちた時から、かうした心持を持つてゐる。

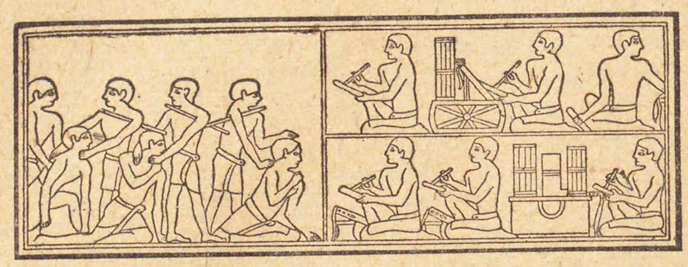
ブレステッドの「古代エジプトの宗教と思想」Breasted ; Religion and Thought in Ancient Egypt は、紀元前二千年頃のさまざまな傳說や推移に就いて述べてゐる。これによれば、當時社會的騷擾が起つた。ただこれは素朴な非革命的騷擾に過ぎなかつた。不平は人々の不實や裁判官の不公平についてであつた。富豪が氣紛れで喧し過ぎるとか、貧乏人に憐みをかけないとか、救助してくれないとかいふこともあつた。賃銀が多い少いの爭ひ。賄ひが粗雜だとか、使ひ方が苛酷だとかいふ同盟罷業。それもあつた。しかしファラオの神權に對する問題

や、富豪の特權についての爭議はなかつた。社會組織についての挑戰はもとより、不平が直接行動となつて爆發するやうなことは遂になかつた。

二　最初の奴隷

原始時代の戰爭は遠征もなければ、長期戰もなかつた。兵士は庶民から徵募せられて、賃銀を貰つた。しかしこの戰爭は、掠奪なる新らしい所有權の發生を促し、捕虜なる新らしい社會的要素を招來した。更に古い遊牧時代には、捕虜は嬲殺しにされるか、勝利者の神の犧牲に供へられるかするのが常であつた。女や子供の捕虜は部族に同化された。遊牧人は奴隷を使用することはなかつた。しかし後代になるにつれて、優秀な技能があるか、特別な技術のある捕虜は、奴隷として生殘された。最初にかうした奴隷を採用したのは、國王か酋長であつらしたい。ところが抱へて見て、すぐに氣のつくことは、この奴隷が自分の同種族の農夫や庶民よりも、遙かに重寶なことである。半自由の庶民は耕作に從事する自分の土地に執着があつて、上司の命令を喜んで肯かないやうなこともあるが、奴隷にはどんなことでも命令することが出來る。のみならず、築堤工事や鑛山の土掘りなどに際しては、奴隷の大團體を使役することが出來る。

技術工は極めて早い時代から家事奴隷にきまつてゐた。クリート島クノソスの家族都市ミノスで殷賑を極めた



エジプトの農民捕虜（稅金滯納者）
ピラミツド時代

輸出商品のやうなもの、たとへば陶器類や、織物類や、金屬器具などの製造は、多分始めから奴隷産業であつた。

セースの「バビロニア人とアッシリア人」Sayce ; Babylonians and Assyrians は、奴隷に商賣を仕込むことや、奴隷の製産物を利用することについての契約書を引用してゐる。奴隷から生まれる子供は、子供奴隷となる。借金を返せないで奴隷となる者も出來る。かうして奴隷の數が殖える。都市がだんだん大きくなると、新人口の大部分を大家庭の中で働く技工奴隷や婢僕奴隷が占めることになる。尤もかれらの全部が決して卑賤な奴隷といふのではない。後世バビロニアでは、法律に依つて奴隷の生命と財産を保護した。またかれらの全部が戰爭の捕虜でもない。わが子を奴隷に賣る親もあれば、孤兒となつた妹を賣る兄もあつた。自由人でありながら、生活が立たぬばかりに、自らわが身を奴隷に賣る者さへあつた。破產者に取つて免れがたい窮極の運命は奴隷である。手職見習の年期奉公も、また一定期奉公の奴隷である。

奴隷の中には、逆に自由人、自由婦人に浮び出る者もある。かれらはそこで賃銀を人並に貰つて働くことが出來、一定の個人の權利も持てるやうになる。バビロンでは奴隷にも自分の財産を所有することが出來たから、多くの奴隷は貯蓄して、自由を買つた。多分都會の奴隷は農夫よりも工面がよく、また實際上農夫以上に自由であつたらしい。地方の人口が激增するにつれ、農夫の息子や娘達が都市に出て來て、或は隷屬的な、或は自由な技術工の新階級と混合するに至つて、益々この種の階級を增大させたものであらう。

統治權が發達して、それが强大となり複雜化して來ると、家族の數も激增して來る。國王の家族の下には、大官や官僚の家族が、また寺院の下には寺役人の家族が成長する。そこで家屋敷は次第にその居住者の所有物となつて、本來の所有者たる神との緣が、次第に薄らいで行くことは、想像するにかたくない。

エジプトや支那の古代帝國は、共に封建時代になると、元來官吏であつたその家族が、暫くは獨立した貴族となつた。またバビロニア文化の後代になると、多數の有產階級が社會組織の中に現はれた。それが奴隷でも、農民でもなく、また僧侶でも、官吏でもない。さうした人々の寡婦か子孫で、さもなければ成功した商人か何かである。いづれも主人を持たない連中である。

外國から這入つて來た商人も少くはなかつた。バビロンには大きな商店を持ち、奴隷の自由民や、あらゆる種類の雇人を持つたアラメア人の商人が充滿してゐた。（紙のない文化狀態であつたから、かれ等の簿記はひどく骨の折れる仕事であつた。夥しい陶器の大甕の中に保存しなければならなかつたからである。）ところでまた、程度の多い少いは別として、かうした自由な、係累のない人の入り交つた階級を對手として御用を勤める人々、言はば卸商や小賣商が住んでゐた。セースはかうした商賣人たる居酒屋やビーヤホールの開業とか仕入とかに關する契約書についても書いてゐる。通りがかりの通行人といふやうなものも、この頃から出來た。

奴隷の中で最も悲慘なものは、奴隷隊であつた。古代都市には大した關係はなかつたが、到るところにその證跡がある。一體國王は大企業家であつた。運河を開鑿して灌漑事業を起したり、（前章に述べたハンムラビ王の企業はその一例である。）鑛山を採掘したり、それからまた輸出のための商品を生產することに努めたりした。（クノソスがその一例である。）エジプト第一王朝のファラオは、シナイ半島の銅鑛やトルコ玉の鑛山を採掘した。かうした夥しい企業のためには、奴隷隊は國王の領民を徵募するよりももつと廉價であり、また遙かに統御し易かつた。

また古代から捕虜はガリー船の櫓手に使役された。尤もトルの「古代船舶」Torr：Ancient Ships には、紀元前四五〇年ペリクレスの時代までは、アテネの自由民もこの勞役に從事してゐたと書いてゐる。國王の遠征に際しても奴隷は便利であつたに違ひない。奴隷は故鄕を持たない連中である。戀るべき家もないから、わが家を戀しがるやうなことはない。ファラオ達はシリア遠征に黑人軍を組織するために、奴隷を狩立てた。

嗟喧の乘舟
ターヘテツプの壁畫によるビラミツド時代

かうした奴隷と縁の近いものに金で買はれた蠻人軍がある。かれらは積極的に强制されたものではないが、食糧や掠奪品の餌に依り、また貧に迫つたお蔭で、國王に仕へた連中である。古代文化の進展につれて、傭兵は次第に舊式な徴兵制度に變つて來た。そして奴隷隊は別に經濟組織の中で、次第に重要な要素をなすに至つた。もはや鑛山や、運河や、築壁の工事ばかりでない、奴隷隊は耕作にも用ゐられた。貴族や寺院も自己の財産のために、この奴隷隊を採用した。奴隷の耕作隊は農奴の小作に代つて、重要産物を耕作し始めた。

三　最初の自由民

初期スメル都市の單純な社會組織は、紀元前數千年の諸都市に於て、人種や、傳統や、教育や、職業を異にし、富や、自由や、力や、能力を異にする多數の個人の群集體として發達した。その中で最も重要なことは、自由民と呼ばれる階級が斷然その數を次第に增大して來たことである。この階級の者は僧侶でも、國王でも、官吏でもない。また農奴でも、奴隷でもない。しかも勞働を强制されることなく、讀書と研究に時間を持つ人々である。かれらは社會の安寧と私有財産の發達につれて、次第に發生した。

計算の方法が發達した。アラメア人や、その他のセム人種の商人は、掛賣や金融の方法を發達させた。初期にあつては、ある種の動産は別として、財産の權利は地所と家屋にのみ限られてゐた。しかし、後世になると、有價證券を預けたり貸したりすることが出來るやうになつて、他所へ出掛けて歸つて來ても、自分の財産が安全に保有されてゐるやうになつた。

ペルシア帝國の中葉に、ヘロドトス Herodotus といふ自由民が住んでゐた。彼がわれわれに取つて、見遁しがたい人物であるわけは、從來の幸福や宮廷の單なる記錄とは異つて、批判的且つ理智的の歷史を書いた最初の人物であるからである。ここに彼の生存時代の情勢について手短かに一瞥することにしよう。これから先、彼の書いた歷史から屢〻引用しなければならないからである。

紀元前五三九年キロス王を戴くアリアン種なるペルシア人は、バビロニアを亡ぼした。ペルシア帝國はエジプトに手を伸べたがそこでは危險があつた。やがてペルシア帝國は小アジアにも擴がつた。ヘロドトスはこの小アジアのギリシア都市ハリカルナソスに、紀元前四八四年を以て生れた。當時この都市はペルシア王の支配下にあつたが、直接には政治的領袖、即ち一僭王に統治されてゐた。ヘロドトスは別に衣食のために働かなければなら

ぬ必要もなく、また財政管理のために時間を冗費する必要もなかつたらしい。詳しい事を知ることは出來ないが、兎に角彼はこの小さなギリシア都市で、外國人の統治下に暮らしながら、彼以前のギリシア語で書かれた殆んど一切の文獻を蒐集し、讀破し、且つ研究することが出來た。更にわかつてゐる限りでは、彼はギリシア群島を自由に氣樂に旅行してゐる。氣任せに永逗留もすれば、鄭重な待遇をさへ受けてゐる。バビロンにも行き、チグリス河東岸のバビロニアにペルシア人が新たに建設した首都スサにも行つた。黒海の沿岸を巡つて、當時南ロシアに撒布してゐたアリアン人種のスキチア人についても深い知識を得た。イタリアの南部にも行き、古代フェニキアの首府チレの古蹟の發掘も試みた。パレスティナの沿岸を航行して、ガザに上陸し、エジプトには長く滞在した。

エジプトでは彼は寺院や古碑を歴訪して、史料を蒐集した。彼の記錄のみならず、他の證跡に依つて見るも、當時すでに古寺院やピラミッドは（それらはその時代ですら既に約三千年の古寶であつた）觀光客の大團體が案内人の僧に連れられて見物して歩いてゐた。その觀光客の書いた壁の落書が、今日尚殘つてゐて、その大部分が讀み解かれ、且つ出版されてゐる。

彼の知識が蓄積された時、彼はペルシア人がギリシア征服を企てた大歴史を起稿しようと思ひ立つた。そこで彼はその大歴史の手引として、先づギリシア、ペルシア、アッシリア、バビロニア、エジプト、スキチアの過去や、地理や、それらの國々の住民に就いて書いた。彼はこれをハリカルナソスの友人間に紹介するために朗讀した。しかし友人達にはこの書の價値がわからなかつた。そこで彼は當時ギリシア全都市中最も殷賑を極めたアテネに赴いた。アテネはこの書を賞讃を以て迎へた。彼は忽ち知識階級や社會人の人氣の中心となつた。市當局は彼に十タレント（約二千四百磅）を贈つて、その文學上の功績に酬いるところがあつた。

この興味深い人物の傳記は、これ以上續けることをよさう。またお喋べりな、話上手な、面白くをかしく書かれた彼の歴史書に就いての批評も、ここにはさし控へることにする。ただこの書は誇張や、ボズウェル流（＊）の魅力に富んでゐる。讀書人は晩かれ早かれ一度は手にするであらう。（＊徹頭徹尾賞讃して傳記を書く人。）

ヘロドトスとその歴史書について、ここに特に述べ來つた所以のものは、紀元前五世紀に至つて人間社會に一新要素が現はれたことを示すためにほかならない。讀書の世界は、既に寺院の境内や宮廷の祐筆階級から解放された。記錄は今や寺院宮廷の垣外に出た。新階級人、即ち時間と生活に餘裕のある人々は、疑義を訊ね、知識と意見を交換して、思想の發達を圖つた。軍隊の進軍や、國王の諸政策の下で、そして目に一丁字のない無慾な庶民の平凡な生活の上で、われわれは今日人間社會に卓越した威力とは人類の自由なる理智、これである。

然らば人類の自由なる理智とは何か。次章のギリシア諸島と小アジアの都市國に於けるギリシア人に就いて述

べる時を俟たう。

四　三千年前の社會

二千五百年乃至三千年以前、後期バビロニア及エジプトの文化を作り上げた人間の複雑な堆積の中から、今主要な要素を表としてみよう。前二章の記述は、もちろんこの表の中に要約されるであらう。

かうした要素は五六千年の間、世界の諸大河流域、卽ちナイル、エウフラテス、チグリス河畔に於て發生し、やがて互に別々の路を取つて來た。かうして氣質も、傳統も、物の考へかたも、互に別々に發達した。今日われわれの住む世界の文化も、かかる關係を單に持續してゐるものであり、尙ほまたこれを進展させてゐるものである。われわれの繼承する世界はこれである。今社會組織の起原に就いて愼重に考究するかぎり、われわれが今日所屬する特殊な階級の偏見や近視眼的思想を押退け、そして當代の社會問題と政治問題を理解するに至るであらう。

（一）　寺院組織。

最初に僧族がある。寺院組織は原始文化を成長せしめた核心であり、指導精神である。それは後世に到るも尙知識と傳統の大貯藏所として、各人の日常生活上の權威として、且また社會公共を團結させる結合力として、世界に於ける一大武力であつた。しかし、今ではもはや全能ではあり得ない。その性質上、保守的であり、且適應性を缺くからである。もはや知識を獨占することもなく、新思想を芽生えさすこともない。學問は既に拘束もなく禁制もない、かれ等自身のために考へる人々へと洩れ出て行つた。寺院組織の周圍には、僧侶や、尼僧や、寺院書記や、醫師や、魔術師や、俗人の講中や、會計係や、管理人や、監督や、その他の人々が群がつた。寺院は大財產を所有し、偶々巨大な寶庫をさへ持つてゐた。

（二）　宮廷組織。

僧族に對抗して、本來は僧族から出て來た宮廷組織が、國王または「王の王」を戴いて興つた。王は後期アッシリアやバビロニアでは、酋長または諸政の非僧的統帥者であつた。またエジプトでは神

エジプト中流の墓標に現はれた
古代下層民の小像
右端より荷を擔ぐ下僕，樂人，壯氏（とうじ），左端歩兵

人であつて、僧侶の支配を超越してゐた。王の周圍には祐筆や、宰相や、記錄係や、代官や、隊長や、衞兵などがゐた。王の官吏、殊に地方の官吏には、多數の部下を養つて、他日獨立の機會を狙ふ者が少くはなかつた。エジプトやバビロニアの貴族は、宮廷組織の中から生れたものである。從つて初期アリアン人の貴族とは、その起原を異にする。後者に至つては、長老や指導者の共和政體的貴族である。

（三）農民階級。

社會組織のピラミッド形の底線を描くものは、社會の最も必要な、大多數の階級たる農民である。農民の狀態は時代により、國によつて多種多樣である。自由農民として租稅を納める者もあれば、寺院の農奴もあり、王や貴族の、または一私人の農奴または小作人として、借地料を拂ふ者もあつた。多くの場合、租稅や借地料は農產物を以つて支拂つた。

ナイル、チグリス、エウフラテスの沿岸地方の農民は、比較的狹い地面を耕す高級な耕作者であつた。かれ等は村落を作つて、安全に共同生活を營み、灌漑用の運河の維持に利害を共にして、村落生活の團體的觀念を持つてゐた。耕作は骨の折れる仕事である。季節が來、收穫時が來ても、日沒の太陽は人々を待つことがない。子供達は幼い時分から酷使される。だから農民階級は一般に敎育の低い勤勞階級であり、無學と季節の不安定のために迷信深く、且つ暗愚で瞞され易い。災難に對しては辛棒强いが、年中收穫以外には考へた事もないのに、負債の償却と凶作時の貯藏が、尙かれ等を鞭打ち續ける。ヨーロッパとアジアの大部分に於て、今日尙農民はかうした狀態に踏み留まつてゐる。

（四）工匠階級。

その起原に於て、またその素質に於て、農民階級と甚しい相違のあるものは、工匠階級である。始め一部分のものは、恐らく都市奴隷であり、また一部分は技藝に專門化した農民から成り立つたものであらう。

しかし工藝々術と、その製作の祕傳が發達するにつれて、また製作に取りかかる前に習得すべき技術が發達するにつれて、各種の工藝は獨立的なものとなり、またそれぞれ同業意識の進步を促したものと思はれる。そこで工匠達は集合しては自分達の仕事について議論を闘はしたことであらう。こんなことは農夫階級にはないことである。のみならずかれ等は同業組合をも作つて、製產の制限や、最低賃銀の取りきめや、また同業間の利益の增進などを圖つた。

（五）牧人階級。

バビロニアの主權者が優勢になると豐饒な本來の領土を越へて、あまり肥沃でない草原地帶にまで、その領域が擴がつて行つた。そこで牧人階級が發生して來た。遊牧のセム種なるベヅイン族（*）がこれで、卽ち今日のベヅイン人の祖先である。（*シリア、アフリカ等の沙漠地に住む遊牧民。）

廣漠たる地域に畜群を追ふて放牧してゐたかれ等は、カリフォルニアの羊飼ひのやうなものであつたに違ひない。かれ等の收入は農民よりも多かつたし、またその地位も農民より高いものとされてゐた。

（六）　商人階級。

商人の始まりは船舶の所有者であつた。チレやクノソスの市民、また遊牧民等は商品を携へて、初期文化の一地方から他の地方へと漂泊しては商賣を營んだ。バビロニアやアッシリアの世界では、商人は今日のシリア人の祖先なるセム種のアラメア人が斷然優勢を占めてゐた。

商人は都市團體の生活上、卓越した要素となつた。かれ等はそれぞれ大家族を形作つてゐた。高利貸が著しく發達したのは、紀元前最後の千年間のことであるが、スメル時代にさへ、早く既に高利貸が存在してゐた。商人には金融の必要がある。農民は牧穫の先賣を望む。高利貸の出現は當然である。セースはその著書の中で、バビロニアの金貸業エギビに就いて書いてゐる。エギビ家は數代續いて、カルデア帝國の滅亡後も殘存してゐた。

（七）　小賣商人階級。

小賣商人階級は初期の諸帝國の終り頃に、社會の複雜化に伴つて發達した。しかし重要な意義を持つ階級ではない。

（八）　有產階級。

獨立的な有產階級は漸次その勢力を增大して來た。

（九）　家事使用人階級。

生活上の享樂が殖へるにつれて、宮廷や、寺院や、富裕な私人の家庭に、奴隷や、開放された奴隷や、また若い農民などが家庭内に引取られて、ここに家事使用人階級が出來上つた。

（十）　奴隷隊階級。

奴隷隊の苦役に使はれた者は、戰爭の捕虜か、負債のある奴隷、または徵發された者、追放に處せられた者などである。

（十一）　傭兵階級。

傭兵はまた捕虜や、徵發された者である。時としては友好の外國人で、好戰的な精神に驅られた者が應募して來る。

（十二）　水夫階級。

以上の十二階級である。

近代の政治的經濟的討議に際して、われわれは徒らに「勞働者」なる語を用ゐるのが常である。勞働者の結束

や、その社會的意識については、常に多くの議論が試みられてゐる。ここで注意すべきことは、初期文化時代にあつては、今日「勞働者」と呼ばれる者が、その起原や、傳統や、環境に於て、上述の異つた五つの階級に亘つてゐることである。――即ち（三）の農民階級、（四）の工匠階級、（五）の牧人階級、（九）の家事使用人階級、（十）の奴隷隊階級、それに尙（十二）の櫂手を含む水夫階級である。勞働者の結束については、第十九世紀の機械革命の項に於て述べることにするが、要するに、これは人間社會に於ける新思想であり、また新局面である。

五　階級と族制

初期文化期に發達した社會諸階級の記述をここに終る前に、かうした諸階級の固定性について、聊か考へてみたい。

先づ上述の諸階級はどの程度まで互に隔離したか。また（九）（十）（十一）（十二）即ち婢僕や、奴隷隊や、奴隷や、傭兵や、それにまた水夫や、殊にガリー船の櫂手等は、主として徴募階級である。かれ等は家庭を持つことは出來さうもないし、持たうともしない。また特に繁殖力の強い階級でもない。かれ等は多分捕虜や、他の階級の落伍者や、殊にまた小賣商人階級の破產者や、それからまた農民の中から勸誘され、徴募されて集つた者などが、一代一代補充されたものに違ひない。ただ水夫に關しては、單なる櫂手と、チレやシドンのやうな海港場の航海業者乃至船舶所有者の間に區別がある。船舶業者は次第に貿易商人階級に變つて行つた。航海業者は大海港で特種な同業組合を作つて、そこに家庭を持ち、且つその子孫に航海術の祕法を授けたものであらう。

最も變動の多い階級は、（八）の有產階級である。相續人や、係累や、寡婦や、資產があり勢力のある引退者などの繼承に依つて、絕へずその數を增して行く一方には、死亡や、思惑の失敗や、財產の消散などのお蔭で、その數は絕へず減つて行く。僧侶と尼僧は、インドから西の世界では、あまり繁殖的階級ではない。僧族の大多數は獨身であつた。これもまた補充階級の一つに數へられるべきものである。婢僕もまた一般に繁殖的階級ではない。かれ等は他人の家庭に生活する。自分の家庭といふものもないし、自分の大家族を養ふといふやうなこともない。

そこで古代文化社會の中で、眞の生命力ある階級を求めるならば、次ぎの五つだけが殘ることになる。

（a）王族及び貴族階級、官吏、武官、その他。
（b）商人階級。
（c）都市工匠階級。

（d）農民階級。
（e）牧人階級。

これらの各階級では、その子供達を自己の慣習の中に育てあげる。從つて程度の大小は別として、益々他の階級から區別されてゆくことは當然である。

かかる古代諸國に於ては、一般教育の組織はなかつた。教育は主として家庭の仕事であつた。（今日尙印度に於ては、大半それである。）その結果子供達は父の足跡を辿つて、同じやうな家庭に育てられた女と結婚する。だから大政治的動亂時代でも來ない以上、各階級は益々他階級から離れて分化を遂げてゆく。尤も個人としては他階級と雜婚したり、他階級に移入して行く除外例も、もちろんあつたであらう。また貧しい貴族は富裕な商人階級と結婚したかも知れないし、野心的な牧人や工匠は、富裕な商人となつたかも知れない。それがエジプトやバビロニアに於て現存したことは事實である。

エジプトには階級の固定性があつたやうに、以前は考へられてゐたものであるが、これはヘロドトスの讀み違ひから起つた誤解である。エジプトで他階級との雜婚を禁じた階級は、半神人の王族のみであつた。

社會組織中には種々の點で排他性が發達して、事實他階級の侵入者を防止したもののやうである。例へば、祕傳を持つてゐる特殊な工匠は、どこの國いつの時代でも、その製作を制限し、また組合以外の人との結婚を禁じて、組合組織の發達を圖つたものである。また征服者たる民族も、特に肉體的差異が甚しい場合には、被征服民族と隔離して、貴族的排他心を發揮した。

かうした民族の交流の禁制は、長い年代の間には、文化史上さまざまな形態を取つて、現はれたり消えたりした。職業的境界線は常に不變に存在したが、ただある時はそれが明らかに強調され、ある時はまた案外投げやりにされてゐた。

アリアン民族の中には、征服者を貴族 patrician とし、被征服民を平民 plebian として、區別する傾向が一般にあつた。その痕跡が今日の全ヨーロッパの文學と實生活の上に、明らかに窺はれる。殊に紋章學は有力な證跡を提供するものである。この傳統はデモクラティクなアメリカに於てさへ、今尙盛んに行はれてゐる。ヨーロッパ諸國中最も規律正しいドイツでは、中世時代にこの差別感の思想が明白に固定した。王侯（かれ自身排他的階級に屬して、下層と結婚しない）の下にあるものは次ぎの諸階級である。

（a）騎士階級——軍人と官吏の族制。紋章のついた陣羽織を着てゐた。
（b）市民階級——商人、海運業者、工匠。
（c）同上。
（d）農民階級——農奴、または農民。

中世ドイツは初期文化の繼承國たる西歐諸國中最も階級が固定してゐた。英國人や、フランス人や、イタリア人は、ドイツほどの階級觀念を持たない。かれ等はむしろ氣紛れである。階級から階級へと自由に移動する。かかる排他的思想は、始め主として上流階級の間に起つて、それが助長せられた。その結果、當然の復讐となり、且つ自然の應報となつて、排斥された大衆は上流階級への對抗に團結した。繼承權を失つた雜然たる庶民の大群と、支配者及商人階級との間の階級戰爭が、最初にドイツに起つたことは、自然的であり、また必然的である。少くともかかる思想は、英國人やフランス人よりも、ドイツ人により多く受入れられるはずである。

しかし、この闘爭に到達する前に、われわれは尙幾多の世紀の長い歷史を辿らなければならない。

六　インドの族制

中央アジアと大西洋の間のかうした文化の主潮から、眼を東方に轉ずるならば、基督時代以前約二千年の頃のインドの社會的發達は、甚だ特異なものであり、且つ甚だ興味深いものであることを知るであらう。

先づ第一に氣附くことは、その社會的構成の過程が、世界の他の何處にも存在しないほど階級の固定性が確立してゐることである。この階級の固定性は、族制 caste と呼ばれてゐる。（ポルトガル語のカスタ casta に由來する。梵語では色の義のヴァルナ varna といふ。）族制の起原はまつたくわからない。ただそれがアレクサンドル大王時代以前、ガンジス河流に根づいてゐたことは確かである。その社會組織は、幾つかの階級、または族制となつて、それが地層狀態に區分されてゐる。各層に屬する者は、下層の者と食事を共にしたり、結婚したりすることを、追放の刑罰に依つて嚴禁されてゐる。また種々な儀式を願なかつたり、冒瀆したりすると、族制を失ふことになる。族制を失つた以上、下層の族制に落ちることも出來ない。ただ追放されるばかりである。

族制には種々な分類があつて、甚だ複雜を極めてゐる。しかし實際には、大部分商賣上の組合に過ぎない。各族制には地方別の組織があつて統制され、種々な慈善事業を行つたり、貧民を救助したり、所屬員の共同の利益を計つたり、また他州から來た新加入者の信用狀を檢査したりした。（印度人の旅人は、兎角上層の族制を詐稱する風があつたが、その眞相を調査する方法は殆んどない狀態であつた。）

族制には本來次ぎの四姓があつた。

（一）婆羅門（ブラーマン） Brahmin——僧侶、教師。

（二）刹帝利（クシャトリヤ） Kshatriya——武人。

（三）吠舍（ヴァイシャ） Vaisya——牧人、金貸、商人、地主。

（四）首陀（スドラ） Sudra

尙ほ四姓以外として、パリア Pariah（＊）なる最下級の族制があつた。（＊非人、穢多の意。）

これらの族制は更に多數の小族制に區分されて、複雜を極める。それが何れも排他的で、その所屬員は一定の生活樣式を取り、一つの組合組織の下に結合する。ベンガルでは、刹帝利族（クシャトリヤ）と毗舍族（ヴァイシャ）が大部分煙滅してゐる……しかし複雜過ぎたこの問題は、ここに詳述することを避けよう。

社會組織のかかる甚しい分裂と複雜化に次ぐ事實として、僧侶及び教師なる婆羅門は、西方諸國の僧族と異り結婚して增殖することと、また排他的で、他族制の侵入を喰ひ止めることを擧げなければならない。

印度に於けるこの廣汎な階級の固定について、その本來の誘因が何であつたにせよ、婆羅門の演じた役割が傳統の監理者であり、その持續上の民衆の唯一の教育者であつたことに疑ひはない。

ある人々に想像されるところでは、上述の四姓中最初の三族は、印度を征服した吠陀（ヴェダ）アリアン種族の後裔で、被征服民族たる首陀（スドラ）やパリアとの人種的混交を妨止した結果、かかる辛辣な分離策を講じたものだといふ。首陀（スドラ）族は吠陀アリアンに先驅した北方の征服民で、パリアは印度土着のドラヴィダ人であるといふ說もあるが、しかし、この種の臆說はまだひろく確證されてゐない。むしろ生活樣式が多種多樣で、固定することのない、より廣い西方世界に比して、ガンジス河流域の何世紀間もの無變化な生活狀態が、階級的差異を自然に招來したものであらう。

兎に角、族制が起つた。それがインド人の精神上に深い影響を與へたことは事實である。紀元前六世紀に佛敎の開祖者釋迦牟尼が現はれて、かう宣言した。

「ガンジスに注ぐ川が、聖河に水を混じてその名を失ふごとく、佛に歸依する者は婆羅門、刹帝利、毗舍、首陀の名を失ふべし」

その敎義は數世紀間インドに榮へた。やがてそれは支那、西藏、日本、ビルマ、セイロン、トルキスタン、滿洲に擴まつた。今日全人類の過半敎を對衆とする宗敎はこれである。それにも拘はらず、インドでは遂に敗北して、國外に追ひ出された。婆羅門の旺盛な勢力と、族制思想の頑强なために。

七　支那の進士制度

支那の社會組織に至つては、インドや西方諸文化とも異なる更に別な道を辿つて、僅かに荒削の類似點があるばかりである。

支那文化はインドよりも平和に組織されたばかりでなく、武人階級は社會構成上に、大きな役割を取らなかつた。インド文化と同じやうに、指導階級は知識人であつた。婆羅門ほどには僧侶臭くない代りに、一層官僚的であつた。

支那の有識階級なる官人は、婆羅門とは異つて族制、卽ち世襲の族籍ではない。言換へれば、官人の家に生れ

たがために官人となるのではなくて、教育に依るのである。官人は社會全階級の中から、教育と試驗に依つて選拔される。進士の息子と雖も、父の跡を繼ぐ特權はない。

その結果、インドの婆羅門族は、婆羅門の經典にも通じないで、精神的懶惰な上に、已惚ばかり強いに引きかへて、支那の官人は勤勉な精神的努力に由來する旺盛な精力を持つた。しかしその教育は全然支那古典の學究的研究に終始してゐたから、ただ保守的な權威を有するに過ぎなかつた。支那はアレクサンドル大王時代以前に早くも作り上げて歩き始めたその同じ道を、紀元一九〇〇年が來ても尙また歩いてゐるのだ。外敵は幾度か侵入し、王朝は幾度か交代した。しかし黄色文化の進路は常に不變であつた。

傳統的な支那社會組織には、僧帝の下に主要な四つの階級があつた。

（a）文學階級。

一部分は西方世界の官吏階級に、一部分はまたその教師及び僧侶階級に匹敵する。孔子時代には、その教育は弓術や馬術をさへ含んでゐた。儀禮と音樂、歷史と數學をこれに加へて、六藝、即ち六態の嗜みとなる。

（b）農民階級。

（c）工匠階級。

（d）商人階級。

しかし支那では太古時代から所有地を全部自分の子供達に分配する風習があつた。從つて他の諸國に見るやうに、小作人に地所を賃貸する大地主階級なるものは、支那史上には見られない。

支那では土地が世襲財産として小區分され、それが集約的に耕作されるのが常であつた。中には小作人に所有地を賃貸する地主はあつたが、大地主もなければ、その財産を永久に維持する者もなかつた。分割が重なつて、生活を支へ得ないほど、所有地が小さくなると、富裕な隣人にそれを賣渡して、大都會に出て行く。そして日傭稼ぎの群に投ずる。支那の都會には大昔から、かうしたまつたく恒産のない大衆があつた。かれ等は農奴でもなければ、奴隷でもなく、金に困つてその日その日の勞働に携はる連中である。かうした大衆の中から、支那政府は必要な兵士を徴發する。また運河を開鑿したり、城壁を築いたり、その他の工事を起したりするために、必要な勞働者隊を採用する。戰爭に依る捕虜や奴隷階級は、基督時代以前の西方諸國とは異つて、支那史上に重要な役割を演じてゐない。

西方諸國や、インドや、支那の社會組織に共通した事實がある。それは古代に於て、宮廷や庶民階級が、まだ讀書に親しまない前に、從つて思索することを知らない時分に、知識階級が偉大な勢力を發揮したことである。インドに於ては、有識階級の婆羅門族が、その排他的な理由のために、今日尙その勢力を維持してゐる。支那では、全然別な經路を取つて、文字が難解であるために、官人が大衆の上に勢力を揮つた。しかし複雜多事な西方

世界では、人種や傳統の錯綜のために、特に知識人が優越的な階級を組織する機會が遲延した。むしろまたそれが永遠に阻止された。西方世界では前述のやうに、教育が早く普及して、特殊階級の統制の外に溢れ出した。言換へれば、教育は族制や、僧族や、傳統の束縛を破つて、社會公衆の中に逃げ出したのである。その結果、讀書はまつたく單純化して、もはや文字は特殊階級の崇拜物乃至祕傳たることが出來なくなつた。

しかも支那に於て、同じやうな教育の普及が行はれなかつたには原因がある。それは支那文字の複雜且難解によるものでなければならない。

八　一萬年の摘要

以上六章に於て、われわれは一萬年乃至一萬二千年――卽ち三百乃至四百世代ほど――の長年代に亘る人類の全行程の概要を描いた。嘗て人口稀薄で、飢餓に迫りながら、食物を漁り求めた人類は、地球上の溫暖な地方に稀薄にばら撒かれた非社會的な動物であつた。それが今では舊世界の豐饒な地方に稠密に群居する夥しい社會的動物となつた。

勞働が始まる。奴隷が起る――生活の安全が到來する。この間、人類は石鏃を用ゐて野生の牧草や雜穀を刈つたり、泥細工の掘立小屋にそれを貯へたりした初期新石器期農業時代の獸皮を着た家族的族の原始狀態から出發して、紀元前四世紀の時代に到達する。その地域を言へば、地中海の沿岸全部やナイル河流域は元より、アジアはインドを越へ、更に遠く支那の沖積層の大平原に亘つて、耕作の沃野や、殷賑な都會や、宏大な寺院が擴がつた。そして交易の來往が行はれた。ガリー船や大三角帆船は賑な海港に這入つて來るかと思ふと出て行つて、陸地に近く沿ひながら、注意深く岬から岬へ、岬から島へと走つてゐた。エジプト船に乘組むフェニキア人は、かうして東インドへ、多分また更に遠く太平洋へとその航路を開拓した。ブッシュマン人が南アフリカの岩上に殘した壁畫を見ると、當時白人は一種の頭飾りを着けてゐた。これは一時アッシリアや北ヨーロッパに行はれたものであるが、アフリカには本來なかつたものである。隊商はアフリカやアラビアの沙漠を橫ぎり、トルキスタンを踏み越へて、遠國の貿易に努力した。かうして世界の新生活の中心地には、支那から絹が、アフリカから象牙が、英國から錫がはひつて來た。ダマスクスは既に緞子やダマスク鋼鐵を作つてゐた。

その當時、見事な亞麻布や、綺麗な色彩のある毛織物の織り方が世に知られてゐた。染色や漂白も知られてゐた。銅や、青銅や、銀や、金はもとより、鐵もあつた。極めて絢爛な陶器や磁器も作られてゐた。世界中の寶石の類はどの種類も採取されて、切られたり磨かれたりした。人は讀むことも書くことも出來た。河の流れを變へることも、ピラミッドを作ることも、數千マイルの長い城壁を築くことも出來た。

凡てこれが何百世紀かそこらの間に出來上つたといふことは、人間の壽命の六七十年に比べれば長い年月であ